Fate/star ocean sec 星海の弓兵

MATE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆａｔｅ／ｓｔａｒ　ｏｃｅａｎ　ｓｅｃ　星海の弓兵

【Ｎコード】

Ｎ３９０６Ｆ

【作者名】

ＭＡＴＥ

【あらすじ】

正義の味方を目指した男衛宮士郎は旧友の魔法により異世界へととばされる。そこでの少女との出会い。運命と星海の住人との会合。

第１話：光の勇者（前書き）

これはＦａｔｅとＳｔａｒＯｃｅａｎ　ｓｅｃｏｎｄｓｔｏｒｙのクロス小説です。内容は原作沿いを中心に進めたいなあと…
まだ士郎はエミヤになりきっておらず性格も少し異なります。
クロス作品に嫌悪感のある方は読むのをやめることをお勧めします。

第1話：光の勇者

此の地　エクスペル　天変地異に見舞われ　民苦しみとき
異国の衣まといて　光の剣持ちし者　遠方より現れ
世を救いたまうべし
世界はまわる、そして青年と一つの星の運命さえも

また俺は救えなかった。そう一人の子供でさえも…

確かに俺は力がなかったかもしれない、ただ俺は正義の味方になりたかった。それだけだった。じいさんの夢をかなえると誓ったあの日からただ変わらず自分が必死で求めてきた存在「正義の味方か…」

（何が正義の味方だ、俺がなりたかったものはこんなものではない。ただ救いたいそれだけのことだった。なのに結果はどうだ。十を救うために一を捨てる、そんな正義の味方があってよいのだろうか。俺は、オレは…）

その時、声が聞こえた。懐かしい声だった、十年以上前に共に戦った友の、そして俺の大切な存在の声だった。

「ハァ、やっぱりあんたはそんな風になっちゃったか。まあ予想は

してたけどね。」

「遠坂、やっぱり俺を捕まえに来たのか。」

俺は旧知の友にまるで同意を求めるように自然に尋ねていた。

「士郎、あなたはやりすぎた。魔術は隠匿すべきものであるにもかかわらず存在を公にしすぎた。協会はあんたの封印指定を決めたわ。そしてあなたを捕まえるのは私…。」

遠坂はせめて自分の手で俺をと考えたのだろう。それは彼女なりの優しさだった。

「遠坂、俺はお前に捕まるのならかまわないと思っている。俺は俺自身の…」

そこまで言ったところで遠坂に口を封じられた。

「士郎、私はあなたを封印しに来たわけじゃないの。さっきのは名目上の話。本当はあなたを文字通りこの世界から消すために来たのよ。」

一瞬俺は彼女が何を言っているのかわからなかった。しかし、すぐにある節におもいあたる。

つまり遠坂は俺をこの世界とは別の異世界に送ると言っているのだ。彼女は第二魔法についに至ったのだ。

「遠坂おめでとう、しかしそれはだめだ。そんな事をするとお前まで魔術協会に追われることになる。だから俺はお前におとなしくつ

かま…」

そこまで言ったところでまたしても俺はその先の言葉を続けることができなくなった。

「私がそこまで頭が回ってないと思った？私がここまでの十年間で何をやってきたかわかって言ってる？私は宝石剣を簡易版とはいえ完成させた。そして完成させる途中である封印指定の人物と出会った。そしてあなたを並行世界におくった記録と等価交換にあなたを模した人形をつくってくれたわ。」

「もちろん、高金利でね」などと笑いながらしゃべる。

「人形って、遠坂。人形じゃばれるんじゃないか？いくら封印指定の人が作ったといっても。」

俺は思ったことを素直に聞く

「それは大丈夫ね、彼女自身長い間体を換え続けその体の一つはすでに協会の内部に封印されているそうだから。つまり彼女の人形は協会のなかの人間でも本物か偽物か区別がついていないってことなのよ。」

俺は素直に驚きそしてそこまでして俺を助けてくれようとする目の前の友に感謝することしかできなかった。

「ありがとう、遠坂。なら俺はこの世界とは別の世界で自分の目指すものを、この世界で

は認められなかった正義を貫くことを誓う。それが俺がお前に出来

る最後の恩返しだと思うから。」

「勘違いしないでよね、士郎。あんたは周りの人を守る存在になる前にまず自分が幸せになることよ。それが私の命令よ。だから世界一幸せになりなさい。」

彼女は顔を真っ赤にしながら俺に伝える。そう、俺が今一番ほしい言葉を…

「いってらっしゃい士郎。」

たったそれだけ。しかし俺がもっともうれしい言葉を。

「わかったよ、遠坂。俺は幸せになる。そして自分の救いたいもののため、自分の大事な

もののために俺は戦うよ。じゃあ……行ってくる。」

その言葉を残し俺はこの世界から姿を消した。

第一話　「光の勇者」

遠坂の宝石剣が放った光に俺のからだは飲み込まれた。そのやさしい光に包まれ俺は彼女の言葉を繰り返し思いだしていた。

（遠坂は俺に幸せになれといった。正義の味方になりすべてを救お

うとした俺は俺自身の世界の悪役になってしまった。それは十を救う代わり一を捨てるというじいさんと同じ道を歩んだ結果だったのだろう。）

「まあ確かにこんなことを繰り返していたら遠坂に怒られちまうな。幸せになれか…。俺は大切な人を結果的には裏切ってしまった。」

大切な人　いつも本当の姉のように慕ってきた藤ねえ、俺の大切な家族である桜、俺の姉であり妹であったイリヤ、最後まで俺を心配し続けてくれた遠坂、そして朝焼けの光の中で愛しているといってくれたセイバー…いやアルトリア……

俺の頬を一筋の涙が零れ落ちた。
そう、本当に大切だった人にはもう会えないという現実、そしてそれを裏切ってしまった俺自身への怒り、そんな俺を救おうとしてくれた遠坂への感謝の気持ち、それが俺の感情を激しくゆさぶる

そして俺の中で気持ちの整理が整った頃には遠坂の放った宝石剣の光がおさまる

おさまったと同時に…

俺は落ちていた。そう単純な落下だった、ただし高さが尋常なものではなかった。
軽く見ても二、三百メートルはくだらない。遠坂家の呪い…
俺の中で「うっかり」という言葉が右往左往する。

「なんでさーーー。」

下には一面の緑が広がっている。おそらくはどこかの森だろう。かなり深い森のようだ。

（くそー遠坂のやつ、せめてもうちょっとましな場所にとばしてくれよ。）

俺はさっきまで感謝していた人物に対し、今度は怒りをおぼえる

実際にはたいした問題はない、『アイツ』に近付いた俺の身体能力ならあの森の木の枝をクッションにすればたいした傷もなく乗り切れるだろう。ただ精神的に……痛い……

行き着く先が理想郷でも正義の味方片道切符でもなく単なる激突、あまりに痛い。

そんなことを考えているうちに俺は緑へと落ちていく

眼前に木々の枝葉が広がりその一本一本が自分の体に触れているのがわかる。瞬間的に俺は体をねじり、頭と足の向きを完全に入れ替え足のほうから地面へと近付き……着地した。着地した…何の問題もなく簡単に……自分の体とは思えないほどのあまりの俊敏性に俺は自分の体の違和感を覚える。

（むう……なんかスゴク体が軽く動く、今だって落下の衝撃を少しでも和らげようと体をねじって足から落ちようとしたのに衝撃もなくすんなり着地できた。）

つまり、足から落ちるつもりが足から『無事』着地できたのだ。

「キャー。」

俺が自分の体に起こった違和感に顔を俯け考えていると遠くで若い女性の悲鳴が聞こえた。

女性の悲鳴がした方向を士郎は視力を強化した目で見る。そこには今にも怪物に殺されそうになっている少女が見えた。
少女と怪物との距離はすでに一メートルもなかったのだった。

（遠すぎる！走って行っても間に合わない、なら…）

俺は自身に暗示をかける言葉を紡ぐ

「投影開始（トレース・オン）。」

手元には黒い洋弓が現れ、そこには一本の剣がつがえられていた。
いや剣というには難しい異形の矢が番えられた。
俺は怪物に狙いを定め、少女が巻き込まれない程度に魔力を最小限に制御しつつ、その剣の真名を紡ぎ、怪物に向かってその剣を射た。

「赤原猟犬（フルンディング）！！」

一秒にもみたない間に放たれた一筋の閃光
それは光の塊となって怪物に襲いかかり光の渦へと飲み込んだ。

『ギャーーーーーーゥ』

怪物の断末魔の声が残るまま少女の目の前から怪物は完全に消え去っていた。

威力を最小限に抑えたため少女に対する衝撃の余波は彼女を後方に数メートルとばすだけにおさまった。

倒れる直前の光景……
少女にはそれはいったいどう見えたのだろう。まばゆいばかりの閃光は今まで自分が見たこともないような輝きを放ち、一筋の光が自分を今にも殺そうとしていた目の前にいたはずの怪物を射抜き、そして消滅させたのだ。

少女は打ち付けた体を近くにあった木に体を預け支えながら起きあがる。
少女は今しがたまばゆい閃光が起こった先を見る。

かなり遠いがそこには赤い異国の服をまとった男が一人たっていた。
『異国』　なぜ彼女がそう思ったのだろうか。少女がその結論に至るまで時間を要することはなかった。怪物を飲み込んだ光を見た瞬間にある伝説が脳裏をかすめたからだった。
それこそ少女が物心ついた子供の時から幾度となく聞かされ続けていた光の勇者の伝説。その伝説の一ページが今少女の目の前に実在している。
そしてなによりその伝説は少女自身の命を『伝説の光の剣？』で救ってくれた。

少女は今しがたおこった光景の中ある答えを思いつく

（勇者さまだ。）

士郎は呆然としている少女に歩み寄り声をかける。

「大丈夫だった？」

「はっはい、どうもありがとうございました。」

少女は勢いよく頭を下げる

「気にしなくていいよ。君みたいな女の子がピンチだったら助けるのはあたりまえじゃないか。それよりここは何処なのかな？ずいぶん深い森みたいだけど。」

士郎が少女に問いかける

（でもずいぶん変わった服装だなあ、これがここの土地の服装なんだろうか？）

士郎は場とは的外れな事を考えながらも自分の『現状』を把握するため少女に質問する。

「ここは神護の森です。あのっ、何かお礼をさせてください。アーリアという村がこの近くにあります。私の村においでください。」

聞いたこともない場所だった。

士郎はお礼云々は正直どうでもよかった。しかしここがはっきりとどういう場所か把握するために他人の協力も必要だと思い少女の言葉に甘えることにした。

短い会話の後、士郎は少女に案内されるまま村に向かって歩き出した。

少女は自分の隣を歩く男性があたりを見まわしては何かつぶやいて

いるのに気付いた。

「やっぱり見たことのない植物だ。それにさっきの怪物…」

士郎はアーリアという村に聞き覚えがなかった。さらに先ほどの怪物、それに見たこともない植物。いくつもの現象、事象が士郎を一つの結論にいたらせる。

（ここは地球じゃない…並行世界…いや違うな、俺がいた世界とは全く違う異世界だ。）

普段とは違い妙に勘のするどい紅い男、まああんな怪物を見ればあたりまえのことといえばそれまでなのではあるが……

頭の中をいろいろな想像、予想そして驚きが右往左往行き交いながら士郎と少女は村に向かって歩を進める。

「あ…あの。」

少女が足を止め士郎に話かける。その瞳には濁ったものなど一切ない。本当に純粋な子供のような輝きを秘めた瞳だった。

「お名前を教えていただけますか？わたしはレナ、レナ・ランフォードといいます。」

「俺は衛宮士郎。」

「エミ・ヤシローさん？」

レナという少女には発音しにくいのだろうか。

おもわず俺は苦笑いを浮かべ、ある冬の日の白い少女との出会いを思い出す

（そういやイリヤも最初会ったときちんと発音できなかったっけな）

「士郎でいいよ、レナ。」

少女は自分が勇者だと思っている男性が自分の名前を呼んでくれたことに感動し、その反面自分とは身分も立場も違う青年からの言葉に緊張していた。
しばらくの沈黙の後、レナは確認するように呟いた。

「シロウ…さん。」

それが世界をわたった青年とレナという少女の最初の会合であった。
士郎はレナのどこか照れた、そして緊張した様子に笑顔をうかべ、今だ肩を震わすレナと共にアーリアと呼ばれる村へと向かっていった。

アーリアへとむかう道の途中士郎は己の腕に傷があることに気付いた。大したことのない傷だったがレナも俺の傷に気付いたように心配そうにこちらのほうを見ていた。

（おそらく着地の直前に枝か何かで切ったんだろう）

俺が傷のことなど少しも気にしていないような態度をとっていると心配そうな顔をしたレナが近付いてきた、そして……

「シロウさん、腕の傷を見せてください。」

そういうとおもむろに俺の服の袖をめくりレナは俺の傷にむかって両の手のひらをかざした。するとどうだろう、彼女の両手の掌から光がたちこめたかと思うとみるみる俺の腕の傷はふさがっていった。俺の傷を包み込むような光は懐かしいような暖かい光だった。

「レナ、今のはいったい？」

「私には傷を癒す力があるんです。物心ついた時には出来るようになっていました。」

俺はこれが彼女の「魔術」なのだろうと思った。そして隠しもせず俺の傷を治してくれた目の前の少女に素直に感謝した。

「ありがとう、レナ。」

そう俺が言うとレナは顔を紅潮させうつむいてしまった。それから村までの時間二人は沈黙したままだった。

村に着くとレナに案内されるまま教会の前まで案内される。レナが川向うにある素朴な家々を指さしながら士郎に話しかける。

「これがこの村の教会です、私の家はあっちのほうにあるんです。」

「へえ、綺麗な教会だ。この村も緑がきれいでいい場所だね。」

士郎は正直な感想をのべた。しかし、レナにとってこの言葉はレナ自身が勇者だと信じてやまない青年が自分の大好きな村を褒めてくれたという事実に嬉しさでいっぱいになる。そして、またもや顔を

紅潮させうつむき黙ってしまった。

しばらくしてレナはうつむく顔をあげ士郎に話しかけた。
そこは川そばの村のいちばん奥にある大きな屋敷の前だった。

「士郎さん、すみませんがちょっとここで待っていてください。」

レナは士郎にそう言い残し

「待っててくださいね。」

と念を押すように繰り返してから大きな屋敷の扉を開け、中に入って行った。

「村長さま、村長さま―。」

レナは屋敷の中に入るとこの村の村長を呼んだ。しかし村長は用事で家をあけており不在だった。仕方なくレナは士郎を川沿いの自分の家に案内することにした。

家の前までくると

「どうぞ入ってください。」

「ここは？」

「私の家です。遠慮なくお入りください。」

レナは士郎の背中を押し、強引に家の中に入れる。

ガタッ！！　小さな音であったがそれは狭い家、さすがに中にいた女性が物音に気付いて家の奥から姿を現した。

「おかえり、レナ。」

それはレナの母親だった。
その女性は娘の横にいる真っ赤な服に包まれた士郎のことを不思議に思い、首をかしげてレナに尋ねた。

「そちらの方は？」

「シロウさんよ、おかあさん。私が神護の森で魔物に襲われているのを助けてくださったの。」

「まあ、魔物に！？レナ、危ないからもう一人で森には行かないでちょうだい！！」

「大丈夫よ。」
レナが両手をひろげて母親に自分に無事を示そうとする。

「何が大丈夫なの！」

レナの母親は少し興奮したように怒鳴る。その顔は本当に怒っている顔ではなくレナを心配して怒っているものだとすぐにわかる。
しかしそこで士郎が扉付近に立っていることを思い出した女性は少し恥ずかしそうに

「ごめんなさい、お見苦しいところを。それから娘を助けていただいて本当にありがとうございました。わたし、レナの母親のウェスタと申します。」

「俺はエミヤ　シロウです。シロウで結構です。それに、当たり前のことをしただけですから。」

深々と頭を下げる女性に士郎は当然といった顔で答える。
ウェスタは頭を下げてはいたが内心、お礼はなににしようか。（やっぱり料理が一番よね、男の人だからいっぱい食べるわよね。）などと考え自慢の料理の腕を披露しようとうずうずしていたのだった。

「いえいえ、そんな…娘の恩人に対して言葉だけじゃ言い表せない感謝でいっぱいです。どうか今夜はうちで夕食でも食べていってください。」

士郎は正直な話ここ数日間水以外何も口にしていなかったので女性の言葉に甘えることにした。

「さあ、どうぞどうぞ。」

ウェスタは一緒になり士郎の背中を押して家の居間へと案内する。
半ば強引な仕草に士郎は苦笑いを浮かべる。

「私は村長さまを呼んでくるね。シロウさん、ごゆっくり。」
そういってレナは家から飛び出していった。
当の本人のレナが出て行ってしまった。取り残されたウェスタと俺の間には少々重苦しい空気が残っていた。

レナは先ほど訪れた村長の屋敷の中で椅子に座った老人と話をしていた。
レナは自分が目の当たりにしたすべてを老人に話し終えた。

「私はその光の剣により命を救っていただきました、村長さまはどうおもわれますか？」

レナはなぜ、士郎の放った矢が剣に見えたのだろうか。
理由は簡単だった。士郎の放った矢が一筋の光となり、その光は太陽のよう眩しい光を放って魔物に襲いかかりその魔物を一瞬のうちに退治してしまったからであった。一筋の光、これが光の剣に見えたのだ。この村、いやこの世界にあのように神々しい光を放つものなど存在してはいなかったのだ。

老人はレナが嘘を言っているように思えなかった。そもそもレナのことは村長自身、実の孫のように可愛がってきた。だからこそ嘘が言えるような性格ではないことはよくわかっていた。さらに村長自身も伝説を古くから聞かせ続けられ勇者を信じていた一人だったからだった。
村長は長くうつむき考え込んだ後

「その方はいまどこにおられるのじゃ？」

「私の家にいます。今頃お母さんにごちそう攻めにあってるんじゃないかしら。」

村長は笑みを浮かべながら

「本当に勇者なのかもしれん。ワシもあってみよう。」

その言葉にレナは表情をほころばせた。

村長がレナとともにレナの家を訪れると士郎は苦しそうに椅子に腰かけていた。
それはウェスタの作った料理をすべて食べきった結果であった。
そう…それこそヤマのような料理の数々……
「満漢全席がどうしたー！！！」などとつっこみを入れたくなるほどの量だったのだから…（いや、一応作ったことはあるけどね…）

村長は椅子に腰かけている士郎に対し勇者の伝説の話をした。

「此の地　エクスペル　天変地異に見舞われ　民苦しみとき
　異国の衣まといて　光の剣持ちし者　遠方より現れ　世を救いたまうべし　という伝説がこの地には残っております。」

その言葉を聞き士郎はこみあげてくる満腹感を我慢しながらある答えにいきあたる。それは自分がこの国を救う勇者と思われているということだった。

村長は士郎に懇願するように

「シロウさん、あなたがレナを救うのに使われたという剣をどうかわたしに見せていただけませんか。」

士郎は困った。
（俺の魔術は異端だ。もし元の世界のように魔術教会のような組織があれば彼女たちを巻き込むことになってしまう）
投影魔術を見せてよいものなのかどうなのか、しかしレナは俺のために自分の力である治癒魔術まで見せてくれた。
（それにもし、この世界がもといた世界と同じように異質の魔術を

嫌う世界だったとしたらどうだろう、さっきレナは見せてくれたがそれは俺の魔術を見て、俺が魔術師だと理解したからではないか…それに俺は勇者でも何でもない。本当に勇者が現れるとしても俺じゃない。俺はそんなたいそうなものではない。）

非常にマイナス思考で疑り深いことが脳裏をよぎったが

しかし士郎はこの人たちの在り方（自分に接する態度）が信用するに値する人達ではないかと思った。彼らの目からは本当の優しさがにじみ出ていたのだった。それに先ほどレナが見せてくれた魔術も異常なまでの治癒魔術…この世界には魔術の秘匿という言葉はないのだろう。

（皆のための正義の味方「この世界では勇者か」にはなれないがこの人たちを守る剣にはなれるだろう。それにみんなが苦しんでいるということもほおってはおけないし、自分が幸せになろうと思うのならこの異変は解決しておかないといけない。なら少しでも自分のことを明かしておいてもいいだろう。今の状態なら魔力量も問題ないし「丘」の中の剣たちの工程も理解している……よしっ、まあさっきとは違う剣だけど剣自体は別のものでも問題はないだろう。さっきは矢に変化して飛ばしたし……）

そう考え俺は丘の頂上につき立つを一振りの、そして彼女との思い出の剣を投影した。

投影されたのはカリバーン…

「カリバーン」を投影することには二つの理由があった。まず一つ目に彼らの、いやレナの夢を壊したくなかった。二つ目は自分の投

影がこの世界でどれほどの精度でできるかを試したかったからだ。この世界に来て以来なにやら自分の体の勝手が違う。それもいい方にむかってだ。そんな中自分の投影がどれほど真作に近づけるのかに興味があったのだ。しかし検証するにはエクスカリバーは強烈過ぎた。とても俺の手に負えるものではなかったのだ。

「わかりました、お見せします。ただしこの力のことは他言無用にお願いします。」

「「はい、もちろんです。」」

レナと老人の声が重なる

「投影開始(トレース・オン)。」

その言葉と同時に一本の美しい剣が士郎の手中に現れる

その剣を見て老人は感嘆の声を上げる。

「これは素晴らしい。なんて美しい剣じゃ。」

長老が声をあげる。続いてレナ、ウェスタも声をあげた。まずその剣のつくりの美しさであった。素晴らしい名剣。いや名剣などといったものではない。まさに勇者の剣…聖剣……そしてさらには何もない場所からその剣を取り出した士郎の能力であった。あのような力はエクスペルに存在していなかったためである。

そしてレナ一同は皆士郎に椅子から立ち上がり士郎を囲むようにして頭を下げた。

「あなたは伝説の勇者さまです、どうか私たちエクスペルの民をお救いください。」

士郎は自分はそんなたいそうなものではないと説明したが彼らの目の輝きを抑えることはできなかった。

第1話：光の勇者（後書き）

小説を書くって難しいですね。クロスの場合両方の作品にファンがいるのでどちらの作品も汚さないようにまとめるのって難しいです。これってまとまってるのかなあ…

第2話：魔石（前書き）

運命と星の海のお話…第2話です

第2話：魔石

（俺は勇者なんかじゃない。ただ世界の異変を恐れるこの人たちを安心させてあげたい。勇者ではない、でも守りたい。この世界すべての人は守れなくてもここにいる人たちぐらいなら俺でも守れるかもしれない。）

自分を勇者だと信じてくれるこの少女たちだけでも守りたい。

「俺はやはり勇者なんかじゃありません。しかし俺がここにいるのも何かの縁でしょう。俺のできることであればお手伝いしましょう。」

俺は目の前にいる二人の親子と老人にむかって目をしっかりと向け、答えた。

「「本当ですか！！」」

士郎の言葉にレナと老人が感嘆の声を上げる。二人の顔は士郎を勇者と信じ切っており、彼らの目には喜び、そして期待に満ちた色が色濃く鮮明に浮かんでいた。

たとえて言うならば、俺が返事をする以前の目が『金欠状態、寝起きの遠坂の目』とするならば今現在の眼は食べ物を前にしたセイバーの純粋無垢な子供のような瞳であろうか

御馳走を前にしたセイバーの目をした、いや喜びを瞳に映らせた二人にむかって俺は一言付け加える。

「ただしお願いがあります。」

「お願いとは何ですか？シロウさん。」

俺の言葉に少し上目づかいに心配そうに聞き返してくるレナ

「それだよ、レナ。俺のことは士郎でいいって最初に言ったじゃないか。呼び捨てにしてほしいんだ。俺もレナのことを呼び捨てにしているんだから。」

「でっでも……、よろしいんですか？」

レナはあたふたと手をばたつかせ目をパチパチと開いたり閉じたりと動揺する。その動きの一つ一つには喜びと焦りのようなものが見え隠れしていた。

「いいに決まってるじゃないか、それと敬語も禁止！！他人行儀は嫌いなんだ。」

レナは俺の友達宣言に顔いっぱいに笑顔を浮かべる。

「わかったわ。これからよろしくね、シロウ。」

「ああ。よろしくな、レナ。」

この二人の会話を聞いていた老人と母親の二人は顔を見合せやわらかい笑みを浮かべた。老人は自分の孫の成長に喜びを感じる祖父のように、そしてたった一人の娘の最大の笑顔を受け止める母親が今この場にひとつの家族という空間を作り出していた。

それからしばらくして、俺は先ほど最初にレナと出会った神護の森へと足を運んだ。
なぜあんなに自分の意図した以上に体が動いたのか、何か手掛かりがあるのではないかと考えたのだ。
なぜなら森を抜けたあたりから体の感覚が元の俺のものに戻っていたからだった。
それには一度あの森にむかい調べる必要があった。たとえわからなくとも行ってみるだけの価値は十分にあるはずなのだから。

森についた俺は自分が先ほど着地したあたりに近付き周囲を見回してみた。しかし、体には何の変化もなく先ほどとは違い、体の感覚は元の俺のもののままだった。

そこで俺は自分の周囲の地面、草木、そして花々に解析をかけてみる。もしかしたら周囲の環境が自分に特別な力を与えるような成分を発していた可能性も捨てきれなかった。しかし、その考えもまちがっていたようだった。
周囲の植物、地面、岩などからは何も特別なものは発せられておらず、ただやわらかい自然の香りのみが広がっていた。

俺は少し森を歩いて回ったが体が先ほどのように動くようなことはなかった。その途中途中原因のありそうなものには解析をかけ一つ一つ検証してみてはいたのだがそのどれもが当たり前の情報を俺に示すだけで、『特別』なことを教えてくれる要素はなにもなかった。
結局俺はなにもわからずアーリアに戻ることになった。

士郎が森に出かけたあと、レナは家で母親といっしょに夕食の準備をしていた。

レナは調理用の水を汲みに家の前の小川まで来ていたがその時背後に禍々しい気配を感じた。その気配には殺気は含まれていないもののどこか言い表せない狂気が感じられた。

レナはとっさに反応し後ろを振り向く。そこにはレナのよく知った顔がレナを見つめていた。

背中まで伸ばした長い髪、１８０ｃｍ以上はあろう長身、整った顔立ち、そして普段は着ないような真っ赤なコート。

それはアーリアから程近い町、サルバの鉱山主の息子アレン・タックスであった。

その男はレナにむかって口を開く。

「ちょうど家まで迎えに行こうと思っていたところさ。ついに僕らの婚礼の儀式の準備が整ったんだ。」

アレンがそういいながらレナの肩を強くつかむ。

「いっ痛い！アレンはなして。」

彼のレナをつかむ力のあまりの強さにレナは激しく抵抗し、アレンの腕の中からぬけだす。

「アレン、その話は以前断ったはずよ。確かにあなたのことは好き。でも恋愛の対象としてではなく友人としてなの。結婚とかいうのとは違うものなの。」

「僕はずーっと考えていたんだ。そして理解した。レナ、君は僕と一緒になることが一番幸せなことなんだと。」

アレンは笑みを浮かべたままだった。しかしどこか彼の笑みは不気味なもので人間としての感情が感じられないものだった。

「レナ、こっちにおいで。そして向かおう、僕たちの始まりの場所へ。」

アレンが声をかけてくるがその声にも人間としての感情が一切入っていない。いうなれば、人形のような感じなのである。目に光が感じられない。

危うい目、恐ろしい目、悪い表現ならいくらでも浮かんでくる……

「アレン、あなたどうしちゃったの？」

明らかに様子のおかしいアレンに対しレナは憮然と尋ねる

「クッ、どうしただって？僕は普通さ、いつも通りのアレンさ…どうしたっていうのは僕が聞きたいくらいだね。レナ、君はどうして僕との婚礼の儀をそんなに拒むんだい？君にとって一番は僕と一緒になることなのに。」

そういいながらアレンは不気味な笑い声をあげ彼女に近付いていく。しかし顔は笑っているのだが目が笑っていない。アレンの眼はひどく濁っておりまるで視点があっていない。レナに声をかけているはずなのによそを向いているようである。

レナはそんなアレンに恐怖を感じていた。
レナはとっさに母のいる家に向かって逃げようとした。しかしそれはアレンにより阻まれてしまう。

「レナ、どうして逃げるんだい？」

アレンはレナの腕を掴みなおし、レナを再び拘束する
レナはその腕から逃れようと腕を振りもがいてみるが先ほどのアレンの力とはくらべものにならない力で拘束されて身動きが取れない。レナ自身も体は鍛えており、そこらの男には負けない力があるつもりだった。いや、そこまで言わなくとも自分自身を守れる程度には武道もやっているし、体力もあるつもりだった。
しかし、この『狂ったアレン』の前には自分の力は無に等しかった。

「なにをしておるんじゃ、アレン。」

この村ではおなじみになった、しわがれた老人の声が発せられ、村長がかけてくる。その後ろにはウェスタの姿もあった。

「これはこれはレジス村長、見てわかりませんか？これから僕はレナと共にサルバに戻り婚礼の儀をあげるんですよ。」

アレンがレナを左手で拘束したまま村長たちの前にでて答える。だが、レナが逃げることのできるような隙は一切見せない。

「こんなことをして、レナをどうするつもりじゃ。」

「だからさっきから言っているでしょう、婚礼の儀を挙げるのだと。これ以上あなたたちにかかわっている時間はないんですよ。」

そういってアレンはレナを引きずるようにして村の外へと向かって行く。

「レナーーーーー！！！！！」

ウェスタは叫んで、レナを取り戻そうとアレンに掴みかかる。アレンはそんなウェスタの様子に鬱陶しそうな視線を向け、彼女の頭を腰につっていた剣の柄で強打した。大きく振りかぶられた重い一撃を何の抵抗もできない女性に対してふるう。
普段のアレンには到底出来るようなことではない非情の一撃。

「ウグッ……」

短い悲鳴の後ウェスタは地面に倒れこんでしまった。

「おかあさん！！！！！！！」

レナは母の身を案じ、母に寄り添おうとアレンの腕からぬけだそうとする。それもまたアレンの右手刀がレナの首筋に振り下ろされることにより意識をうばわれることでかなうことはなかった。

レナは意識を奪われる直前、ある青年のことを思い浮かべる

（助けて、シロウ。）

しかし士郎は今この村にいなかったのだった。もし士郎が森に出かけるのがあと半刻遅ければ結果は変わっていたかもしれない。これは運命…避けることのできないものだったのかもしれない。偶然ではなく必然…結果、それだけだった。

レナが連れ去られてからちょうど半刻程経った頃であろうか。士郎は神護の森から村に戻ってきた。

そこで士郎が見たものはレナの家の前にできた人だかりと頭から血を流し倒れているウェスタ、それを介抱するレジスの姿だった。

「何があったんですか、レナは？」

士郎が尋ねるとウェスタが頭から血を流しながら答えた。

「レナを…レナを助けてください。アレンに連れて行かれてしまったんです。どうか……どうか助けてください！！！」

すっかりとり乱して叫び狂うウェスタに対し士郎は気持ちを落ち着けるようにと声をかける。

「落ち着いてください。もちろんレナは助けます、そのアレンとは何者ですか？」

少し我を取り戻したウェスタは一言一句に感情を移入させ説明する。

「アレンはサルバという町にある鉱山の鉱山主の息子です。村を北に一本道をまっすぐ行くと鉱山のあるサルバという街に行き当たります。アレンはその町では名家の生まれなので行けばすぐにわかると思います。そういえばアレンは今まで見たこともないような真っ赤な…そう、ちょうどシロウさんのマントと同じような色のコートを羽織っていました。」

ウェスタがそう教えてくれる。

士郎は彼女の言葉を聞くと、すぐに村を飛び出した。ウェスタには落ち着けといったもののシロウの心の中ははらわたが煮えくりかえるような怒りと不安でいっぱいなものだったのだ。

（俺が守りたいと思った人が今危険な目にあっている。なぜ俺はその場にいなかった……）

「くそっ、すぐ行くからなレナ。同調・開始（トレース、オン）」

士郎はすぐに自分の足に強化をかけ、自分の最速のスピードでサルバへと向かって行った。

士郎が町に着くと近くを歩いていた人にアレンの家の場所を訪ねる。しかし家を訪れてみるとその家の中には人の気配がせずどうしていいものか思案していると…

「アレンならさっき女の子を連れて鉱山のほうに行きましたよ。」

一人の女性が近寄ってきてアレンの行き先を教えてくれた。

士郎はその女性に礼を言い、鉱山のほうへ駆けて行った。

レナが目を覚ますとそこは昔レナが小さい頃来たことのあるサルバにあるアレンの部屋だった。見慣れない天井……。改めて自分がどういう事態に陥っているのかレナは理解した。
さきほどアレンに手刀をおとされたところがひどく痛む。
そして体を起こし扉のほうを見るとそこには自分を気絶させ連れ去った男アレンが座ってこちらをじっと見つめていた。

「どうしてこんなことをするの、アレン？」

『アレン』と呼ぶ声にも疑問が浮かぶ。本当に目の前のこの男はあの『アレン』なのだろうか。そんな考えがレナの心の中に浮かぶ。

「言ったはずだよ、レナ。僕たちの婚礼の儀を挙げるためだよ。」

「それは断ったはずよ、あなたのことは友達としてしか見てないって。」

レナは立ち上がりアレンに抗議するがアレンは笑みを浮かべたまま人形のように無表情にレナのほうをみている。
レナの言葉にアレンは耳を傾けようともせず

「レナ、しばらくここで待っているんだよ。すぐに迎えに来るからね。」

そう言ってアレンは鍵をかけ部屋から去って行った。
残されたレナは何か逃げ道がないかと窓のほうに寄って行く。しかし窓には格子がされており脱出は無理だった。
まあたとえ格子がされていなくてもここは二階、飛び降りれたとしても落ちた衝撃で痛めた足ならすぐに捕まってしまうだろう。

（今のアレンはどこかおかしい。いつものアレンじゃないわ。）

レナはアレンの異常性に疑問を持ったが今はそれよりここから逃げる方法をさがすのが先だった。

レナが逃げ道がないか探しているとアレンが部屋に戻ってきた。アレンの服装は先ほどと同じ真紅のコートに身をつつんだものであったが胸のあたりから怪しい靄のようなものがただよっているようにレナには思えた。

「さあ、レナ行こうか。僕たちの婚礼の儀式に……」

そういうとアレンは無理やりレナの腕を引っ張り連れて行こうとした。

「痛っ…やめてアレン！もうちょっと普通にできないの。女性に対する態度じゃないわよ。」

「君がおとなしくついて来てくれるのなら、それ相応にあつかうよ。」

レナは今のアレンは刺激しないほうがいいと考え、指示に従いおとなしくついて行った。

もちろん逃げるタイミングがあればそうするつもりだった。しかし、アレンはレナの腕をしっかり掴み逃げる隙など一切見せてくれる様子はなかった。

レナが連れてこられた場所は坑道の奥に隠された部屋の中にある教会のような場所だった。こんな場所で行われる婚姻の儀など普通のものではあるまい。

レナはこれから起こることを思い浮かべると背筋が寒くなるのを感じた。

教会の祭壇の前に着くとアレンは急にレナのほうに向きなおり無理やり祭壇の上に押し倒した。そして、祭壇の上に鉄の鎖でレナの両手両足を固定する。

その直後、レナはアレンから青白い煙のようなものが湧き出るのを見た。

レナ自身、意識はしっかりしているのだが体を拘束されゆうことをきかない。

「さあレナ、君も僕と共に生きることを誓うんだ。」

アレンはそういうとレナに指輪をはめようとする。

「や……めて…、ア…レン……」

レナが言った時、教会の扉が勢いよく開け放たれた

「やめろ！！！レナをはなせ！」

そこには赤い聖骸布を身に付けた士郎が立っていた。その光景はレナの目にはどのように映ったのだろうか。

「貴様何者だ！」

アレンは突然の乱入者に動揺しながらもしっかり士郎を見据え怒鳴る。

「お前のようなやつに言う必要はない。それよりレナをこちらに返

すんだ！！」

「レナは僕と夫婦になる、共に生きるんだ…誰にも邪魔はさせない！！！！！」

そう言ってアレンは持っていた剣で士郎に斬りかかってくる。しかし、単調な剣筋では士郎をとらえることはできなかった。
アレンが特別弱いわけではない。しかし、士郎には幾度の戦場を駆け抜けて培った努力のみにより構築される最高の眼、第六感「心眼」があった。

「幾度の戦場を越えて不敗」…士郎が今まで生き残り勝ち続けたという事実であり真実の言葉だった。

士郎が干将・莫耶を投影しアレンの剣を体を捻りながら円の動きでさばく。士郎の目にはアレンの一足一刀の動きが理解できていた。
彼の筋肉の収縮、足の動き、神経の軋み、その動きの全てが士郎にアレンの次の攻撃を予測させ、ほぼその通りに彼の剣は士郎へと吸い込まれていく。そしてアレンが大きく振りかぶった瞬間大きな隙もできた。その隙を見逃すことなく士郎はアレンを袈裟切りに斬り捨てようとした。知れと同時にレナが叫んだ。

「やめて！シロウーー。」

その叫びに士郎はとっさにアレンに向けていた剣を止める。
その時の士郎の剣とアレンまでの距離は首の皮一枚のところまで接近していた。
アレンの首筋にはうっすらと紅が糸を引いていた。

「どうしてとめるんだ、レナ。あの男は君に乱暴をした男だぞ！君

を傷つけた！！」

士郎もどこかネジが外れてしまったようにレナに対し声をあげてしまう。普段の冷静な士郎にとってはあり得ないことだった。しかし、このときは何故か目の前にいる男が異常に許せなかった…

「アレンは何かに操られているの、なにかアレンの体から嫌な感じのものがあふれているの。」

そういわれ士郎は自心を取り戻しアレンの体のほうに解析をかけてみる。するとアレンの着ているコートの胸ポケットのあたりに魔力を発している石のようなものを発見した。

「なるほど…あれか。ならあれを無効化すればいいのか。でもレナはそれでいいのか？この男は操られていたとはいえ君に暴力をふるい君のおかあさんまでも傷つけたんだぞ。」

「いいの、お願い…シロウ。アレンを…アレンを元のアレンに戻して。」

それはレナが『本当のアレン』を信じているからこそ発せられた言葉だった。

「わかった。君がそういうのならそうしよう。」

そういうと士郎は一本の歪な形の剣を投影する。そしてその剣をアレンの胸に突き刺した。

（破戒すべき全ての符〈ルールブレイカー〉！！）

士郎は心の中で神話の時代の最高の魔術師の宝具の真名を唱え歪な短剣を突き立てる。するとアレンから漂っていた不気味な魔力が霧散していった。その直後、そこにはアレンが倒れていた。地面に落ちた石はもうただの石片と変わっていた。そして、アレンのその顔からは先ほどの何かに取り憑かれていたような邪悪な気配は抜けていた。

魔力が消失して、しばらくしてからアレンが目を覚ますとそこにはレナと一人の赤いコートを着込んだ男が座っていた。

「僕はいったい……」

アレンは顔に手をあて何があったのかわからないというふうに首をかしげる。

「アレン、あなたは魔石にあやつられていたの。」

レナはアレンを倒した士郎から事の次第の全てを聞いていた。彼女自身、アレンはこんな人ではないと信じていた、それが士郎の言葉により安堵の心がレナの中には芽生えていた。

「で、レナはいったいなぜこんなところに？ここはサルバ坑道の中……だよね？」

「お前は魔石にあやつられ、レナを連れ去りここに連れてきて無理やり拘束し婚礼の儀を挙げようとした。魔石は俺が破壊した。」

士郎の言葉にアレンの顔から血の気が引いていくのがわかる。
しかし士郎は本当のことを目の前の男には伝えておかなければならないと考えすべてを話した。
そしてアレンはその話を聞くと自分のやったことが信じられないという表情になる。

「そんな…僕はなんてことを。レナすまない、僕は…ボクハ…」

「アレンは気にする必要はないわ。あやつられていたんですもの。それより何があったのか聞かせてくれる？」

その言葉にアレンは少しほっとしながらも申し訳なさそうに話し出す。

「あれは少し前に鉱山の視察に行った時だった。坑道の奥で光り輝く石を見つけたんだ。そのあと煙のようなものがその石から溢れて来て……そのあとのことは……すまない覚えていないんだ。」

士郎はその話を聞きながらアレンに話しかける。

「あやつられていたとしても君のやったことはしてはならないことだ。しかしレナはそれを許すと言っている。しかし君が彼女や周囲の人を傷つけたのも事実だ。なら君は迷惑をかけた人に償う義務がある。」

「わかっている、もちろんそのつもりだ。えっと…きみは……？」

そこでアレンは自分が話している目の前の男が自分が全く知らない人物であることに気付く。

「士郎だ。今はレナの村で村長の家に世話になっている。」

「そうか、ありがとう…シロウ。君には感謝してもしきれない。君のおかげで僕は取り返しのつかないことをしなくてすんだ。本当にありがとう。」

アレンはそういうと

「僕は今からアーリアの村のみんなにすぐに謝りに行く。どうか僕に君たちを村まで送らせてくれないか。」

アレンにそういわれ士郎とレナはその言葉に甘えることにし、アレンの馬車でアーリアへと戻ることにした。馬車から見える景色は先ほどはレナを助けるということでいっぱいで周囲が見えていなかった士郎にとって、とても新鮮なものだった。

士郎がアレンの言葉に甘えたのには意味があった。アレンは償いをするためだといった、それは迷惑をかけたすべての人にということだ。ならば自分が迷惑をかけた士郎やレナがそれを断ると彼が本当の意味でレナに償えないと考えたからだ。もちろん、これだけで彼は納得しないだろうが…

アーリアへの帰りの馬車の中でアレンはレナに聞こえないような小さな声で士郎に話しかけた。

「君はレナを本当に大事に思ってくれているんだね、シロウ。君ほどの強さがあり、レナを大切に思うことができるのなら君にレナをまかせてもいいと思うよ。そもそも僕はもうふられている、レナの表情を見ていても彼女は君のことが気になっているみたいだしね。」

その言葉に士郎は苦笑いになるがレナが自分を見て笑みを浮かべるのを見て紅潮してしまった。その時のレナの表情はそれほどまでに美しいものだった。あの朝日の中の俺のたった一人の従者、いやもう二度と会うことのない恋人の笑顔、そんな光景……

そんな士郎を見てレナのほうも同じように紅潮してしまった。

アーリアでは士郎とレナの二人の帰りを今か今かと待っている人たちが村の入り口に集まりサルバのほうを見ていたが馬車に乗って帰ってきた二人の元気な姿をみて歓喜の声をあげた。

第2話：魔石（後書き）

なんかキャラの言葉づかいにかたさが…

第3話：クロス（前書き）

なぜだろう？

士郎がクロードより使える存在だ。仮にも士官だったやつより書きやすい。なぜだろう？

第3話：クロス

レナは村に帰り，母親の胸の中にやさしく抱きしめられる。
レナにとってそれはかけがえのない母の本当のぬくもりだった。
抱きしめられたその腕の中でレナは士郎に自分の秘密を明かそうと決意していた。
彼に話したとして、たとえ彼が自分を突き放すようなことがあったとしても今の母のぬくもりは本物だった。
それを考えるとレナはどんなことがあろうと立ち向かえる気がした。

レナが母の胸に抱きしめられている近くでその親子の様子をやさしい笑顔で見つめる士郎がいた。
やさしい笑顔を浮かべる士郎のもとに村長が近付いてくる。

「レナを助けていただき本当にありがとうございました。」

「いえ、前にも言いましたが当たり前のことをしたまでです。俺は救いたかった……それだけです。」

その言葉に村長は自分の考えは正しかったのだと心の底から喜んだ。
その夜、レナの家に村長を招いての四人で夕食をとった。食事の後、椅子に腰かける士郎のそばに村長が近付いてくる。

「シロウさん。あなたの力、そして正義の心を見込んでお願いします。この世界の異変の元凶である『ソーサリーグローブ』の調査を

お願いできないでしょうか？」

士郎は下を向きじっと考えた。そして…ゆっくりと首を縦に振る。

「わかりました。俺はあなたたちの思っている勇者ではありません。しかし俺には人々が苦しむのを黙って見ていることはできません。」

士郎は心の中で

（この世界で、もし十を救うために一を捨てる必要があるのなら、その一は何の罪もない人を傷つける魔物どもだ。この世界でなら本当の意味の勇者にではなくじいさんの目指した正義の味方になれる……そして切り捨てる一には何の未練もない！！いや…本当はあるのかもしれないな…でも俺にとって守るべきはレナたちだ！）

「シロウさん、やはりあなたは光の勇者です。その誠実であたたかい心、本当の勇者にふさわしいものです。」

その言葉は士郎にとってとても嬉しいものだった。

（この世界の人達もあたたかい）

「あ…りがとう…ございます。」

村長の言葉に士郎は嗚咽の混じった言葉を紡いだ。

村長はその様子を見て、「この青年は本当に純粋な心をもっているのじゃな」と心の中でつぶやいた。

しばらくの沈黙が続いたあとレジスが話をきりだす

「さて、早速ですがシロウさん。ご出立はいつになさりますか？」

その質問に士郎は一呼吸置いてから答えた。
「では明日の朝にでも。」
「では今夜はゆっくり体を休め、明日の出立にそなえてくだされ。」
そういうとレジスは士郎に頭を下げた後自分の家へと戻って行った。

アーリアでの最後の夜、俺は村長の家に泊めてもらうことになった。食事はレナの家で食べさせてもらった（かなり多かったが……うっぷ……）のであとは寝るだけだと思っていた。
案内された部屋で次の日の旅の準備をしていると村長が部屋にノックをして入ってきた。
部屋にきた村長は俺に風呂にでも入って体を休めてはどうかと言うので、ありがたく使わせてもらうことにした。
俺が風呂に入り上着を脱いだところで己の体の異変に気付いた。象徴は昼間レナに傷を治してもらったところにあらわれていた。
それはまるで聖杯戦争時の俺にあったような令呪のような紋様だった。そして、それは俺の目の前で鼓動をしたように見えたのだ。
「なんだこれ、形は令呪みたいにもみえなくはないけど……。何か違う気もする（まあ何の根拠もないけど…）、この紋様から全身に魔力が供給されているみたいだ。」
俺は昼間のことを思い出す。そういえば一度だけ体がいつもより異常なくらい動いたことがあった。

そう、レナがあの怪物に襲われる直前、自分がこの世界にやってきた時の森の中のことだ。

（この紋様が関係しているのだろうか…）

俺はしばらく考えていたのだがやはり疲れがたまっていたのだろう。もちろんこの世界に来てからだけのものではなく封印指定狩りの魔術師から逃げていた時からの疲れもあった。そのために風呂から出るとすぐに用意された部屋の布団に入って眠ってしまった。

どのくらい時間がたったのだろうか。なにやら物音が起こり俺は目を覚ました。それは何か硬いものが同じような硬いものにぶつかっているような音だった。

俺が気になり窓の外をみるとレナがこちらに向かって小さな石を投げようとしていた。

「レナ、どうしたんだい？こんな時間に。」

急に出た俺の顔にレナは少し驚きつつも

「こんな遅くにごめんなさい。あの…、シロウ…。話があるの。」

そういって話をきりだした。

「別にいいけど、じゃあちょっとそこで待ってて。」

そういうと俺は階段を降り、レナのいた窓の下のほうにむかった。

「ごめん、待ったかい？」

「ううん…えっと、あっちの橋のほうで話しましょう？」

「わかった、じゃあいこうか。」

そういって俺たちは村を両断するように流れる川に架かる橋の欄干に腰をかけた。

そして意を決し、レナは勇気を振り絞って話し始めた。

「シロウ……実は私は本当はこの村の人間じゃないんです。私は七年前のお父さんが死んだ夜、お母さんと村長さまが話しているのを聞いてしまったんです。」

「じゃあウェスタさんは…」

「うん、本当のお母さんじゃないの。お母さんは私がそのことを知っているのを知らないみたいだけど……私はみんなとは違います、耳の形も違っているし他の人にはない力をもっています……。」

「力って、もしかして…」

「うん、シロウの傷を治した治癒の力。だから…」

そこまでレナが言うと士郎はレナに言い聞かせるようにはなしかけた。

「レナ、君はお母さんが大好きなんだろう。そして、お母さんも君を愛してくれている。それだけで充分じゃないか。それに君は自分の力を異端の力と嫌っているようだけど…レナ、君の力は素晴らしいものだ。傷ついた人を癒すやさしい力だ。」

「でも…。」

「いいかい、レナ。俺は昔未熟だった自分が死にかけたときにちょうどレナの治癒の力のような力で命を救ってもらったことがある。そして、俺も前にいた世界では異端の力を持っていた。でもその力のことを嫌ったことなんて一度もない。俺はこの力のおかげで大切な人に出会い、共に戦うことができた。」

「シロウの力…」

「俺の力…それはレナは何度もみているんだよ。」

そういって士郎は自身の暗示の言葉を紡ぐ

「投影・開始（トレース、オン）」

そういうと士郎の手には一本の剣が握られていた。

「その剣って…」

「そう、これが俺の力。一度見たモノ、武器の類、特に剣に関してはそれと同じものを本物に近い形で一瞬で作り出すことができる。」

（レナは自分の秘密を俺のことを恐れることもなく隠さず教えてくれた。なら俺もそれに答えるには自分の秘密を見せないといけない。）

俺の力を見たレナは

「シロウの力は世界を救う素晴らしい力よ…。私の命を救ってくれ

た……シロウ…私をシロウの旅に一緒に連れて行ってほしいの。」
そう言ってくれた。

「でも…レナ、それは……」

「いいの、シロウが本当の勇者じゃなくても。私を救ってくれた力は勇者の……勇者の力だったわ。私にとってあなたはもうかけがえのない人。あなたがさっき見せてくれた力で私わかったの。私はあなたが傷をおうのを見たくない。シロウが戦うのであればわたしがシロウの傷を癒す。だから……」

その決意に燃えるレナの目を見て士郎は一方的に断ることはできなくなってしまった。

士郎はしばらくの思案の後…

「わかったよ、レナ。俺に君の決心を止めることはできない。でも約束してくれ。絶対に無理をしないこと。そしてお母さんにきちんとそのことを伝えること。それが俺からの条件だ。」

「わかりました、帰ったらお母さんにきちんと伝えるわ。」

そういって俺とレナはうちへと帰って行った。
隣にいる少女はうつむきがちに歩くがその横顔には決意のようなものがさっきとは違いはっきりとあらわれていた。

次の日の早朝、レナは荷物を持って村長の家に俺を迎えにきた。
どうやらレナは昨晩ウェスタを無事説得したようだった。
しかしレナの隣にいたウェスタの眼には不安といったものはいっさ

い映っていなかった。彼女もこんな日が来るのをどこかで想像、いや理解していたのかもしれない。

そして出発の朝がきた。

「体に気をつけるのよ、レナ。それからすべてが終わったら必ずまたこの村に戻ってくるのよ。あなたの家はここにあるんだからね。」

そうウェスタがレナに言う。

そして村長が俺のほうに何か筒のようなものを持って近付いてきた

「シロウさん、レナのことよろしくお願いします。それとまずはクロスという町を訪ねてくだされ。クロスは昨日のサルバをさらに北に行った土地にあります。」

そういうとさっきの筒を俺の隣にいたレナに渡した。

「村長さま、これは？」

「これはクロス王への紹介状じゃ。みせればきっとクロス王国の協力を得られるはずじゃ。」

「わかりました、きっと王様の協力をえてシロウと一緒にこの世界の異変を解決してくるわ。」

そういうとレナはこちらに向き直り俺をうながす。

彼女は名残惜しそうに母のほうを見ていたがすぐに

「いきましょう、シロウ。」

そういって俺たちは村の出口へと向かって行く。
しかし、それを村長に呼び止められる。

「シロウさん、レナ、お主たちまさか歩いてクロスまで行く気かの？クロスまではかなり遠い。そこの教会の前につないである馬を使えばよい。馬に乗れば丸一日あればクロスにつくじゃろう。」

「ありがとうございます。遠慮なく使わせていただきます。」

そういって二人は村長に礼を述べアーリアをあとにしたのだった。

村長の言ったとおりクロスには馬を走らせちょうど夜頃に着くことができた。
しかし急いで馬を走らせたため俺たちはくたくたになっていた。

とりあえず俺たちはクロスにある宿に泊まることにした。もちろん異世界からきた俺がこの世界のお金を持っているわけもなく……

（ユーロならあるのに……）

そう俺がポケットに手をつっこみうな垂れて困っているとレナが声をかけてきた。

「シロウ、お金なら私が村長さまからいくらか頂いてきているわ。」

そういってレナはポケットから何枚かの紙幣を取り出す。

（今日のところはこれで何とかなったけどこれから旅をするのにそれだけじゃ心許ないな。まあそのことは明日クロス王に会ったあと考えるとするか）

そして俺とレナはこの街の一番安い宿に泊まることにした。
部屋をとろうと宿屋で尋ねてみると

「すいません、お客さん。部屋が一つしか空いてないんですよ。」

（それは困る。レナは女性で俺は男…さすがにそれはちょっと…）

「なら俺は外で…」

そう俺が言おうとすると、レナが俺の手を掴み

「何言ってるの、シロウ。さあ部屋に行きましょう。」

そういってレナは俺たち二人分の宿代を店主に支払い逃げようとする俺を無理やりひきずって部屋へと連行していく。
その時の俺はいったいどんな顔をしていただろう？きっと某ＣＭのチワワのような顔だったのだろう……

俺はレナの有無を言わせない態度に逆らえず、あきらめてレナの意向に従うことにした。

部屋に着くとその部屋はベッドが一つとソファーが一つ、それにテーブルが一つといったそれなりに広い部屋だった。

（本当に一番安い部屋だったのだろうか…俺にはこの世界の物価が全く分からないしな……）

俺がソファーで寝るというとレナはそれに納得しようとせず一緒にベッドで寝ようと言ってきた。しかし、それにはさすがの俺にも意地があり、必死の抗議の末レナも渋々納得し俺はソファーで、レナはベッドでその日は眠りについた。

次の日の朝、まどろみながらレナはうっすらと目を開いた。

彼女は起き上がり見慣れない部屋を見回し理解する。

（見慣れない天井……）

「そっか、旅にでたんだった。」

パジャマからいつもの服に着替えベッドに腰掛け朝の静けさを楽しむ。

いつもは聞こえてきていた鳥の声、小川のせせらぎ、そして風の音…すべてが違って聞こえていた。

しばらくすると部屋の扉が開いた。

「レナ、起きたのか、おはよう。」

そういって士郎が部屋に入ってきた。

うっすらと汗をかいている。

（外に出ていたのだろうか？）

そうレナは考えていたが宿屋の店主が信じられないようなことを言ってきた。

「あんたの連れ、いったい何者だい？今朝方、宿の前で酔っぱらって暴れる賊が１０人ぐらいいたんだけどねえ…あんたの連れが出てきて１０秒とかからずみーんな叩きのめしちまったんだよ。」

その言葉を聞いて私もとても驚いた。

（ふつう喧嘩などあれば必然的に騒ぎになる。なのに私は気付くこともできなかった。というよりぐっすり寝ていた…）

あらためて私はシロウの強さと正義感の強さに感嘆した。

二人は身支度を済ますと部屋の鍵をフロントに返しクロスの城下町へと出て行った。

「ずいぶんと活気がある街だね。どこかで朝食をとってそのあとクロス王に謁見に行こうか。」

「そうね、そうしましょう。」

レナはうなずき近くのカフェのような店に走り出す。

二人はそのカフェで食事をとった。

（むう…確かに美味しいけどこの卵の焼き加減が、ソーセージも火のとおりが…一番おいしく食べるには…それにこのパン、少し小麦粉の量が少なくないか？砂糖も少し多いな…これでは朝から糖分を取りすぎる、ｅｔｃ　ｅｔｃ　ｅｔｃマダマダあまい）

などと食事の批評をしているとレナが隣から声をかけてきた

「シロウ、私ね……ちょっと緊張してる。」

「あたりまえだよ、王様に会おうっていうんだから。」

そういうとレナは小さな声で「うん」とつぶやき黙ってしまった。

俺たちは食事を終えると服装を整えクロス城へとむかった。

村長の紹介状はよほど効力があったのだろう、国王への謁見の手続きはあっという間に終了した。

レナと士郎は待合所へと案内された。

「こちらでお待ちください、順番が来たらすぐにお呼びします。」

そういうと兵士はその場を去った。

しばらくして二人の謁見の番になった。

「アーリア村のレナ、レナ・ランフォード。それとシロウ・エミヤ。こちらへどうぞ。」

二人は兵士のほうに足を進めた。

すると二人の背後で大きな声が上がった。

「ちょっとお待ちなさい。わたくしはこの方々よりもさきに待っていたんですのよ、順番は守ってほしいですわ。」

後ろを見るとやけに派手な格好をした女性が兵士につっかかっていた。

「そう申されても、王がこの方々に先に会うとおっしゃっているのもので…」

「そう……わかりましたわ、でもこれは大変に不快です。謁見のお願いは取り下げさせていただきますわ。」

そういうとその派手な恰好をした女性は待合所から出て行った。

俺たちが謁見の間に案内されると

「おお、レナよ。ずいぶんおおきくなったものだ。」

やけになれなれしく豪快に王がレナに声をかけてくる。

「レナ、お会いしたことがあるのか？」

レナはうなずき王のほうにむきなおり「はい、国王陛下。突然の訪問ながら謁見をお許しいただき心より感謝しています。」と言いながら頭を下げる。

「して、本日は何ようかな？」

王は玉座からレナのほうを向いて尋ねた。

「私たち二人でソーサリーグローブの調査に参りたいと思います。ソーサリーグローブによる世界の異変につきましては王のお耳にはすでに入っていることかと思いますが。」

「うむ、たしかに聞き及んではいるがあれは大変危険なもの。主たち二人では危険であると思うが？今エルリアは魔物の巣窟、戦況は分からずじまい、しかし勝利していれば報告もあろう、しかしエルリア王とも連絡が取れずじまい……」

「そうですか、しかし私たちは行くつもりです。そして必ずこの異変を解決してきたいと思います。」

「そうか…ならばクリクより船に乗るのじゃな。」

そういうとクロス王は近くの兵士を呼び寄せ

「この者たちに旅の金を、そして船に乗るための通行証を用意せよ。」

そういった。

兵士がレナのもとへ金と通行証をもってきた。

「これがわしからの餞別じゃ、これは主たちへの期待と安全を祈る気持ちと思ってくれればよい。」

レナは王に礼を述べた。

王の目線は次に脇に立っていた士郎にそそがれた。

「シロウ・エミヤといったか？主の生まれはアーリアかな？」

「はい、陛下。しかし、生まれは遠き地です。」

士郎は本当のことを言うことはできないので、はぐらかした。嘘と

もいえ、本当のこととともいえる言葉だった。

「リンガよりか？」

クロス王はクロスから最も遠い所に位置する街の名をあげた。

「リンガとはどこかはわかりませんがもう二度と戻ることのない遠き地です。」

士郎がそう答えるとクロス王はしばらく考え込み士郎とレナの二人に

「エルリアは危険な場所ぞ！十分に気をつけ、異変を解決し無事帰ってきてくれ。無事に！無事にじゃぞ！死ぬことは許さぬ！！！」

その言葉にレナと士郎は感激し「「必ず！！」」と言い残し謁見の間をあとにした。

第3話：クロス（後書き）

次話あたりで仲間が追加ですかな。

第４話：魔術使いと紋章術師（前書き）

改訂作業って意外と大変っすね。
といいながら４話です。

第４話：魔術使いと紋章術師

クロス王との謁見が終わり士郎とレナはクロスの街を歩いていた。
さすがにクロス大陸を統括する王都だけあって街並みは絢爛豪華、建物の威圧感、そしてその街に住む人々の笑顔、活気どれをとっても今まで見てきた中でも随一のものだった。

「ねえシロウ。これからすぐにクリクにむかうの？」

レナが尋ねてくる。

「いや…まずは旅の準備を整える必要があるしな。今日一日は明日の準備をして明日の朝この街を出ることにしよう。」

そう俺が言うとレナは笑顔になって

「じゃあ今日はシロウとデートね。」

その言葉に俺は固まる
「い、いや待ってくれ、えっとそうじゃなくて…」

「じょうだんよ…シロウ、さっ明日の準備をしに行きましょう。」

そう言ってレナは笑顔で街並みへと溶け込んでいく。
そのいたずらな笑顔を俺は複雑な表情で見つめていた。
（レナ……君もなのか…悪魔なのか……あおい悪魔なのか……）

俺とレナが旅の準備のために食糧や薬といった買い出しをしている

と城下町の中央広場に大きな人だかりができているのをみつけた。
広場では先ほど謁見の間の待合所でもめていた派手な恰好の女性と一人の男がもめているところだった。
女の手には一枚の古めかしい紙が握られている。
男が女にどなり散らし掴みかかった。
「おいこらちょっと待てよ！その地図を俺によこせ！！」
話の内容が分からない俺達からすると男が一方的に女から地図を奪い取ろうとしているようにみえる。
（まるで盗賊だな…）
「しつこいですわ、これはわたくしがこの店で競り落としたもの。それをあなたにとやかく言われるいわれはありませんわ。」
「うるせえ！！！！本当ならその地図はおれのもんだったんだ。それを貴様が……。いいからさっさとよこせ！でないと力ずくで奪うことになるぜ」
「あらそれなら話が早いですわ。」
おびえた様子もなく女は男に言い放つ。
その言葉を聞いた男は顔を真っ赤にして女にとびかかった。
おれはとっさに適当な木刀を投影して男を叩き伏せようとしたが
「我が身……紅蓮の炎よ　火界王……をもって汝…解き放たん　…

……ろかなる者に　灼熱の裁き…よ　　ファイアーボルト！！！！」

俺がとめに入る直前、女はなにか詠唱のようなものを唱えたかと思うと彼女の指先から火球が飛び出し男を襲った。

「ギャーー！！」

男は悲鳴を残しその場に崩れ落ちる。そう、真っ黒になって…

（詠唱？この女も魔術師か？なんか遠坂のガンドを思い出すなあ……）

俺は懐かしい思い出とそれと並行しておこった悲劇を思い出し、ひどく沈んでいた。

そして気を取り直し俺が周囲を見回すと先ほどまでいた野次馬たちはちりじりに広場から離れて行った。

「あら？あなたたちは……」

魔術師と思われる女が自分たちに声をかけてくる。

（はあ、正直厄介事はごめんなんだが……）

俺はそう思いながらもさすがに無視はまずいだろうと女の方に向きなおり話に耳を傾けた。よく考えてみればソーサリーグローブの調査を任されたあたりで厄介事の巻き込まれている気もするのだが……

「たしかクロス城の待合室でお会いになったお二人ではありません

か？たしかレナさんとシロウさんといいましたかしら？」

「はい、そうですがそれがなにか？」

「あなた方のようなお二人がなにようで王への謁見を望んだのか少々興味がありまして」

そう、魔術師の女は顔に興味津津といった表情を浮かべ俺たちに尋ねてきた。

「俺たちはソーサリーグローブの調査に行くために調査の許可、援助のお願いをしに行っただけだ。」

その言葉を聞いた女は目を丸くして

「あなたたちたった二人で？あの魔の巣窟へですって？」

「そうですがなにか？」

レナが返答する

「あのソーサリーグローブの調査をたった二人で調査するというぐらいですから余程戦いに自信があるのですわね。気に入りましたわ、あなたたち二人わたくしの宝探しを手伝ってくださいませんこと？」

「悪いがそんな暇はない。」

俺が女の頼みを断ろうと言い放った時、女が声をあげた。

「これはクロス洞穴の地図ですの。なんでもこの洞窟の奥にはソー

サリーグローブに関する宝が眠っているという噂ですのよ。」
その言葉を聞いて俺とレナはじっと見つめあい考える。
俺としてはどうにもこの女の言葉には本当のことをいっているように聞こえなかった。しかしレナのほうは何か深く考え込んでいるように頭を垂れたままだった。

しばらく俺とレナは二人で話し合い女に話をきりだした。
「いいだろう、あんたの言葉を信じてみてもいい。ただし関係がなさそうだったら俺たちはすぐにソーサリーグローブの調査にもどる。それが条件だ、それでいいなら付き合おう。」

「わかりましたわ。それでいきましょう、それとわたくしはセリーヌ、セリーヌ・ジュレスですわ。」

「私はレナ・ランフォードです。」
「俺は衛宮士郎。これからしばらくよろしく頼む。」

そして俺達三人はクロスをあとにし、町の南にあるクロス洞穴へと向かった。
その道の途中レナが気になっていたのだろう、疑問をセリーヌにぶつけた。
「あの…セリーヌさん、先ほど私たちが断っていたらどうなさるつもりだったんですか？」
「もちろん一人でむかってましたわ。わたくしは紋章術師ですもの」

「紋章術師？」

俺が疑問の声をあげるとセリーヌは「あなた何を言っているの？」といった顔で

「さきほどわたくし火の紋章術を使っていたでしょう、それを見てわからなかったんですの？」

「いや、俺は魔術師だと……」

そこまで言って口を滑らせた自分のうかつさに気付く。

「魔術師？それは何ですの？」

（しまった～。こういうタイプは無視しても、ごまかしてもしつこそうだしな～…でも本当のことは言えないし……）

そう考えた俺は嘘とも本当ともとれる発言で乗り切る。つまりはごまかしだ。

「俺の住んでいた土地ではおそらく君のいう紋章術師のことを魔術師とそう呼ぶ。ただそれだけだ。」

セリーヌは納得したようなそうでないような表情を浮かべさらに言葉を続けた。

「それであなたはその魔術師なのかしら？わたくしからしてみればあなたの体つきは前衛の戦闘タイプに見えるのですけど……」

「ああ、俺は魔術師じゃない。魔術使いだ。俺の場合前衛も後衛も

両方できるオールラウンダーといったところか。まあ俺は剣も使うがむしろ本当の専門は後衛タイプだ。」

「魔術使い？まあ深くは聞きませんわ、聞いても分からなそうですもの。それであなたのその剣とやらはどこにありますの？見たところどこにも持っていないようですけど……」

その問いに俺は後ろに手をまわし小声で呪文を唱える。すると俺の両手に二本の短剣が握られる。この位置ならセリーヌには投影は見えなかっただろう。また、セリーヌには俺が背後に剣を隠し持っていたように見えただろう、いやそうであってほしい。

その剣を見たセリーヌは驚いた表情に変わる。

「美しい双剣ですわね、このような剣は今まで見たことありませんわ。それで魔術使いというくらいですからもちろんその魔術とやらも使えるんでしょう？その魔術とやらはどのくらいの攻撃範囲がありますの？後衛というからにはそれなりの射程はあると考えますが…わたくしの場合2、３００ｍぐらいはかるいですわ。」

女は自信満々にしゃべりだす。

「俺の場合自分の視認できる範囲だな。４ｋｍといったところか。」

その言葉を聞いたセリーヌは驚愕の表情を浮かべる。

「ありえませんわ！！！いったいどんな術がそんな射程になるって言うんですの！！！！！」

「それは詳しくは言えないがそれが俺の魔術だ、おそらく君たちの

紋章術とやらは少し異なるのだろう。」

その話を横から聞いていたレナも驚愕の表情を浮かべていた。

（確かにシロウが私を助けてくれた時もシロウと私はかなりの距離があった。だけど４ｋｍ？それって見えもしないはずの距離なのに……）

「まあもしかしたらそんな術もあるのかもしれませんわ、でもそれを見えもしない敵に当てることなんて…いえ、視認できるといいましたわね。」

「ああ、俺はそのぐらいなら見えるぞ。俺は昔から目がよくてね。それこそ木に生えている葉っぱの枚数ぐらいでもその射程ならば数えるくらいできる。」

その言葉に二人の顔をさらに驚愕の表情に変わる。

「あなた本当にいったい何者ですの？」

その言葉にレナがうっかり

「勇者さま……」

「レナ！それは…」

「勇者？伝説の？どういうことですの、その話詳しく聞きたいものですわ。ああなるほど、だからソーサリーグローブの…でも先ほどの剣は光の剣という感じではありませんでしたし…」

レナは自分が口を滑らせたことに気付いたがもうおそかった。

ぶつぶつ言うセリーヌを見て俺はすべてを隠すのは無理だなと考えた。

そしてセリーヌに本当のことを最も深いところはごまかしながら話した。

その言葉を信じたのかそうでないのかはわからなかったがその後俺達三人は口を閉ざしたままクロス洞穴へとやってきた。

その道の途中セリーヌの顔に映る笑みが少々気になったが……

洞窟にやってきた俺たちの目の前には真っ暗な闇が広がっているだけだった。

「おいセリーヌ、これじゃ何も見えないだろう？灯りでもあるのか」

「ここはわたくしの紋章術にまかせていただきますわ。」

そういうとセリーヌは再び詠唱を始めた。そして詠唱が終わると同時に洞窟の内部が一気に明るくなった。

「すごいな……」

俺にはその言葉しか浮かんでこなかった。これだけの広さの洞窟をまるで外にいるかのように明るくする紋章術とは一体どのようなものなのだろうか…

「あら、これは紋章術としては初歩のものですわ。それよりわたくしはあなたの使う投影魔術とやらが気になりますが…」

「まあそれは戦闘になれば嫌でも見ることになるだろうさ。」

そんな会話？（むしろ問答）を続けながら俺たちは洞窟の奥へとたどり着いた。

そこには六芒星の形をした祭殿のようなものがあり、その周りには四つの宝箱、そして祭殿の上にも一つの宝箱が置かれていた。

セリーヌが近付き一つずつ宝箱を開け五つ目の宝箱を開けたその時だった。

祭殿のそばにあった二つの石像が動き出し俺たちに襲いかかってきた。

「ガーゴイルですわ。この古文書を護っていたんですわ。」

どうやら最後の宝箱の中身は古文書のようだ。

（古文書だとしたら何か手掛かりがしるされているかも…）

その瞬間レナに襲いかかるガーゴイルがいることに俺は気付いた。

俺はすぐさま干将・莫耶を投影しレナへのガーゴイルの攻撃を受ける、その様子をセリーヌも見たのだろう。彼女の顔には納得の表情が浮かんでいるのがわかった。そう、彼女は先ほど俺が背後から剣を出すのを見た。その時は単に剣を隠し持っていた、それだけの見解だった。しかし今回士郎は何も持っていない手から双剣を出した。

「ハーッ！！！」

俺は気合を入れガーゴイルを斬りつける。しかし、思った以上にこの敵の外装は固かった。
もう一匹のガーゴイルがセリーヌを襲う。セリーヌの詠唱はまにあっていない。

俺は目の前のガーゴイルを剣で後ろ側へいなしその一匹を壁に叩きつける。

そしてセリーヌを襲おうとしている一匹に向かって投影した弓を構え暗示の言葉を紡ぐ。
しかし、今回の敵にはいつものものではない、予想以上に固い骨格、そして明確な殺意。そんな敵に向かって俺は必殺の意味を込めた言葉を紡いだ。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．」

俺の構えた黒い洋弓には一本の捻じれた剣が番えられていた。そしてその剣の真名を口にする。
それは英雄フェルグスの用いた剣、あのランサーと呼ばれる男クー・フーリンと深い縁を持つ一本の剣…

その剣の持つ特性、形状、そして積み重ねた神秘を捻じ曲げる…

「偽・螺旋剣（カラドボルグ）！！」

一筋の閃光はセリーヌを襲おうとしていたガーゴイルにむかって一直線に飛来する。その切っ先が当たると同時に宝剣はガーゴイルの体を捻じり切る。
そしてそこには体が完璧に上下に分れてしまった無残な躯をさらしたガーゴイルとその攻撃力に腰を抜かしているセリーヌ、そしてレ

ナだけが残っていた。
なぜならガーゴイルを屠ったその剣はさらに洞窟の天井部を打ち抜き、そこからは暖かい太陽の光が差し込んでいたのだから……
セリーヌは抜けた腰をさすりながらゆっくりと立ち上がろうとする。どうやら完全に抜けてしまったわけではなかったらしい。そして…
「あれがあなたの魔術、なんてすさまじい威力ですの……」
「シロウ、あれは私を助けてくれた時のものと違ったわ。私の時はあんなにすごい力ではなかったはずだもの。」
それはそうだろう、あの時は力をかなりセーブしていたし宝具のランクはあの時のほうが低いものだった。さらに今回俺は『壊れた幻想』を使ってはいない。使えば見方を巻き込んでいただろうから。
「まあ、まだ破壊力を増すこともできるけど。それを使うとおそらくこの洞窟は完全に崩壊していただろうし…」
その言葉を聞いた二人はさらに驚愕の表情を浮かべる。
そんな話をしている時だった。先ほど俺が壁に叩きつけたもう一匹のガーゴイルが飛び出し襲いかかってきた。
「くそっ、まだ動けたのか！」
俺はとっさに双剣でその攻撃を受け止める。そして二人からできるだけ遠ざけるようにガーゴイルを誘導していく。
その時俺の体に異変が起こった

「……ッつァ！！」

その痛みは俺の右手から起こった。おれは一瞬その痛みで敵の動きを見誤り気付いた時には俺の目の前にはガーゴイルの爪がせまっていた。

俺はその一撃を覚悟したが俺の前にレナが飛び出した。

「クッ、何をしているんだおまえは！」

俺はとっさにレナを突き飛ばして自分が身代わりになろうとしたが

「ハーッ！！！」

「なっ？」

（どんな脚力だよ！！）

思わず俺は心の中で激しくつっこむ。

レナの蹴りがガーゴイルの腹部を一蹴しガーゴイルがよろめく。その一瞬のすきを見逃さないものがこの洞窟内にいた。

そして、セリーヌの声が洞窟内に響いた。

「そこをどいてくださる？シロウ！！特大の一撃を打ち込みますわ」

その言葉を聞いた俺はガーゴイルをその場に残しセリーヌの射程から離れる。

「レイ！！！！」

その言葉と同時にガーゴイルの頭上から光の帯が舞い降りその場に残っていたガーゴイルを葬り去った。いや、見事に消し去った。

これこそが『この世界』で初めて魔術師と紋章術師が互いに協力し合い怪物を退治した瞬間だった。

「シロウ、先ほども言いましたがいったいあなたは何者ですの？あんな術はありえません。あれほどの威力、正確性どれをとってもこの世界最高レベルのものですわ。と思ったら急に動きがノロくなる。いったいどういうことですの？」

「それを言うならセリーヌの術もなかなかの威力だったとおもうが。さらに言わせてもらうとセリーヌの方こそ俺の術をみて腰を抜かしかけていたようにみえたけど。」

「当り前ですわ！あんな一撃を見せられてはあなたが本当に勇者と言われても信じてしまうほどのものでしたわ。それに私が使った紋章術は威力は高いですけど使える人はわたくしもほかにしっていますわ。」

そんな子供の喧嘩にも似た問答を続けていた俺たちの間にレナが入ってきた。

「ところであの古文書はどうなったんですか？」

それを聞いたセリーヌは自分の手の中にある古文書をひろげ、じー

っと見つめる。
そして
「読めませんわ、字が古すぎるんですの。まーったくチンプンカンプンですわ。」
セリーヌがお手上げのポーズをとる。
「なっ、どうするんだ？それが読めないと」
「わかっていますわ、わたくしあなた方にしばらく同行させていただきます。あなた方がエルリアに行くのであればクリクから船に乗るのは当たり前の話。それならわたくしもクリクで船に乗ってこの古文書をリンガにもっていきますわ。あそこならこれを解読できる研究者もいるでしょうし。それにあなた方にもとても興味がありますの。なんならエルリアまで一緒に行ってもよろしいですわよ。」
（なるほど、専門家なら理解できるかもしれないことか。でもそういう奴らにわたるともう俺たちが拝めることはなくなるかもしれないし…）
「セリーヌ、ちょっとみせてくれないか」
「別にいいですけどわかるんですの？」
「それはなんとも言えないけどちょっとした好奇心かな。」
そういって俺はセリーヌからあずかった古文書に解析をかける。
そのとき俺の脳内に膨大な記録、記憶が流れ込んでくる。
「ぐっ…」

（やばい…これ以上はやばい。情報量が多すぎる。）

もともとこの世界の言葉、歴史などは俺には持ち合わせていないもの。それを長い年月という神秘を重ねてきた古文書が俺に記憶として与えようとした結果拒絶が起こってしまった。

「くそっ、ダメか…。少しはわかるかと思ったんだが……」

「別にいいですわ。それなら元の予定通り、リンガにむかうだけですし。」

「でも船の通行証は二人分しかないぞ、それはどうするんだ？」

「あら、わたくし以前に王に謁見しまして船の通行証はいただいておりましてよ。」

「そうか、それならこれからよろしくなセリーヌ」

「はい、これからよろしくですわ、シロウ、レナ」

そして俺たちは予想以上に時間がかかってしまったためクロスに戻り宿をとった。

その時宿は再び一部屋しか空いてなかったのは言うまでもない、しかも女性が一人増えて……orz

（神よ、俺が何かしましたか……）

『そんなこともあるんじゃない？』

神の声が聞こえた……ってなんだ今の声！！

そんなつっこみを一人心の中で、神の声？にしながら夢へと落ちていった。

第４話：魔術使いと紋章術師（後書き）

なんか宝具出しすぎでしょうか？オリジナルも考えたほうがいいのかなあ。何かいい案ありませんか？

第5話：予兆（前書き）

なんだかぐだぐだですかね。
スタオは神秘の世界すぎるもので…

第5話：予兆

セリーヌが仲間になった一件以来どうもレナの様子がおかしいように感じる。何というか苛立ちを隠せない雰囲気をまとっているように感じるのだが気のせいだろうか。
まあその原因はおそらく

「セリーヌさん、いい加減シロウから離れて歩いてください！」

セリーヌが俺にぴったりと寄り添うようにして歩いているのだ。ちなみにここは鬱蒼と草木が生い茂る森の中。早朝クロスを出たはいいがどうやら街はずれの森の中に迷い込んでしまったようだ。

「いいでしょう？レナ、あなたには関係ありませんことよ。別にシロウも嫌がってはいないようですし。」

そう言ってセリーヌは俺にさらに密着する。

（いや、嫌がるとかじゃなくもう諦めているというか、免疫ができてしまったというか…）

「迷惑です、きっとシロウもそう思ってます！！ねえシロウ！」

どうやらレナとセリーヌの口論を止めるには俺がはっきりと答えるほかないらしい。

「セリーヌ、俺もそうひっつかれたら歩きにくい、悪いが少し離れてくれないか。」

「むう、いいじゃありませんか。わたくしか弱いレディーですのよ。」

「どこがか弱いですか！あんな派手に紋章術を放ってガーゴイルを倒しちゃったじゃないですか」

レナがセリーヌにむかって反論の意をとなえる。

（まあ確かにあの紋章術を見たらか弱いとはとても…でも、この森に入ってからのセリーヌの様子がどこかおかしいのも事実だ。どことなく震えてるような…）

普段とは違いどこかびくつく様子をしめすセリーヌに違和感を覚える…

ポトリ

何かが俺の肩付近、つまり俺に寄り添う形で歩いているセリーヌの首筋にそれは落ちた。

「なっなんですの？今のは……ッ」

自分の首筋に落ちたものを手に取った瞬間、見たセリーヌの顔から生気が抜けていくのがわかる。目に見えてわかるぐらい真っ青に…そして沈黙は沈黙を作りだした本人の声によって破られる。

「キッ…ッキャーーーーーー！ムッ、ムシーーーーーーーー！！！！」

今までの冷静なセリーヌが嘘のように大声でわめく、いや泣き叫ぶ。
どうやらセリーヌが俺に必要以上に密着してきたのにはこういうわけがあったようだ。
このように鬱蒼とした森、もちろん虫の宝庫。つまり俺はセリーヌにとって虫からの隠れ蓑といったところであろうか。

しきりに泣き叫んだ後セリーヌは涙目になりながらまたもや俺に抱きついてくる。それをいぶかしむ目が一つ、俺にむかって殺気ならぬものを飛ばしていた。その張本人の背後にはどす黒いオーラのようなものが…
（レナ、やめてくれ。そんな目で見ないで、頼むから……）

レナの怒りが収まったのはセリーヌがやっとのところ落ち着き、自意識を取り戻した時であった。それまでレナからの非難の視線は途絶えることはなかったのだが…
しかしセリーヌの泣き叫ぶ様子を見ていたレナの口が笑っていたように見えたのは気のせいではないだろう。もちろん俺に対する非難の視線も残ったままだが。

「申し訳ありませんわ、節操のないところをお見せしてしまって。」
セリーヌは顔を紅くして謝罪の言葉を俺たちに述べる。
「確かにセリーヌさんは『か弱い』レディーでしたね。」
レナがここぞとばかりにセリーヌにいいよる。
その言葉にセリーヌは何も言えなくなる。

（レナ、俺に会った時の慎ましい態度はいったい何だったんだい……）

俺はレナの意外な一面を見てこれからのことを思うと涙が出た。

「あら？シロウ、その腕の紋章はなんですの？」

「んー、あぁこれは…。」

そこまで言って自分の腕の異常に気付く。

「なっ、広がってる……」

俺の腕にあった令呪のような紋様が以前長老の家で見た時より広がっていたのだ。他人が見たのであれば何も変わっていないように見えるだろう、しかし、俺はこのての変化には敏感だった。

「なにが広がっているんですの？それがシロウの魔術の紋様ではありませんの？」

「いや、これは関係ないんだ。俺にも何なのかわからない。セリーヌはこの紋様に心当たりはないのか？」

「いいえ、ありませんわ。たしかに紋章術のために施す紋様に似ていなくもないですけどこんな形のものは見たことも聞いたこともありませんわ。」

セリーヌの言葉に俺は少し残念に思う。この世界には紋章術というものがある。ならこれもその一種なのかと思っていたのだが

（この世界の正規の紋章術師ならわかるかと思ったが…それよりなんで大きくなっているんだ？）

その時、またもや腕の紋様から鼓動が聞こえた。

（やはりこの紋様、何かあるな。でも、セリーヌも分からないって言うしここで考えても先に進めない。まあ旅をしていくうちにわかることもあるだろう…）

「まあいい、今のところはわからないってことで先に進もう。これから旅をしていればわかることもあるだろうしな。」

「そうですわね。まあいずれわかることもあるでしょう。さあ先を急ぎますわよ。」

そう言い、俺たちは森の出口を探して再び歩き出した。

森の外を目指し歩いているとやっと空の見える場所に出た。そこからは遠くにクロス城の高い塔が見えていた。俺たちはその塔を頼りにまっすぐ森を抜けた。

俺たちが抜けたそこはクロスの東部に当たる街道であった。

俺は森に入る前、つまりクロスを出る直前に購入していた地図を広げる。その地図を見たセリーヌは

「もうちょっと東ですわね、そうしたら街道が二手に分かれていますわ。そこを北にむかえば目的地のクリクですわね。あそこはクロスとはまた違ったにぎやかなまちですわよ」

「セリーヌはこのあたりに詳しいのか？ずいぶん慣れたような感じだったけど。」

「当り前ですわ、クリクへのわかれ道の逆側が私の村のほうですもの。クリクはセンスのいい服がたくさん置いてあって一度行ったことがありますの。」

「なるほどな、ならセリーヌは村に戻らなくてもいいのか？」

「別にいいですわ、この旅が終わったら一度戻るつもりですから。」

そうして俺達三人はクリクへの道を急いだ。しばらく歩いていると海に面した大きな港町が目の前に広がってきた。

「大きな街だな、確かにここもよく賑わっている。」

「わたしこんな海を見るなんて初めて。アーリアは森ばっかりだったから。」

「クリクは交易都市ですのよ、人の往来も盛んで珍しい商品もたくさん入ってきていますの。」

わいわいがやがやと俺たちがさわぎながら街に入っていくと後ろから鈍い衝撃がはしる、俺は一瞬何かと振り向くがそこには

「イッタタタタ……」

小さな子どもが尻もちをついていた

「おっと悪いな、きみ大丈夫か？」

「うん、こっちこそごめんなさい、お兄ちゃん」

（お兄ちゃん……か）

「ちゃんと前を見て歩かないと危ないぞ、今度から気をつけろよ。」

「うん、ごめんなさい。今度から気をつける。」

そういって少年は駆け足気味にその場を立ち去った。

（素直でいい子だ、こんなに素直に謝れるのはすごいことだな）

その時自分のポケットの中がやけに軽いのを感じる。確かに入れてあったはずの『赤い宝石』がなくなっていたのだ。確かにこの街に入った時は入っていた。あの少年がぶつかるまでは……

（あの子供…さっきはいい子だと思ったが前言撤回、捕まえてちょっと注意してやらなきゃな。あんな小さな子が間違った方向に足を踏み入れちゃいけない）

「レナ、セリーヌ。ちょっと力を貸してくれないか。さっきの子供に俺の大切なものが盗られたみたいだ。」

それを聞いたレナとセリーヌは「「もちろん」」と快く承諾してくれた。

そして三手に分かれて街のあちこちを探し回る。レナは街中を、セリーヌは広場を、そして俺は港の方を…

俺が港に着くと数人の子供たちが遊んでいた。俺は例の少年がいないのを確認するとその中の一人に例の少年のことを聞いてみた。

「それはケティルだよ。お金持ちの家の子。」

「君たちの友達かい？」

「ううん、ママがね…あの家の子はお金持ちだから遊んじゃダメっていうの。」

「そうか、でもそれはおかしいよね。お金持ちだから遊んじゃダメって言うのはお兄さんちょっと変だと思うな。きっとその子も遊びたいと思ってるはずだよ、だから遊んであげてもいいんじゃないかな。」

「うん僕たちも遊びたかったの。ママ達にダメって言われてたから…」

俺は先ほどまで見つけたら少しばかり注意した後懲らしめてやろうと考えていた少年に口添えしている自分に気付く。一人ぼっちのさみしさと家族や友人の暖かさを俺は知っていたから…

俺は子供たちからその子の家の場所を聞いて街の入り口にあるケティルと呼ばれた子の家の方へと向かった。するとその家にむかう途中で酒樽が積み上げられている倉庫の近くを通りかかった。そこには小さな影、子供の影が樽の裏側で揺らめいていた。俺はそれが気になり樽の裏を覗き込む。そこには先ほど俺にぶつかっていった少年が隠れていた。

子供の正面にまわった俺はゆっくりしゃがみこみ少年の目をじっと

見て

「ケティルくん、やっと見つけたよ。お兄さんに何か渡すものはないかな？」

俺は小さな子どもを驚かさないように優しく声をかけた。

そう声をかけるとケティルはびくっと震え

「なにもない…」

小声でつぶやく。若干うつむき加減だが…

「本当かい？今なら怒らないから本当のことを言ってくれないかな？」

ケティルはしばらく黙っていたがゆっくり口を開く

「本当？」

「ああ本当さ。だからお兄さんから盗ったものを返してくれないかな？あれはとっても大切なものなんだ。」

「ごめんなさい…」

そういってケティルはポケットから『赤い宝石』を取り出し俺にそれを差し出す。俺が子供からそれを受け取りポケットにしまう。

「ケティルくん、どうしてスリなんかやったのかな？」

（こんな小さな子が自分の意志で盗みなんてやるはずがない、きっ

と何かあるはずだ。）

「一人前ってことを証明したかったの…お母さんに僕一人で何でも出来るって見せたかったの。」

その言葉を聞いて俺は拍子抜けする。てっきりこの子に何かあり悪い大人にやらされていたと思っていたから…。お金持ちの家の子が普通自分で盗みをする必要は全くなかったのだから。
そしてこの子供が本当に間違った方向に進もうとしていたから…

「ケティルくん、それは間違っているよ。一人前ってことを見せたいなら盗みなんてしちゃいけない。本当に一人前になりたかったらお母さんのお手伝いをしてあげよう。きっと喜んでくれるよ。」

「…うん。ごめんなさい。」

（この子は本当に素直な子だ。この子は本当にただ大人に褒めてもらいたいだけなんだろう…認めてほしいだけなんだろうな…）

「お兄さん、この街に来たばかりでちょっと困ってるんだ。誰か案内してくれる子はいないかな…」

そういうと目の前の少年は一気に顔を明るくして…眼をぱっちりと開き

「じゃあ僕が案内してあげる。僕この街のことならなんでも知ってるんだ。」

「そうか、じゃあお願いしようかな。」

「うん！じゃあ行こう！」

そういってケティルは俺の手を引っ張って町の方へと歩いて行く。
そして広場近くの料理店の前で足を止める。

「ここがこの町一番のおいしいお店『オジャガ亭』だよ。」

「じゃあ入るか。」

その一言だけ、しかし顔はいつにも増して真剣な表情。まるで今からあなたの味、技術はいただきます、ただしアレンジはさせていただきます、といったふうに…そんな感じを漂わせながら……
俺はケティルに有無を言わさず店に入る。あまりの変貌ぶりにケティルは目を丸くしていたが…そんなことは気にしない！
『やっぱり正義の味方より究極の料理とかどうよ。』
（美〇しんぼかよ……はっ、だからおまえだれだよ……）

俺は料理を頼まず迷わず厨房へと向かう。どうしてこの店にはウェイターがいないんだろうか。
店員が誰もいないため簡単に厨房に入ることができた。厨房に入ると俺は見たこともない調味料を見てそばにいるはずのケティルの存在を忘れて調味料に解析をかけてしまう。

（なるほど、これはこの世界の植物を使ったものか。でも材料はわかった。同じ材料が手にはいれば作れるな。でもマンドレイクって……）

俺はその調味料を使った料理を早く作りたくてうずうずしていたが店の者がもし出てきて見つかるとまずいと思い厨房を後にした。
もちろんケティルのことは忘れてないぞ、本当だぞ！！！

そして町の広場でレナとセリーヌを見つける。

「おーい、レナー、セリーヌー。無事解決したぞー」

そう言ってケティルが街を案内してくれていた旨を二人に伝えた。

それからケティルを含めた四人で広場の中心の噴水の前に来るとそこには

「だれか話を聞いてください。もうすぐこの街に大いなる災いが起こります。どうか逃げてください。だれか……」

一人の女が街の者たちにうったえていた。

それを見た街の人たちは何を言っているんだなどと女を罵り誰も相手にしなかった。

災いという言葉が気になる。

ソーサリーグローブといった異変を調査する身として少しでも話を聞きたいと思い俺が女に声をかけようとしたその時

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ゴガッゴゴガッガゴゴガギャゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

地の底から響いてくるような音とともに激しい揺れが俺たちを襲った。

「「「「「「「「「「「「「「キャーーーーーーーーー」」」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「「「うわーーーーーーーーー」」」」」」」」」」」」

広場でたくさんの悲鳴がこだまする。男も女も子供も老人もそれぞれの阿鼻叫喚…

そして俺はあることに思い当たった

「みんなー、高台に逃げろーーーー」

俺の声が聞こえたのかそうでないのかはわからないが人々は高台にむかって走りだす。どうやらこの街の人々も多少は地震に対する知識を持っているようだった。俺達四人も急いで高台にむかって逃げる。

その時俺たちの頭上に建物の崩れたがれきが落下してきた。大きさは俺達四人を軽く押さえつけてしまえるほどの大きさ、自分ひとりなら問題はない…しかし

（くそっ、四人もいたらよけきれない、破壊をしても瓦礫が…）

俺は一瞬で己の深層世界に潜り込む、がれきを防ぐことのできる楯を探すために。

「I am the bone of my sword.
――――熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）」

あまりに短い時間だったため完全な投影ではなかったが二枚の花びらが頭上に展開される。それはアイアスの用いた最強の盾、花弁一枚で一つの城壁に匹敵するといわれる伝説の守り。そしてそれこそ

が俺の持ちうる最強の守り。
展開された花弁は一枚目で頭上に降り注ぐがれきを受け止め俺達四人をまもりきった。がれきの落下が終わると同時に花弁の一枚目が崩壊した。

レナ、セリーヌの二人はその光景にみとれ、ケティルは目を閉じ、うずくまっていた。

「シロウ、今のは…」

「今はそんなことを話している暇はない、急ぐぞ」

そういって俺はうずくまるケティルを抱え高台にむかって走る。

ちょうど俺たちが登りきった時だろうか。街を大津波が襲った。
その大津波は華やかな街をゴミのように飲み込みそして海底へと引きずり込んだ。まるでそれは世界の終りを指し示すかのように…

しばらく大津波は繰り返し、「押し寄せ」、「飲み込み」をつづけた。

津波が鎮まるとそこにはもとあった活気のある街はいっさい残らずただ崩れ落ちた建物のなれの果て、そして多くの土砂を含んだ茶色い海だけが残っていた。

(あの女の言っていたことは本当だった、いったいあの女は何者だったんだろうか…)

「シロウ、街が…」
「お兄ちゃん、街が、お母さんが…」

「ケティルくん、お母さんはきっと無事さ、きっとお母さんは逃げてこの高台のどこかに避難している。俺も一緒に探してあげるから。」

そういって俺達3人はケティルの母親を探した。母親は意外にすぐに見つかった。どうやら母親は地震が起こった時には既に高台の上にいたらしいのだがケティルを探しに行こうと高台をかけ下りようとしたとき街から駆けあがる人の奔流にのみこまれ探しに行けずにいたらしい。
母親は無事な息子の姿を確認し涙を流し喜んだ、もう会えないかもと持った人との再会。それは何にも変えられないものだったのだろう。

ケティルを母親のところへと連れて行き、安心した様子を示すケティルを見た俺たちはこの街を後にした。
エル大陸にむかう他の方法を探すために…
本当なら街の復興の手伝いをしたかった。しかしレナたちに時間がないこと、古文書はどうするの？などといわれ泣く泣く諦めたのだ。
そして街だった場所を出てからもと来た街道を歩いているとセリーヌが声をかけてきた。

「クリクがあんなことになってしまうなんて…こうなったらいったんラクールにわたってからエル大陸に渡るしかありませんわね。」

「ラクールにわたるのはいいとしてその船はどこから出ているんだ？」

「ハーリーという港町がありますわ。そこから渡りましょう。」

俺がセリーヌと話しているとレナがずっと気になっていただろうことを聞いてきた。

「ねえ、シロウ。さっき私たちを守ってくれた楯みたいなのは何だったの？まるで花びら…」

「そういえばそうですわ、ガーゴイルを倒した時の矢といい先ほどの花弁といい、シロウ…いいかげん本当のことを言ってくれてもいいのではなくて。」

俺は考えた、あの時はみんなを守ることに必死でつい

『熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）』

まで使ってしまった。もうごまかすことはできないかな。

「わかった、本当のことを言う……信じられないかもしれないがこれは本当のことだ……俺はこの世界の人間じゃない。俺が使ったのは紋章術とは全く違うもので『魔術』だ。俺は自分の魔力を物質化して使うことができる。俺の属性が剣だから剣に類するものなら本物に近い形で作り出すことができる。俺はそれを矢にして飛ばした。そしてあの楯もだ、あの楯は俺が造りうる最強の守りだ。」

「異世界の人間…勇者…」

「いや、ちがう俺は勇者じゃない。俺は元の世界に居場所のなくなってしまったただの亡霊にすぎない。」

「そんなことない、私たちと一緒に笑い、旅をし、そして私たちを守ってくれた。居場所がなくなったなんて言わないで。あなたの居場所はここにあるわ。」

「そうですわ、あなたの居場所はわたくしたちのいるこの世界ですわ。だから亡霊なんて言わないで。」

その言葉に俺の瞳から涙がトメドなくあふれだした。

「ありがとうレナ…、ありがとうセリーヌ……」

俺は自分を信じてくれた二人に感謝をしながら流れ出る涙を拭いた。

それからどれほどの時間が経っただろうか、しばらくして気持ちの整理ができた俺は先ほどの街のことを考えていた。

（噴水の前の女、あいつはあの災害に関係があるはずだ。預言者だったと言えばそれまで、偶然といったとしてもそれまで、しかしたくさんの笑顔を奪ったやつがいるのは確かだ。必ず原因を突き止めてやる。）

のちにセリーヌから聞いたことだがやはりクリクの街に地震が頻発するようになったのはソーサリーグローブが落ちてからだという。今回がたまたま街の崩壊という大規模なものになったということだった。これは破滅の道への第一歩なのかもしれない。

俺はそんなことを考えながらレナ、セリーヌとともに次の街へと歩を進めた。

第5話：予兆（後書き）

レナの裏の性格がわからず、おもわず妄想…
自己嫌悪です。

第６話：剣士（前書き）

予想外の用事で遅れてしまいました。そろそろオリジナルストーリーを混ぜながら書かないと…

第6話：剣士

クリクの街を発ち、先ほどのわかれ道を東へと延びる街道を進む。分かれ道からしばらく歩いたところでセリーヌが少し北にそれた方向に足を進めていることに俺は気づいた。

「セリーヌ、地図ではハーリーはそっちじゃないはずだが…」

「ええ、わかっていますわ。ハーリーにむかう前に先にマーズへ立ち寄ろうと思いますの。」

「マーズ？」

俺はそれがどこなのか、それが何なのかわからずセリーヌに尋ねる。

「そうですわ、そこがわたくしの生まれ故郷ですの。今度の旅は少し長くなりそうですし挨拶だけでもと思いまして。」

「なるほど、それなら挨拶はしておかなきゃな。俺もセリーヌの生まれた所にも興味あるしな。」

「セリーヌさんの生まれたところ、私も興味があります。」

俺とレナがセリーヌにそう言うとセリーヌはどこか照れたような表情を浮かべる。

「わたくしの村は紋章術師の村ですの。もちろん父もそして母も紋章術師ですのよ。わたくしの紋章術は父から習いましたの。」

嬉しそうに父のことを語るセリーヌを見た俺はその姿をかつての自分と重ね合わせる。無理を言ってじいさんに魔術を習った日。まあ間違った方法を教えられ結果としてその異常を見るに見かねた遠坂が師匠になったのだが……まあ間違った方法を続けたおかげで無茶な剣製に耐えうる強固な魔術回路が生成されたのも事実だ。

二時間ほど歩いたころだったろうか、俺たちはマーズへと到着した。俺のマーズの第一印象は『アーリア』だった。それほどにこの村も緑に囲まれており小さな家々が立ち並んでいた。ただ街並みとして違うところは川が流れていないところぐらいで、建物の造りや環境は非常に似たものを持っていた。
しかし街の風貌とは別にアーリアとは明らかに違うところが一つあった。街に活気がないのだ。いや活気がないというより人の気配が外に感じられない。

セリーヌが眉をひそめて村中を見回す。

「おかしいですわね、いつもはもっと活気がありますのに。」

（いつもはこんな感じではない…ということは何かあったと考えるのが妥当か……それに一つの家の中から多くの人の気配を感じる）

レナも心配そうにセリーヌの方を見る。

セリーヌは村の入り口付近にある一番大きな家の戸口の方へと進んだ。そして戸口の前で立ち止まり俺達の方に向き直って

「ここは長老のお宅ですの。何かあれば皆ここに来るはずですわ。」

そこは先ほど俺が多くの気配を感じた家だった。俺たちはその家の中に入った。入ってすぐの大広間には十二人掛けの長机があり、それを村人たちが取り囲んで座っていた。

「ただ今戻りましたわ、皆さん…なにやら村に活気がありませんけど何かございましたの？」

セリーヌが村人たちに声をかけると村人たちは一斉に俺たちのほうを見た。

「おお、セリーヌ…帰ったか。」

その中で最も年老いた人物が声を上げる。どうやら彼がこの村の長老のようだ。

「ところでセリーヌ、後ろの方々は？」

村人のなかで最も威圧感を持っている人物が尋ねる。

「はい、お父さま。こちらは二人ともわたくしの友人ですわ。一緒にラクールに渡ろうと思いましてそのついでに挨拶に立ち寄ったところですわ。」

「なるほどのう、セリーヌの友人なら聞いていただこう。ご友人の方々もこちらに来て座ってくだされ。」

長老が俺たちに腰かけるように促す。

いわれるがままセリーヌを含めた俺たちは席に腰掛ける。

その様子を見ていたセリーヌの父が声を上げる。

「長老、よろしいのですか。部外者に話すのはいかがなものかと……」

「いや事情を知らぬままおられるよりきちんと現状を把握してもらっておいた方が奴らを刺激せんじゃろうからな。」

「まあ、確かにそうですな。」

俺たちが席に着くと長老が話をきりだす。

「じつはな、村の子供たち全員がさらわれたのじゃ。」

その言葉にセリーヌは目を見開いた。もちろん俺やレナも驚きの表情を隠せずにいた。

「それでのう、実はある人物に子供たちの救出をお願いしたのじゃ。」

そう長老が言った時扉が開いて一人の長髪、長身の男がはいってきた。今の俺ぐらいの身長になると俺より高いやつはそういなくなる。しかし、そんな俺より男は長身だった。

だが俺はそんなことより男の発する威圧感に誰よりも先に身構える。その様子を見た男は静かな笑みを浮かべた。

「ディアスどのじゃ。旅の剣士の方でな、腕に覚えがありこの事件も見過ごせないと言…。」

「ディアス！！」

急にレナの声が長老の声をかき消す。

「なんだ、レナ。この男を知っているのか？」

「彼は私の幼馴染よ。」

しかしディアスは何の言葉も発せず黙ったまま立っている。

その様子にセリーヌも眉をひそめながら

「それで長老、子供たちの居場所はわかっていますの？」

「うむ、こいつが紋章の森で一味を見かけたそうじゃ。案内はこいつにしてもらおうと思っておる。」

そう言って長老は自分の隣にいる男に視線を移す。その男は自分をセリーヌが村を出てから訪れた紋章術師のものだといった。

「はい、森の中で術の修行中に小屋の近くで見かけたんです。しかしあまりにも人数が多すぎて私一人ではどうにも…」

「場所が分かっているのでしたらこんな相談をしている暇があるのなら早く助けにいけばいいではないですか。」

セリーヌが話をきりだすが男がその言葉を一蹴する。

「しかし、敵の強さも分からずじまい、そんなところに戦いの素人が迂闊に手を出して子供に危害が加わるのだけは避けたいのだ。」

「でしたらわたくしたちが参りますわ。」

とセリーヌが言う。もちろん俺、それにレナもうなずく。

「セリーヌ！！！」

そこでセリーヌの父親が声をあげた。

「大丈夫ですわ、お父さま。わたくしも旅をつづけ術を磨き多くの困難をこえてきましたわ。それに隣のシロウはかなりの剣の腕の持ち主ですことよ。」

話の最中、不意にディアスが静かに声をあげた

「確かに……シロウといったか…その男只者ではないな。俺の発したわずかな気に敏感に反応していた。そいつがいれば事件は問題ないだろう。俺は不要のようだ。」

始めて声を発したかと思うとディアスはすぐさま長老宅を立ち去ろうとする。しかしそこに別の声が発せられる。

「ディアス、あなたは一緒に戦ってくれないの？」

「レナ……その男がいれば俺は用済みだろう。俺はいる必要はない。」

「いや、俺もお前の力に興味がある。誰も気づいてなかったようだがさっき入ってきた時、気を発していたな。あの気迫俺が知っている中でもかなりの力量とわかる。」

俺は素直にディアスという男の力量を評価する。

「確かに俺もお前の力量には興味はある。しかしなれ合う気もない。貴様一人で片付くものをわざわざ俺がいる必要もない…」

「ディアス、そんなこと言わないで一緒に行きましょう。」

レナがディアスに食い下がる。

「レナ、この事件にはあまり多い人数で望むものではない。もし俺がついて行ったとして五人などで行こうものなら敵にいらぬ刺激を与えてしまう。」

ディアスの言葉に俺以外の人物が納得の表情を浮かべる。

「ディアスといったな、確かに五人ならばいらぬ刺激を与えてしまうだろう。ならば二手に分かれていかないか。」

その言葉を聞いたディアスはしばらく考えていたがうつむく顔をあげて答えを出す。

「いや、もし行くのであれば俺とお前、そして案内役の男の三人でいい。お前の力を目の前で見てみたい。二人が付いてくるのであればおのずと俺とお前は別の組になるだろう。それでは意味がない。」

その言葉にセリーヌがディアスに食って掛かる。

それはそうだろう、自分の村のことを関係のない人物二人に任せるのだ。そんなこと許せるはずがないのだろう。

「いいえ、わたくしたちも行きますわ。そうでなければあなたに任せることはできませんわ。」

「セリーヌ、セリーヌはこの村をお父さんやレナと一緒に守ってくれないか。レナには万が一だれかが負傷したときに治してもらいたい。だから村で俺たちの帰りを待っていてほしい。誘拐犯たちが子供たちだけをさらったのにも何か訳があるとおもうんだ。それに森の中ではセリーヌの紋章術は規模が大きすぎる。子供たちを巻き込んでしまうかもしれない。」

セリーヌは俺の言葉にじっと黙って考え込んでいたが

「わかりましたわ。わたくしたちは残党が来たときに村をやつらから守りますわ。そのかわり必ず子供たちを無事救ってくださいね。」

俺たちは長老を含めた村人全員を完全無視で結論を出した。
その時の村人たちのあっけにとられた顔は忘れることはないだろう。何しろ皆目がテン、口を唖然とあけている姿はあまりにも滑稽なものだったから。
しかし、長老が真っ先に我を取り戻し俺たちに子供たちのことを託してくれた。

その日はあまりにも時間が遅くなっていたため明日の早朝森にむかうことにした。

次の日の早朝、俺とディアスの二人は村の男の案内のもと紋章の森へと向かった。出掛けに俺は俺の手に最もなじんだ双剣を投影して腰にさしていた。

俺たちが森の入口にさしかかりその森を奥へ奥へと進んでいるとぬ

かるんだ地面のある場所に出た。俺たち二人はその泥場を飛び越えた。しかし付添いの男は飛び越えることができないというので近くの木から伸びていた蔓を渡してやりそれをつたって男はわたってくる。

その時男の口が不自然に歪んでいるのを俺は見逃してはいなかった。今の笑いが今まで俺が何か心に引っかかっていたパーツをすべてつなぎ合わせたのだ。

渡り終わった男が俺たちに礼を述べる

「ありがとうございます。」

しかし、俺はすでに男を信用していなかった

「下手な演技はいい加減にしろ、貴様はどこか様子が変だった。紋章術師とは思えないほど鍛え抜かれた体、俺には服の上からでも容易にわかった。それに昨日の話との矛盾点だ。なぜ入口の泥沼を渡れないような男が危険な森の奥で術の修行などおこなっている。さらに先ほどの笑み、さしずめ俺たちを罠にはめた事に対する笑みといったところか。」

「何を言っているのですか？わたしはただ…」

そこでディアスが無口なまま男に一撃を与えようと斬りかかる。その一撃を男は後方に跳ぶことで避ける。その動きはセリーヌがガーゴイルの時にみせた動きを上回るものだった。

「クッくっ、ばれちまったらしょうがねえ。そうさ俺は一味の副長、

アザムギル様よ！子供たちをさらったのには理由があった、貴様の言っていた通り目的は子供ではないんだからなあ。今頃俺の部下どもが村を襲って秘伝の書を奪っているはずだ。」

「残念だったな、村は俺の信頼する仲間が守っている。貴様の部下などおそるるに足らんだろう、それに」

「「貴様程度の力で副長か、大したことはないな」」

偶然にも俺とディアスの言葉が重なる。

「てめえー」

アザムギルと名乗る男が俺に斬りかかってきた。ディアスはどうやら俺の力を見極めるつもりらしい。一歩引いて様子をうかがっている。

俺はやつの手に仕込まれたカギ爪での攻撃を干渉で受け止め莫耶で男のカギ爪をたたき折る。しかし、男は懐から刀を取り出しそれでさらに斬りかかってくる。それを俺はそのままの剣の流れを保ちながら回転を加え一気に男に詰め寄った。その瞬間俺の剣とアザムギルの刀が激しく火花を散らしていたが、もう一回転かかった干渉が男の武器を完全に破壊した。

勝負はそこで終わりだった。男もまさか己の必殺であったはずの不意打ちの一撃であった刀による攻撃がこれほど簡単に防がれるとは思わなかったのだろう、顔が驚愕の表情に歪む。その地点で男は完全に戦意を喪失していた。

俺は男にとどめをさすことはなかった。彼には話してもらわなければならないことがあったからだ。

「子供たちはどこにいる。答えろ！！」

俺の怒気をはらんだ声に男はふるえながらゆっくりと口を開き答えた。子供たちは森の奥にある小屋に閉じ込められているらしい。そこまで聞くと俺は男の後頭部に一撃を加え意識をうばった。そして投影した荒縄でアザムギルを縛り上げた。

離れたところでその様子を見ていたディアスは

「なるほどな、貴様の動きは才能によるものではないな。地道に鍛錬をつづけそれを極限まで昇華したものだ。しかしまだかなり伸びる余地はあるらしい。」

俺はその言葉に驚愕の表情を浮かべた。

なぜなら俺の剣術はかつてのアーチャーを模したもの。この世界に来て体の機能は上昇しているものの技術はあの時のアーチャーより低いものだった。それをこの男はたった一合の戦いで見極めたのだ。

「ああ、俺はもともと何の才能もないからな。ならできることをやるしかないだろう。」

「いや、才能がないということはない。お前は自分の技をそこまで昇華させた。それこそ努力の才能だろう。」

無粋な言葉ではあったが、それはディアスにとって初めて己以外のものを認めた証の言葉だった。おれは素直にディアスの褒め言葉を受け取った。

しばらく歩くと小さな小屋を見つけた。俺がその小屋のドアを蹴破り中に入るとそこには子供たちが無傷のまま取り残されていた。
俺が

「助けにきたよ。」

というと、子供たちはふるえながら皆固まって座っていたが俺を見るなり泣きながら俺に抱きついてきた。

「「「「「「「「うわーーーーーーん。」」」」」」」」
「「「「「「「「こわかったよーーーーーーーー」」」」」」」」

「もう大丈夫だ、お父さん、お母さんの所へ帰ろう。」

ガキィーン!!!!!
そういった時だった。小屋の外で激しい音がした。俺が小屋から飛び出すとそこには剣を交えた二人の男がいた。一人はディアス、もう一人は見たこともない男だった。

「ディアス!!」

俺が声を上げるとディアスは俺を制止した。

「お前はそこで子供たちを守っていろ、こいつの相手は俺がする。」

俺も本当のところディアスの実力が知りたかったのかもしれない。それに確信があった。ディアスはあんな奴におくれをとるようなことはないという確信が…
その時俺は気づいた。木の上に三人の部下らしき者たちが隠れているのを。

俺はすぐさまナイフを片手に三本投影し木の上の敵にむかって投撃する。ナイフは的に命中し三人の男は地面に落ちた。
全く気配に気づいていないわけではなかった、しかし子供たちの元気なようすに安心し気を緩めてしまった。そしてその気配が敵だと判断しきれていなかったのだ。なにしろ近づいているだけで殺気ははらんでいなかったのだから。

「てめえら、よくも俺の部下を！俺様はヴァ―ミリオン。一味の首領だ。」

そういってもう一人の男はディアスに斬りかかる。

ディアスの剣技は見事なものだった。あれは才能もあるだろうが何よりも努力を怠ったことのない剣技だといえるだろう。

ヴァ―ミリオンが斬り掛かると同時にディアスは一歩後ろに引いた。そして剣を左上段にかまえ一撃を放った。ディアスの腕に気が集まり筋肉が悲鳴を上げる。その筋肉の軋む音はまるで大地が震えるようなもので腕に凝縮されえた気は台風のようだった。

「――――――空破斬！！！！！」

その瞬間ディアスの剣から一陣の衝撃波が生じる。その衝撃波は飛ぶ斬撃と化しヴァ―ミリオンの体を引き裂く。その衝撃波が収まった時にはヴァ―ミリオンの体から血が噴き出しながら絶命していた。

あまりのすさまじい一撃に俺は心を奪われた。今の戦い、いや戦いとは言えない一方的な斬殺。その一瞬放った殺気はあのランサ―がゲイボルクを構えた時の空気に酷似していたのだ。そう、彼の剣から明確な殺意が発せられていた。そしてその殺気が風の刃と化し敵

を屠った。俺にはそう見えたのだ。

「今のが空破斬だ。剣圧により空気の刃を生じさせる技だ。俺の技は見せた。いずれお前の本気も見せてもらうぞ。」

（まいった、見抜かれていたか。さすがにこの男は侮れないな。）

そして小屋に戻ると子供たちが固まって立っていた。

「ここにいるので全員かい？」

そう言うとその子供たちの中で最も年上らしい少年が

「うん、そうだよ。みんなこの小屋に閉じ込められてたんだ。お兄ちゃんたちは僕たちを助けにきてくれたんだよね。」

「ああ、そうだよ。村の人たちに頼まれて君たちを助けにきたんだ。もう大丈夫、さあ村に帰ろう。」

そして俺達は子供たちを全員引き連れ森の小屋を後にした。子供たちの顔には喜びの表情がいっぱいに広がっていた。帰り道の途中一番小さな子が歩けないと泣き出してしまったので俺はその子をおんぶし村へとむかった。こんな小さな子にはこの道はきつかったのだろう。俺の背中で疲れ果てて眠る子供を見た俺はなにか自分が父親になったようなやさしい気分になった。

村に着くとレナ、セリーヌそして村人たちが総出で俺たちを迎えた。親たちは我先にと自分の子供のもとへ駆け寄る。

幾人かの子供たちは俺たちの武勇伝を両親に自分のことのように話しているのが聞こえた。

そこにレナ、セリーヌが駆け寄ってきた。

「シロウ大丈夫だった？どこも怪我ない？」

「大丈夫だよ、レナ。」

そう言うとレナは息を吐き「よかったー」とつぶやく。

「シロウ、今回はありがとうございました、おかげで村に子供が戻ってきましたわ。」

「いや、気にしないでくれ。それに俺だけの力じゃない。ディアスにも礼をいってくれ。」

「…わかりましたわ。」

そういってセリーヌはこの場を離れる。

その後長老や子供たちの両親が次々礼を言ってきた。

長老の話では俺の予想通り幾人かの賊が村に攻め入ったらしい。まあセリーヌの一撃でのされるような雑魚ばかりだったようだが…

しばらくしてからディアスがこちらにやってきた。

「シロウといったな。俺はこれで村を去る。いずれ戦う時が来るだろう。その時を楽しみにしている。」

そう言ってディアスは村を去ろうとしたが

「ディアス！いっしょに行けないの？わたしやっとディアスに会えたのにまだ何にも話せてない。」

そうレナが言ってきた。

「レナ、またいずれ会う日が来るだろう。先ほどセリーヌといったか、女が来てソーサリーグローブの調査をしていると聞いた。なに、シロウならお前を無事守れるだろう。ならばどこかで会える日が必ずある。」

「……わかったわ、ディアス。また必ずどこかで会いましょう。」

しかしそこで俺がディアスを呼びとめる。彼の技を見てからずっと思っていたことだった。

「ディアス、お前の剣はもうぼろぼろのはずだ。あんな無理な技を使い続けるには強度が足りない。」

「…ああ、わかってはいる。しかしこの剣に勝る名剣を見たことがない。」

その言葉に俺は小さく笑みを浮かべた。

「その剣、俺に打ち直させてくれないか。必ず元の…いやさらにいいものに打ち直してやる。」

ディアスは予想外の俺の言葉にしばらく硬直していたがやがてゆっくりと口を開いて、

「……では頼むとしよう。確かにこのまま使い続ければこの剣も近いうちに折れてしまうかも知れん。しかし本当に打ち直せるのか。」

「ああ、まかしてくれ。俺は剣のことになれば『最強』だ。」

その夜、一晩中マーズの村の中には鉄を鍛える音が響き渡った。俺の知っている名剣の情報、そして鍛えた者の思いを心に投影し、己のできる全てを組み込みながら一晩中俺は剣を鍛えつづけた。夜明け前…決して折れることのない不屈の思いを汲まれた剣が鍛え上げられた。

次の朝ディアスに鍛え直された剣を渡す。その時のディアスの驚いた顔は本当に新鮮なものだった。何しろそれが無表情な彼が初めて俺に見せた本当の表情だったのだから。

もちろん剣の丘にはその剣が登録されたのは言うまでもない。

ディアスは俺に礼を。そしてレナ、セリーヌに別れを告げて俺たちより早くに村をあとにした。必ず再会すると胸に刻み込んで…

第6話：剣士（後書き）

ディアス登場！早く書きたかった人ですよ。
彼ってサーヴァントクラスの能力ありそうですよね

第7話：魔龍、双剣士（前書き）

久々に投稿できました。いろいろ忙しくて……
展開が早すぎる気もしますが。今月中にもう一話は投稿できればいいなあ…
いや、たぶんしますけどね。

第7話：魔龍、双剣士

無事マーズの誘拐事件を解決した俺たちはディアスと別れ次の目的地であるハーリーにむかおうとしていた。俺たちがマーズを出てすぐのこと、クロスのほうからやってきた一人の男と出会った。其の男は作業着のようなジャケット、しかしそれは街の中をそのまま歩いていても違和感のないであろう上着を肩にかけていた。

「あなたたちはマーズの村のお方ですか？」

その男の問いに返事を返す。

「いや、俺たちはマーズの村のものではない。ここにいるセリーヌを除いてはな。俺たちは今マーズの村を後にしてきたばかりだ。」

その言葉に男は目を輝かせる。そしてセリーヌのほうに向きなおり

「おお、あなたはマーズの村の方でしたか。もしやあなたも紋章術師の方では…」

「はい、そうですけど。なにかありましたの？」

セリーヌが首をかしげながら男に向きなおり返事をする。

「ああよかった、だったら力を貸してくれないか。あの化け物を退治してくれる人を探してサルバからやってきたんだ。」

その言葉を聞いた俺とレナが互いに向き合い目配せをし、男の方に向き直った。

その男がとても不安そうな、そして誰かに助けを請うかのような視線にくぎ付けになっていた。
レナが男に何があったのか詳しい事の次第を尋ねる。

「あの、いったいどういうことなんですか？サルバに化け物って…」

レナは以前に自分自身がかかわったアレンの魔石のこともあったため不安を隠せない様子で男に尋ねる。
その言葉に男は顔をふせ、肩をわなわなとふるわせながら答えた。

「ああ、実はサルバの坑道の奥にでっかい魔物が出たんだ。坑道主の息子のアレンがいたるところから戦力をかき集めているってことなんだがどうにも思わしい人物が集まらないらしい。なんでもアレンはシロウという男が凄腕の剣士であり信用のおける人物だと言っていたんだが見つけることができなかったんだ。其の男はなんでもアレン自身を救ってくれた恩人だそうだが…その男も見つからずじまい……そこでマーズの村の紋章術師に頼もうと思っていたんだ。誰か魔物の退治に来てはくれんだろうか？」

「あの、士郎というのは俺のことですけど…」

その言葉を聞いた男の表情がパーっと明るくなる。

「あ、あんた本当にシロウさんかい？ならば話は早い。どうか俺たちの街を救ってはくれんだろうか？」

俺は自分一人の判断では決めることができないとレナたちの方に向き直った。俺が突然男とは反対の方に向き直ったので男は士郎が来てくれないと思ったのか非常に残念そうな顔に変わる。しかし俺はレナ、セリーヌが行くといえばもちろんサルバに戻るつもりであっ

た。
俺のサルバに戻りたいという意思が伝わったのだろうか、いやレナ自身戻りたかったのかもしれない。その沈黙は俺の意志とは別にレナの言葉によって切り払われた。

「行きましょう、シロウ。あそこにはアレンがいるの。それにそんな魔物がアーリアにむかわないとも限らないわ。」

レナはやはり幼馴染のことを、そして故郷のことを心配していた。もちろん故郷や友人を思うことは当たり前のことだろう。確かにそのような魔物が故郷の近くをうろうろしていたらこれからの旅に身が入らないだろうからこれでよかったと思う。もし死闘を演じなければならなかったときその感情はレナの命を奪う要因の一つとなり得る可能性をはらんだものだったのだから。

「レナがそういうのなら俺は構わない、しかしセリーヌはどうなんだ？」

俺はもう一人の同行者に声をかける。俺はレナが大切だしレナは故郷や友が大切、しかしセリーヌにとってそれは俺たちほどかかわりのないもの…

「わたくしはあなたに村の子供たちを救われた恩のある身、なにも異論はございませんわ。」

いや…違った。わざとらしい返答ではあったがその胸中を俺は読み取ることができた。セリーヌにとってはアーリアのことは他人事かもしれないしサルバのことも他人事かもしれない。しかし彼女は俺たちに付き添うことで俺たちを守りたいと言ってくれたのだった。

それは彼女なりの照れ隠しだったのだろう。

三人の意見が出揃う。

「わかりました、では俺達三人でよければむかいましょう。」

その言葉に男は顔をほころばせ、すぐにむかいましょうと馬車を用意してくれた。その馬車はどこか見覚えがあった、それはアレンが以前用意してくれたものと同じものだった。俺たちはその馬車に揺られ半日弱でサルバの見える草原にやってきた。そこから見たサルバは以前のような活気はなく鉱山も稼働しているようにはみえなかった。こんな光景はつい先ほど見たような気がする。セリーヌの村での一件だった。あのときも村には活気はなく寂しさの漂う世界を形成してしまっていた。今度はサルバだった。

サルバについた俺たちは今回の雇い主であるアレン宅を訪れた。

「アレン、久し振り」

「レナ、それにシロウまで。よかった君たちが見つかって。わざわざ来てもらってすまない。今回集めた兵士たちだけではどうも不安でね…」

そう言うアレンの顔は申し訳なさ半分、嬉しさ半分といった表情を浮かべていた。しかしそのどちらよりもあふれていたのは安堵の表情であった。俺たちが無事であったことへの安堵であろうか、それとも俺たちを信頼しきってもう大丈夫だといった安堵の表情だったのだろうか…

「いいのよ、アレン。連れて来てくれた人から聞いたわ。魔物が出

たんですって？」

レナは大まかなことは先ほどの男から聞いて知ってはいたが細かいところまでは知らなかった。

「そうなんだ、レナ。僕が坑道の奥に視察に行った時だったんだ。巨大な影が僕のほうに近づいてきた。僕はその場を逃げ出したんだがいつその魔物が坑道から這い出してくるとも分からない。だからこそ君たちの力が必要だと考え君たちを探していたんだ。」

どうやらアレンが見たのは魔物を直接ではなく大きな影だということだ。そのことをレナも心配していたのだろうか。ホッと息を吐く。まだ誰も襲われてはいない、アレンも怪我はない、それに安心した。

「なるほどな、確かに魔物が這い出てきては厄介だ。わかった、俺達で何とかしよう。ただし君の集めた兵士は外で待機していてくれないか。俺たちの攻撃のまきぞいをくうかもしれない。」

確かにそんな理由もあった。しかし俺はこの仲間たち以外に投影を見せたくはなかったのだ。もし魔物がとてつもなく手ごわい相手でAクラスの投影をしなければならなくなったときそれを見た一般人たちはどう思い、噂はどこまで広がるか分からない。余計なうわさが広がればこれからも行動しにくくなるだろう。何としてもそれだけは避けたかったのだ。

「ああ、わかった。もともと人数合わせの者たちばかりだ。ところでさっきから気にはなっていたんだけど後ろの方は誰なんだい？」

そういってアレンはセリーヌの方を見る。アレンからすれば初対面の人物であったため身元の確認がほしかったのだろうか。

「わたくしはセリーヌですわ。シロウ達とはクロスから一緒に旅をさせて頂いておりますの。わたくしこれでもマーズの紋章術師ですのよ。」

マーズのというよりシロウやレナの友人というほうがアレンを安心させていた。しかし紋章術師という言葉も非常に心強いものでもあった。

「マーズの…。それは心強い、では皆さん魔物退治よろしくお願いします。」

アレンの先導のもと俺たちは坑道の入り口までやってきた。そこには数人の兵士が心配そうに坑道の奥を見つめていた。今にも魔物が目の前に広がる闇から躍り出て自分たちを食い殺すのではという心配の色が表情に浮かんでいた。

「いったいどうしたんですか？皆さん。」

「ああ。アレンの旦那、実は一人の旅の剣士さまが自分が魔物を退治してやるって坑道の中に入って行っちまったんですよ。」

その言葉を聞いた俺は一人で実力の知らない相手に戦いを挑むという愚かさが人より理解できている分、心に焦りが生じていた。

「なんだって？その人は勝手に入ってしまったのか、まずい急ごう。」

俺はレナ達を言葉、動作で促し坑道の中へとはいって行った。
坑道は意外に広く（以前は途中までしか入っていなかったために気付かなかったが）空気は湿っていた。また複雑にいりくんではいたが俺の物体の解析能力はこんなところでも役に立った。しばらく歩くと少し広い空間に出た。どうやらここは人の手によりできたものではないらしい、ということはこの先に魔物がいると考えて間違いないだろう。

地鳴りのような咆哮、そして金属のような固いもの同士がぶつかり合う音、おそらく魔物の固い皮膚と剣のぶつかり合う音だろう。どうやら今まさにその剣士が魔物と戦っているらしい。音を頼りに俺たちは先へと進んでいく。その先で俺たちが見たものは土煙り、そして今にも坑道を破壊せんばかりの巨体がうごめいているばかりであった。その巨体は細長い二つの頸を持ち、一方は炎のように赤く、もう一方の頸はまるで深い淵を表すかのように青かった。

「龍……か。」

俺がそうつぶやくとその声が聞こえたのだろうか、先に戦っていた男がこちらに気づき俺たちのほうを向いて

「君たち、何しに来たんだ！危ないから退がっているんだ。」

男は一瞬ではあるが龍から眼をはなしてしまった。戦いの最中に敵から眼をはなすという行動はほぼ間違いなく死を意味する。

「貴様、何を考えている！戦いの最中によそ見をするんじゃない」

俺はそう言うがすでに龍は男な背後に近付き今にも襲いかからんと

していた。俺はとっさに弓を投影し魔物龍にむかって矢をいろうとした。番えるは龍殺しの剣。

しかし俺の一撃は放たれることはなかった。なぜなら龍が男に襲いかかるのではなくその巨大な体躯からまばゆいばかりに光を発しあたり一面を金色の光で覆ったのだ。

それは一瞬のことだったのかもしれない。しかしそれは俺にとっては永遠とも思える長い時間に思えた。
なぜならその龍が発した光は決して邪悪な感じのものではなくむしろ包み込むようなやさしさと暖かさに満ちていたものだったから。
そして俺は確信する。
この魔物は人に害を与えるようなものではない、むしろ精霊の域に達したような存在であると。

金色の光がおさまるとそこには魔物の姿はなかった。あれだけの巨躯、先が行き止まりであるこの洞窟で隠れる場所など皆無といえる。
それならあの魔物はいったいどこに消えたのだろうか？
そこに残るは俺達三人とあおむけに倒れたもう一人の剣士だけだった。

しかしなにかその剣士の様子に俺は違和感を覚える。すると剣士が立ちあがり周りを見渡す。その時俺、いや俺たちは剣士の異常にはっきりと気付く。しかし剣士のほうは全く気付いていない。

「いったたたた、うん？龍はどこへ行った？ははーん、なるほど。僕に恐れをなして逃げ出したか。」

非常に得意げに笑っているが、『そうじゃない』

そこに恐る恐るレナが剣士に声をかける。

「あの～、背中に…」

「背中？」

剣士が首だけを後ろに向けそのままの状態で固まる。固まること数秒…

「なっなんだよこれーーーーー。」

まあ当然の反応だろう

剣士は「取って取って」といいながら俺たちに詰め寄ってくるが俺たちにいったいどうしろというのだろうか。まさか龍の頸を引きちぎれと……

（グラムを使ってみるか…）

一瞬俺はよからぬことを考える。

龍たちはギャフとかフギャとかいいながら剣士の耳元に顔を近づける。

「なんだってーーーー！僕に取りついた――――――――――！！！」

どうやら彼らは融合してしまっているらしい、そして体を共有しているから言葉が通じ合っているのだろうか。

龍たちのそのようすを見て男は声をあげる…

「ふざけるな！！！」

その一言にレナはびくっと震え

「…何も言ってません。」

「いや、君に言ったんじゃあないこいつらに言ったんだ。」
どう見ても剣士が向いている方はレナのほうだった。そりゃあ急に目の前でどなられれば誰でもあんな反応をするだろう。
そう言って剣士は自分の後ろを指さす。
どうやら本当に会話が成立しているらしい。

今にも泣き出しそうな剣士のと龍の合計三つの顔が俺たちに近づいてくる。

「いったいどうしたらいいんだよ、君たちに気を取られたのが原因なんだから責任とってよね。」

などとほざく始末……
俺は皮肉を込めて剣士に話しかける

「戦いの最中によそ見をするなど貴様が未熟な証拠だ、人に責任を押し付けるより先に自分の精神を磨くのだな。」

若干口調があいつのようになってしまった…
俺の言葉にまさか自分が言い返されるとは思っていなかったのだろう、口を噤んでしまう。

しかしその沈黙をセリーヌが霧散させる。

「何とかできるかも…」

しかしその声はいつものような自信に満ちたものではない。それでも剣士は表情を輝かせる。

「本当に？こいつら…何とかなるの？」

「確証はありませんわ、でもマーズのわたくしの家で読んだ本の中に憑きもの落としに関する本がありましたわ。」

（俺のルールブレイカーを用いれば龍をおとすことはできるかもしれない、しかし先ほどの光…どうやらこの龍はただの魔物ではない。むしろ守護のために剣士にとりついたようにみえた。ならば俺の意志でこの龍を落とすことはできない。）

その考えがその龍たちに届いたのだろうか、心に直接語りかけてくる声があった。

『主はわかっておるようだな、我らが魔物ではないということを。それに主には我らも計り知れぬ力があるようだ。主の力で我らをおとすこともできよう。ただ今しばらく待ってはくれぬだろうか。この男、どうも運気に恵まれぬようだ、このままではいずれ死ぬことになろう。我らはそれが我慢ならぬのだ。』

俺は心の中に響くその声に心の中で返事を返す

（ああ、もちろんあなたたちをおとすつもりはない。それより貴殿は精霊の類のものか？先ほどの光、守護の光のようだった）

俺は念話のようなものに思ったことを心の中で話す。

その思いに声は礼儀正しい返事をくれた。

『かたじけない、主の心…大変嬉しくおもうぞ。確かに我ら魔物ではなく魔族だ。しかし魔族は決して人に危害を加えることはない。我らはこの星ができた時に生まれ、そしてこの星の行く末を見守ってきたのだ。この世界が滅びるその日にわが生涯も幕を引くのかもしれぬ。』

その言葉に俺は尊敬の意をとなえる。この龍たちは自分の身よりも目の前の男のことを気遣っている。まるで昔の俺のように…いや俺のは世間知らずの無謀だった。

俺と龍たちの念話が終わると俺を除いた三人はどうやって龍を落とすだのとあれこれ議論しあっていた。

俺から龍をおとすつもりはない。しかしとりつかれた本人がどう考えるかは別物だ。俺としてはおとす必要はないと思うのだが憑かれた本人からしてみればこれほど邪魔なものはないだろう。

龍と戦っていた男はアシュトンと名乗った。彼は一子相伝である紋章剣の使い手ということだった。

彼のたっての願いにより俺たちは龍を払い落す方法を調べるべく再びマーズのセリーヌの家へとむかった。セリーヌの家で壁を覆いつくした書棚に視線を這わせていたレナは目的の資料を見つけた。

そこにはこう書かれていた。

『魔物流に取り憑かれし者　空を舞う王者の涙で　その身を清めよ
　王者の涙を持ちし者　静かなる水面に抱かれし　母なる体内の奥深く
　険しき山頂に舞い降り　誇らかに勝負を挑む
　勝利を得りし時　そなたは王者の涙を受けん

そして誓いの呪詞を唱えよ　さすれば激しき苦しみ咆哮と共に
魔物龍はこの世より消滅せん…
『

それを見た俺たちは動きを止める

「消滅って、この子たち…死んじゃうの？」

レナが心配そうな、そして悲しそうな表情を浮かべた。

レナの問いにセリーヌが答える。セリーヌも悲しそうな顔をしていた。俺を除いた二人も龍たちが悪い存在でないことに気づいたのかもしれない。そうもう一人の男も……

「そういうことになりますわね…」

レナとセリーヌは龍の様子を見たあと、その視線をアシュトンの方に向ける。

「なっ、なんだよー！なら君たちは僕にずっとこのままの姿でいろって言うの？」

「でも、なにも死なせてまで…」

その言葉にアシュトンの方も非難の言葉をつづけようとするがその言葉は俺の言葉により遮られる。

「レナ、セリーヌ。俺たちがどうこう言えることじゃないよ…本人がそう望んでいるんだ。」

（本当にその方法で払い落すことになるのなら俺がルールブレイカーを使うだけだ。この龍たちを決して消滅させたりなんかしない…だがアシュトンという男を信じてみたい。）

俺の言葉にレナもセリーヌも口をつぐむ。しかしアシュトンの表情は複雑そうに苦笑いを浮かべていた。やはりわかっているのだろうか。

「ところで険しき山頂っていうのは何処のことだろう…」

俺はさっきから気にかけていたことを話す。もし方法が分かっていても場所が分からなければ何もならないからだ。

「それはおそらくラスガス山脈ですわ」

話を聞くとそのラスガス山脈とはクロス大陸西部に位置する大陸一高い山脈のことだった。

ラスガス山脈と聞いてレナが声を上げる。

「ラスガス山脈ってたしか頂上に巨大な魔物が生息しているって噂を聞いたことがあるわ。」

「ええ、きっとその魔物というのが王者の涙をもっているんですわ。」

その言葉を聞いたアシュトンは

「僕は元の体に戻るんだ、みんな…行こう！！」

そういってラスガス山脈を目指して歩きだした。

第7話：魔龍、双剣士（後書き）

いかがなもんでしょうか？アシュトンの雰囲気出ていましたでしょうか？彼はパーティーの中でボケ担当を目指します！！

第8話：新しい仲間（前書き）

仲間は増えていきます。ええどんどんと…
くさい言葉を書くのは非常に恥ずかしいです（泣）
でもスターオーシャンってこんな作品ですよね…きっと

第8話：新しい仲間

ラスガス山脈の険しい岩山地帯を登りきった俺たちの目の前には木々を組み合わされ作られた巨大な鳥の巣が現れた。その大きさは士郎たち四人が全員入ってもまだ隙間ができるほどの巨大なものであり、その驚くべきは普通の鳥の巣とは異なり非常に綿密に組み合わされた細部の細かいものだった。

さらには巣に使われている木々は小枝というより木々の樹冠をまるまる使用しているようにも見える。

シロウ達がその巣のあまりの巨大さに言葉を失っていると甲高い凶声と共に上空から怪鳥が俺たちの目の前に舞い降りた。

その大きさ、先日のアシュトンにとりつく以前の龍よりもさらに大きいものだった。怪鳥の体躯は七色に輝き神々しいまでの光を放ち、その鋭い目で一行を見下ろしている。

突然アシュトンの肩の龍たちがけたたましい声を上げる。声の相手は目の前の怪鳥のようだった。龍たちの声に反応し怪鳥も呼応して鳴く。

怪鳥が深い唸り声を上げる。士郎には龍の時と同じように心に響く声があった。しかし今回の相手は俺に対してではなくアシュトンにとりついている龍たちに向けられたものだった。

『――――――人間の若造に取り憑いているとはお前たちも落ちぶれたものだな……』

その声には長い年月を生き、いくつもの修羅場をくぐり抜けた者にだけ存在する威圧感がこもっていた。怪鳥の声に龍たちが返事を返す。ただし自分たちの口ではなくアシュトンの口を借りてだ。つま

り今アシュトンはアシュトン本人ではなく龍たちに乗っ取られた形となっている。

『フンッ、久し振りだな……。…ジーネ』

その会話を聞いていると横でざわざわとレナ達が騒ぎ出す。

「あの魔物話すことができるんですの？それにアシュトンは何を言ってるんですの…」

確かに見た目アシュトンと龍たちにジーネと呼ばれた怪鳥がまるで昔なじみのように話しているのだ。疑問に思わないはずがない。セリーヌの言葉にレナが否定の言葉を答える。

「セリーヌさん、あれはアシュトンじゃないわ。龍たちがアシュトンの体を借りて喋っているのよ。」

俺達、いやレナ達が話している間にも魔族の間では淡々と会話が進んでいた。

『―――時は変わったのだ、生きるためには手段を選ばぬこともある…』

アシュトンは淡々と言葉を紡ぐ。しかしその口から発せられる一言一言には落ち着いた、違う…静かな威圧感がただよっていた。人の体を介してまだこのような威圧感を放てるものであろうか。その姿はかつての聖杯戦争時のサーヴァントを彷彿させる。よく見るとアシュトンの瞳の色が緑から紅へと変わっていた。

『この山に足を踏み入れた以上貴様たちを生きて返すわけにはいか

ぬ、貴様たちがこの私と戦うにしてもそのような体にとりついていては貴様たち本来の力は出せまい……』

アシュトンは試してみるかといい怪鳥の方に向き直る。今度はアシュトンの目の色が青色へと変化していた。
その空気を感じとった俺が干将・莫耶を投影しジーネにむかってかまえる。精神を集中しジーネの初動作に備える。その時…

『士郎よ、余計な手出しは無用…この勝負の決着は我々がつける。』

そう言って俺に有無を言わさずアシュトンはジーネに斬りかかる。アシュトンの動きの一つ一つは洗練されていた。右手に持つ短剣で斬りかかると同時に左手に持つ短剣で相手の攻撃をかわし、さらにその回転を利用し右手をジーネの頸へと一閃する。しかし怒涛の攻撃をジーネは巨大な体とは裏腹に最小限の動きでかわし、時には翼で旋風を巻き起こしアシュトンの動きを完璧なものへとはさせない。たとえて言うならアシュトンの動きは柳のようでありジーネの動きは正しく風だった。普通に考えれば、なびく柳は風でいくら攻撃してもダメージは受け流されるだけであろう。しかしそれは力が拮抗していて成り立つもの……本来の姿で戦うジーネに比べアシュトンの体を借りて戦う龍たちにとってはそれは不利なものでしかなかった。徐々にジーネの力にアシュトンが押し始められる。ジーネが再び突風を巻き起こす。その風に一瞬アシュトンに今までなかった小さな隙が生まれる。

『―――やはり人間のからだ…。貴様たちが使うにしては少々役不足だったらしい…』

そう言ってジーネの爪がアシュトンの体を引き裂くために迫った。
その爪はアシュトンの体をひきさ…

「させるか！貴様のようなやつに仲間を殺らせはしない！！！」
俺はアシュトンの前に躍り出てジーネの鋭い爪を干将で受け止める。
俺の動きに一瞬ジーネが驚いた様子を見せる。それはそうであろう…。ただの人間と侮っていた者に己の一撃が完全に防がれたのだから…
俺が飛び出した様子にアシュトン（龍たち）は驚いた様子を示しながらもすぐに我を取り戻し俺にどなった。
『なぜ邪魔をした！これは俺たちの戦いだった、これで死ぬなら「お前らは馬鹿か！簡単に死ぬなんて言うな、もうお前たちは俺たちの仲間じゃないか。仲間が危ないときに助けないなんてそんなこと許せるはずがないだろ！」っつ……』
龍たちの言葉は俺の言葉に阻まれた。振り返るとレナやセリーヌも互いにうなずき戦闘の態勢を整えていた。
『っ仲間か……そのような言葉よもや人間から聞くことになる日がこようとは。我ら魔族を仲間と呼ぶか…だが、それもいい。いいだろう、ともに戦って生きよう。なに…今一度は助けられた命、もう己から捨てようとは思わぬ。』
龍たちの言葉に俺は笑顔を浮かべ再び双剣を構える。敵はただ一つ。目の前に立ちふさがるは一羽の怪鳥だけ。
俺たちの様子にジーネが言葉を紡ぐ。
『人間などを仲間と認めるか…貴様たちにもう魔族としての誇りはない。ならばその生涯我の爪で閉じてくれよう』

ジーネの言葉の終了を合図に戦いの火ぶたは切って落とされた。

俺は干将・莫耶を虚空へと投げ放つ。そして本来の力を発揮するための言葉を紡ぐ。

言葉とともに空中に投げられた二対の剣は互いに引き合いジーネの首に迫る。その不意打ちとも思える攻撃をジーネは紙一重のところでかわす。しかしそこにアシュトンの斬撃がせまる。剣には氷の属性が付与されているようだった。アシュトンの一撃がジーネの羽をかすめる。しかしそれに見惚れて次の攻撃を忘れる俺ではない。俺は聖剣でも魔剣とも呼ぶことはできないがかつての刀匠が鍛えた名剣の数々を空中に投影し射出するために展開する。

「全投影層写（ソードバレル・フルオープン）」

俺の号令と共に空中の剣軍がジーネに迫る。剣の一本一本をジーネは羽を飛ばしたたき落とす。しかしその中の数本がジーネをかすめ、その中の二本が足に突き刺さる。かすめた個所から紅の筋が滴り地面の一部を赤く染める。俺の剣軍にアシュトンも驚いた表情を浮かべる…一瞬動きが止まる。

まさか空中に剣軍が現れそれがいっせいに射出されるなど誰が予想できようか。それはアシュトンに限ったことではなかった。俺の能力を知っているレナやセリーヌまでも驚いた様子だった。確かに彼女たちは俺が一度に投影できるのは一本ずつだと思っていたであろうし、それは文字通り俺が使うために出しているものだと思っていた。

それが空中に計27本も投影されそれがいっせいに射出されるなど誰が思おう…もし自分がやられる側にいたとしてあの剣軍がありとあらゆる方向から襲ってくればすべてをよけきるのは不可能に近い。事実ジーネも半数以上はたたき落とし、数本は避わすことができた。

しかし数本は体をかすめ二本は足に突き刺さった。
二本突き刺さる…二十七本のうちの二本、たったそれだけ。しかしそれはジーネが自分たちよりはるかに巨大な存在だからこそ傷自体は大したことはないように見える。だがもしそれが自分たちに突き刺さっていれば…それを考えるとレナやセリーヌに冷たい汗が流れる。

俺の攻撃にジーネもゆっくりと口を開く

『人間…我に傷を負わせるとは……。今の攻撃はなかなか肝を冷やした。あのような技、今まで一度も見たこともないものだ。あの剣軍…魔力はこもっていなかったがどれも名剣ばかりであった。当たり所が悪ければ我もただでは済まなかったであろうな。』

（確かにそうだ、あれだけの剣軍をほとんどたたき落とし傷は足にある二か所と羽をかすめた数か所のみ。が、それだけで十分。なにも俺がとどめをさす必要はない。俺には仲間がいる）

俺は信じ切っていた。アシュトン以外にもいる仲間のことを。

「士郎！アシュトン！その場を退いてください。今から大技行きますわよ」

詠唱はすでに終わっているのだ。セリーヌの声とともに俺たちはジーネのいる位置から飛び退る。

「レイ！！！」

セリーヌにより放たれた一撃の紋章術は以前ガーゴイルを塵一つ残さずに消し去った光の帯。その輝きが神々しい姿で空を舞う王者の

頭上から襲いかかる。光は王者を飲み込みあたり一面を光の渦に包みこんだ。

光がおさまるとそこには傷ついた王者の姿が横たわっていた。ジーネが口を開き小さく言葉を発する。そして光の中から飛び出したジーネにむかってアシュトンはとどめとばかり己の剣に炎と氷の紋章を付与させる。アシュトンがその剣を虚空にむかってふるうと同時に右剣からは炎が、左剣からは氷の渦が巻き起こりジーネを襲った。

『っぐ、なぜだ…それほどの力をもちながら人間なぞとともに進む。確かにそこにいる人間どもは予想外の力を持っていた。なればこそそういった危険な存在は排除すべきではないのか…』

ジーネの言葉にアシュトンの口が開かれる。

『ジーネ、まだ気づかぬのか…。この世界の異変に。世界各地では破壊することしか行わない下等な魔物どもが我が物顔で跳梁跋扈している。我々が奴らの上に君臨していたのははるかに昔のこと…今となっては奴らは我らに牙をむき襲ってくるだろう。』

そしてアシュトンは口を閉じ、下を向きさらに言葉を続ける。

『原因は貴様も知っているとおりエルリアに落ちたという魔の石…。この異変は人間たちを滅ぼすだろう。しかしそれは我らも同じこと。だがこの者たちは自ら望んでこの異変の原因を突き止めようとしている……』

アシュトンの口から発せられた言葉にジーネも口をつぐむ。しかしその眼は俺たちをじっと見つめていた。まるで心の奥底まで見透かされるような眼光。その考えは間違いではなかったらしい。直後に

発せられた言葉に俺は耳を疑った。

『なるほど、シロウというのか…貴様は一度この世の地獄を味わったことのある身らしいな。貴様の中には焼け果てた大地が見える。孤独な。しかしそんななかにも救いはあったらしいな。一本の剣が見える。そしてレナといったか…貴様も同じ心を持っているな…親との決別…か。』

「なっ、ジーネ、あなたは心が見えるのか。それも俺の内面世界ですら。」

『そうではない、我に見えたモノは貴様の表層だけだ。完全に貴様の中を知ることなど到底できない。もし知ってしまえば我の体は滅びるであろう。貴様の剣によってな。』

その言葉を境にジーネは首を垂らし黙りこくってしまった。俺たちに付けられた傷が悪化したのであろうか。その場には真っ赤な血だまりができていた。そこにレナが駆け寄る。

「ジーネさん。しっかりしてください。私たちはあなたを倒すために来たのではないのですから。だから傷をみせてください」

そういうとレナは俺とアシュトンによりつけられた剣の傷、紋章による負傷に両手をかざす。レナの両手から太陽のように暖かいアノ光が発せられる。その光はジーネの傷を瞬く間に癒していく。己に起こった異変にジーネが首を持ち上げる。暖かい光に包まれた場所からだんだんと痛みが引いて行くのがわかりジーネ自身驚きを隠せない表情を浮かべる。

『なるほどな、お前たちがこの者を認めるのもわかる気がする。だ

が、お前たちの取りついている男はどうなのだ。その男は己が身かわいさにお前たちを消滅させてでも祓うという。そのような男にお前たちが手を貸すことに意味はあるのか！』

しかしその言葉に龍は気にした風を見せずに答える。

『ああ、確かにそんなこと言ってたなあ。だがよ、俺たちはこいつらのことが気にいってんだ。それ以上に理由はいるのかい』

先ほどとは違い乱暴な言い方になってはいるがその言葉からは先ほどまでとは変わらない信頼のおける声が発せられていた。

『我らはいつも一人だった。だが仲間があるというのはいいものだ…』

龍が発した言葉は俺たちにとってもとても嬉しいものであった。確かにこの龍たちは俺たちのことを仲間と言ってくれた。それだけで充分だった。その言葉は魔法の言葉…一人であった者をやさしく温かい輪の中に導きいれるための言葉。孤独ほど嫌なものはこの世には存在しない。どのような困難な状況でも、辛いことがあっても仲間が助けてくれる。嬉しいこと、楽しいことは共有できる。俺もその言葉に救われた。

仲間、それだけで充分だ。皆幸せになる、輪の中にさえ入ることができたならば……

『ずいぶん変わったものだな…以前のお前とはまるで結びつかぬ…しかし我々も変わらなければならぬのかもしれないな。……だが我は人間より恐れられている身。やはり人間とは共に生きることなどできない…』

ジーネはそう言うと悲しそうにしかし少しの笑みを浮かべながら翼を広げ空へと飛び立った。心の中に響いてくる

『さらばだ』と……。

俺の手に一つの光るかけらが落ちてくる。俺はそのかけらを手に取る。暖かいが悲しさを含んだ一滴の涙。これこそがジーネの心からの涙…王者の涙だった。

俺の手に涙が入った瞬間アシュトンに憑依していた龍たちが精神を元のアシュトンの肩に融合した体に戻す。

「さあっ、みんな怪物をやっつけよう！！」

急に起こったコミカルな声に俺たちはずっこける

その声の主アシュトンはというと「アレッあれっ？」などとほざいている始末。

「プッ」

それは誰の笑いだったのだろうか。場はずれな言葉を放ったアシュトンに向けられた小さな笑い。それがあたり一面の笑いへと広がる。

アハハハ八八ノ　、

あたりまえだ、場違い、いや時間がずれ過ぎて今までのシリアスな雰囲気が吹っ飛んでしまった。俺たちはたっぷり笑った。今までのしんみりした様子などどこに消えてしまったのかというくらい。

ひとしきり笑った後俺たちはアシュトンに詰め寄る。まず口火を切ったのはレナだった。

「ねえ、アシュトン。本当にこの子たちを祓い落すの？」

レナの言葉にアシュトンは焦ったように顔をきょろきょろと振り向かせ、手をわたわたと動かしながら答える。

「だ、だってそのためにここまで来たんじゃないか、今更…」

俺たちはアシュトンの返答に全員で盛大に溜息を吐く。アシュトンは「なんだよお」などと言っているが本当の気持ちはどうなのだろうか…

俺たちは祓い落としの儀式を始めるために準備を始めた。その間も龍たちはいつもと変わらない様子だった。龍がもし本当に消滅するのであれば俺が無事に祓い落してみせると言ったが龍たちは『構わない、この者を信じる。それが仲間であろう…』といい俺の厚意を断った。

準備が整いセリーヌが儀式開始を宣言する。

「では儀式を始めますわよ、王者の涙も手に入れ紋章の準備も整いましたわ。わたくしも紋章術でサポートいたしますしあとはその紙に記した呪詞を唱えるだけ…」

そこでセリーヌは大きく息を吸い込みアシュトンに確認する。

「本当に聞きますけど、いいんですのね！！！」

セリーヌの言葉にアシュトンは静かに

「うん」

そう答えた。

浄化の儀式が始まった。

「今ここに呪われし我が身を前にして
浄化の儀式を執り行う　我が身に受けし悪しき呪いを
清浄な光の中にさらさん…
浄化の神に従わん　呪われし我が身を
清き聖水で清め改めることを…
」

龍たちが苦しそうな悲鳴を上げる。その声に耐えかねてレナがアシュトンの前に飛び出す。

「本当にいいの！アシュトン、この儀式が終わったらこの子たち死んじゃうんだよっ！この子たち言ってたわ、私たちのことを仲間だって…」

レナの言葉にアシュトンの呪文詠唱が止まる。そしてアシュトンはその場にうずくまってしまった。そして小さな声が聞こえた。

「———僕だってわかってた。しちゃいけないことぐらいわかってた。最初は祓い落すためにみんなに一緒に来てもらったけど、けど……そんなこと途中からどうでもよくなってた。ただ君たちと一緒にいる理由がほしかった。それだけだった。今まで僕たちは一人ぼっちだった、だから君たちといれて本当に楽しかった。嬉しかったんだ…」

そしてそこで言葉が一時とまる。そしてアシュトンから出された言葉は俺たちの期待を裏切らないものだった。

「だから、こんな僕だけどもう少しだけ皆と一緒にいてもいいかな…」

この言葉が聞きたかった。仲間でいたい。この言葉がほしかったんだ。

でも一つだけ正さなければいけない言葉があった。

「もちろん（さ）（よ）（ですわ）、でも一つだけ間違ってるよ、アシュトン。少しだけじゃない。ずっと一緒だ。仲間ってそう言うもんだろ」

（だけど仲間ならこの龍たちも呼びやすい名前はないだろうか、この龍なんて呼び方は嫌だしな…）

「それなら私に考えがあるわ。」

レナが急に声を上げる。どうやら声に出ていたらしい。

「この赤い子は目がギョロってしてるからギョロで、こっちの青い子が目がウルウルしてるからウルルン！どう？」

（（（まんまじゃないかー））））

龍たちのほうを向くとどうやらまんざらでもないらしい。彼らがそれでいいのなら俺たちはそれでかまわないのだが…

俺たちに新しい仲間が増えた。一気に三人も。それも最高の形と信頼で結ばれた大切な仲間が。それだけでもこの場に来た甲斐はあった。
一人ぼっちだった人達も救われた。それだけで充分じゃないか…
ジーネにも救いはあったのだろうか……

生きることに必要なこと…それはお金でもなく寝る場所でもない、友だ
確かに旅にお金は必要かもしれない、寝る場所も必要かもしれない。
しかしそれじゃ悲しみは癒せない、喜びは分かち合えない。
何度も言うようだが友は絶対不可欠なんだ。
そしてこれからどんな困難な状況があってもこの仲間たちとなら無事こえて行けるはずだ。

だってそれが仲間というものなのだから。

第8話：新しい仲間（後書き）

まだまだつたない文章です。ごめんなさい。
いずれは今回登場した名剣の数々について書きたいです。手頃な名剣って有名どころで何でしょうか？自分の中では候補はいくつかあるのですが…

第9話：アシュトンという男（前書き）

お久しぶりです。今回は時間がかかってしまいました。本当はもう少し手直ししたかったのですが訂正は後でもできると考えての投稿になります。

今回はオリジナル中心の展開になっていますので飽きは減少されるかな。

第9話：アシュトンという男

Ｓｉｄｅ　アシュトン

あれはいつのことだったろうか…

今こんなに多くの仲間と一緒にいることが嘘のようだった。僕自身友達を作りたいという願望はもちろんあった。でも、どんなに僕が友達を作りたいと望んでもそれは叶わなかった。

僕といると不幸になる……そう言ってひと時は友達になった人たちも僕のそばを離れて行った。

ここだけ聞けばかなり深刻な状況を想像してしまうだろう。しかし、これはそんな暗い話ではない。簡単にいえば僕と居ると普通に生活している分には支障はないが彼らの機嫌が悪くなるような事態がおこるのだ。

一緒に狩りに行けば魔物に襲われる、山菜を採りに行けば足を滑らせ穴に落ちる、新年に夜明けを見に行く約束をすればもちろん天候は雨……

他にもいろんなことがあったけどこれ以上言いだすとキリがない。本当は有限なことではあるが無限にも感じるほどすべてを覚えていない事象…そんな矛盾回路……

そんなことが続いたためか友達は一人、また一人といなくなっていった。だから僕はそんな寂しさを紛らわすためアンカース家に伝わる紋章剣に没頭していた。朝起きては剣を振り、昼になっては剣を振り、夜は遅くまで剣を振り…

まあもちろん独学で学ぶほど僕は馬鹿ではない。父さんと修行を一緒にしたり一緒に旅に出たりもした。

そんな事をかれこれ数年続けた。そのうち僕の中で自分の剣の腕が磨かれていくことに喜びを感じるようになっていた。それと同時に

己の剣にも自信をつけ始めていた。町近くに出るモンスターには苦もなく勝てるようになっていたし、近くの道場の門下生にも負けることなどなくなっていた。
剣を始めて１０年……僕の剣の腕は師匠である父を超えていた。しかし、剣の腕はあがったものの僕の不幸は変わっていなかった。そんなとき近くの町の鉱山に魔物が出て町の人々を怯えさせているという噂がながれてきた。最初は自分の腕試しと、少しでも不幸が治るような結末を期待しその街へと向かったのだ。自分の運命を変えた街、サルバへと…　　それこそ…

僕の夢はそこで終わった。

暖かい火がパチパチッと音を立てて燃えている。あたたかい空気にあてられ僕は目を覚ました。隣ではレナとセリーヌが静かな寝息を立てて眠っている。

「珍しい夢を見たな、昔の夢を見るなんて…」

ふと自分の後ろに気配を感じすぐに振り向く…そこには紅いマントをはおった男…そう一昨日仲間になったばかりのシロウが双剣を構え佇んでいた。どうやら朝の訓練をしていたらしい。その顔は真剣そのものでこちらにもピリピリと緊張した空気が漂ってくる。
その瞬間、男は動いた。腰を低く落とし、肩を閉じ体の動きに回転をかけ袈裟斬りに、時には斬り上げ…さらにその回転は速くなる。誰か架空の相手を想像し稽古を行っているのだろうか…まるで舞うように戦うとはこのことを言うのだろう。
その動きに洗練された様子はないが無骨なまま鍛え上げられたその動きは僕の心を引き込む。しかし、段々とその動きに隙が生まれてくる。彼の放つ集中力は相手にしている架空の存在の動きを、そしてその姿さえ僕に理解させるほどに実体化させてくる。

やがて架空の相手の剣がシロウをとらえようとする。そこで僕はシロウの負けを確信した。しかし、信じられないことが目の前で起こった。確かに追い込まれたはずのシロウの剣が逆に相手をとらえようとしていた。
僕には何が起こったのかわからなかった。確かに負けたと思った、でも彼は勝っていた。相手はシロウに出来た隙に一撃を加えようとした瞬間に彼が反撃の一撃を放った…

「まさか、わざと隙を…！？」

知らないうちに僕は口走っていた。
僕はその姿に魅入っていた。いったいその集中力はどこから来るのだろうか。彼が纏う空気は僕の持つ空気とは似ても似つかない、実戦の場を幾千、幾万と駆け抜けてきたかのような空気を纏っていた。訓練では発せない気、実戦でしか身につかない気。
たいして僕と歳も違わない彼がなぜこれほどまでの空気を身につけているのか…そしてこれほどの気を持った彼がなぜ今までこの国で、いやこの世界で名すら知られていなかったのか、僕はシロウという男に大きな興味を抱いたのかもしれない。

Ｓｉｄｅアシュトン　ｏｕｔ

俺がいつもの鍛錬を終えるとアシュトンが何事かこちらを見て固まっていた。顔はこちらを向いているのだが目線はどこか遠くにいってしまっているようである。

（アシュトンはいったい何がしたいんだ？あの顔はずっと見ていても面白いんだがそうもいかないだろうし、そろそろこっちの世界に呼び戻すか…）

「アシュトン、起きたのか。素っ頓狂な顔をしてどうしたんだ？」
そう俺が声をかけるとあちらの世界から戻ってきたのかこの男はものすごくまじめな顔でこんなことを言いやがりました。
「シロウに魅入ってた。」
「なっ！？」
俺が一瞬驚きの声を上げるとアシュトンはあわてたように俺の誤解を解こうと
「ちっ違うよ！変な意味じゃなくて。ただシロウの剣技に魅とれてたんだ。才能があるのかな…」
（才能？俺の剣技に魅とれる？）
「俺の剣なんてたいしたことはないぞ。俺は才能なんて皆無に近かったからな。ひたすら鍛錬を続けてこの程度だ。俺からしてみればアシュトンのほうが俺よりはるかに才能がある。」
「そんなことないよ、僕なんかまだまだだ。僕もシロウと同じように双剣を使うけどまだまだシロウには及ばない。」
「それはアシュトンにはまだ経験が足りないからだ。アシュトンは鍛錬はしてきたけど実戦はしてこなかっただろう？その差が出ているだけだぞ。」
俺たちはそのあとも才能がある、ないと議論をしていたが水掛け論になりそうだったのでそこで話は打ち切った。アシュトンは納得のできないような顔をしていたがまあ気にしないでおこう。

話が終わるとしばらく俺たちは焚火にあたっていた。本当なら食事を作っているような時間だが如何せん食料がない。もちろん買い忘れたわけではない。少し前までは持っていたのだ。
それというのも確かにアレンから次の街に着くまでの食料をもらっていたのだが、龍のことのお礼と言ってアシュトンが荷物を持ったのが悪かった。食料を入れた袋に穴が開いていたようでそこから一つ、また一つと食料が落ちて行ったらしい。
袋が軽くなっていけば気付きそうなものだが残念なことに彼は食糧どころの話ではなく肩に乗る龍のことが気になってしょうがなかったらしい。
ギョロもウルルンも教えてくれてもよさそうなものだが彼ら自身も互いの体が陰になって見えず、気付かなかったらしい。

そんなことを考えているとレナとセリーヌが起きてきた。
「おはよう、シロウ」
「おはようございますわ、シロウ」

「ああ、おはよう。よく眠れたか？」
こんな森の中でよく眠れたかと聞く俺も俺だが…
「あまり眠れませんでしたわ。お腹がすいて…」

この場でさりげなくアシュトンに厭味を言うセリーヌもセリーヌである。
（よく言うよな、俺の鍛錬にも気付かずぐっすり寝てたくせに…）

「ごめんよ～。悪気はなかったんだよ～。」
隣を見てみればアシュトンが土下座をしてセリーヌに謝り続けている。
レナもその光景を見て苦笑いを浮かべていた。

そこでレナも口をひらく。

「でも確かに次の町まで食料がないのはどうしましょう？クロスまでは歩くと二日はかかるわよ。」

その言葉を聞いたアシュトンが口を開く。

「じゃあ僕の町に来る？ここから森を出てすぐの砂漠の中にあるんだけど。砂漠の中だけどいっぱい食料はあるし水もある、それに樽も！！」

なにやら『樽』という言葉に一番力が入っていたと思う俺は間違っているのだろうか。

あたりを見回すとレナもセリーヌも同じことを考えたのだろうか、複雑な表情を浮かべていた。

まあそんなことよりも食料が手に入るのは俺としても好ましい状況である。それにきちんとした町なら良い食材や水もある。つまり俺の趣味が久々に披露できるということだ。ただ町であればいいというわけではない。自由に使える台所が必要なのだ。その点アシュトンの故郷ならばアシュトンの家がある。そこならば気兼ねなく料理ができるというものだ。

今は剣の丘に突き刺さっているがかつての戦場のなかでも鍛えつづけた稀代の名剣にも勝ると豪語できる包丁『エミヤの遺産』むしろ万能包丁が使いたくてしょうがなかったのだがそうもいかず頑固な錆が付いてきそうだった包丁を使うことができる。

「よし！アシュトンの町に行くぞ！料理をしに！！！っじゃなかった、食料を買いに。」

つい口走ってしまった。

「シロウ、今本音が…。まあそれはそれとして食料を調達するのには賛成ですわ。このままじゃわたくし、お腹が空き過ぎてお腹と背中がくっ付いてしまいますわ。」

セリーヌも賛成の声をあげてくれた。確かに食料が無いと長距離の移動は難しくなるし、何よりも水の確保は優先だ。別に川の水とかでもいいのはいいんだがそれで体を壊しては元も子もない。ソーサリーグローブの調査が遅れるだけだ。

急がば回れという諺もある。それに封印指定をうけた時と違い、俺には追跡者のようなものは今のところはいない。これからはどうかわからないが…

それならば多少寄り道をしたところで彼らを危険に巻き込むようなことはないだろう。

それにレナの村もセリーヌの村も見た、いや立ち寄った……アシュトンの故郷にも興味がないわけではない。

「じゃあ僕が案内するよ。たぶんここからなら半日以内には着けるはずだ。僕の後をついて来てよ、はぐれると迷っちゃうよ。」

そう言ってアシュトンは歩を進めだした。俺達三人はアシュトンの後について行った。

どれだけ歩いただろうか、おそらく二時間程度だとは思うのだが何やらアシュトンの挙動があやしくなってきていた。

突然その場に止まっては首をかしげ、数歩進んではあっちを見たりこっちをみたり。

俺の勘が正しければおそらくそろそろ…

「うわーん、迷ったよ〜！ここどこー！？確かにもう町に続く道に出るはずなのに〜。」

（やっぱりな）

「どういうことですの！アシュトン、あなたがついて来いというからついて来たというのに！！」

「でも、本当にどうしましょう？迷ってしまったのなら戻った方がいいのかしら？」

セリーヌはアシュトンを睨みつけながら激しい怒声を浴びせ、レナは仲裁をしようとしているのか冷静な会話に戻そうとしている。

「レナ、それは駄目だ。戻ろうとするとまた迷う危険性がある。」

「じゃあどうするの？このままじゃソーサリーグローブの調査にも影響が…」

確かにあまりこんな森の中で長居をするわけにはいかない。

（仕方ない、俺が道を探すか。）

「レナ、セリーヌ、アシュトン、ちょっと待っててくれるか？俺が様子を見てくる。」

俺はそう言うと相手の返答を待たず近くにあった一番高い木の上に駆け上がる。

そして木の頂上に登りきった俺は己の目に最大限の強化をかけ周囲を見渡した。

1キロ先、まだ何も見えない。2キロ、まだ見えない。3キロ……

……それは確かに道だった、何やら木の陰にはなっているが獣道の類ではない。確かに踏み固められ荷馬車の走ったような跡がある道だった。

「アシュトンの言う道かどうかはわからないけど3キロくらい先に

細い道みたいなのがあったぞ。方角はここからみて北西の方角だな。」

俺の異常な視力を知っているレナやセリーヌは表情をほころばせながら、「やっぱりシロウは頼りになるわねー」とかなんとか言いながら喜んでいるが、一昨日仲間になったばかりのアシュトンは信じられないといった表情を浮かべ放心していた。

俺の言った方向に３０分位歩いたところだったろうか…さっき俺が発見した道へと一行はでた。

「あーーー！この道だ、この道だよ。この道をまっすぐ二時間ぐらい歩けば僕の町だ。」

アシュトンは顔を上気させながら飛び跳ね喜んでいる。飛び跳ね喜んでいるアシュトンの横を俺たちは気にせず通り過ぎて歩いて行った。

後からアシュトンが「おいてくなんてヒドイヨ――――」などと言って駆けて来たのは言うまでもなかった。

アシュトンの言うとおり二時間程度歩くと確かに町の入り口と思われる門のようなものの前に出た。

「ここが僕の町さ。ここはこのクロス大陸でも知られていない町で僕たちが歩いてきた道を見つけるのも一苦労な町なんだ。たまに道に迷った人たちが訪れることはあるんだけどここは一応隠れ里みたいなものだから町を出る時口止めしてるんだ。ここのことは他言無用ってね。」

そう言うとアシュトンを先頭に俺たちはその町の中へ入って行った。そこはまるで俺の世界の西部劇に出てくるような町だった。

町自体には活気はなく道路には人が一人として歩いていない。しかしゴーストタウンというほどさびれているようにも見えない。
町の真ん中を通る大通りをまっすぐにしばらく歩くとアシュトンが急に立ち止まった。
「ここが僕の家だよ。母さんも父さんも今はこの町にいないはずだから自由にくつろいでくれていいよ。」
家の前には『樽』が何個も放置…
家の中に入ると外装とは裏腹にレナの家やセリーヌの家を彷彿させるような欧州風の住宅のつくりとなっていた。しかしそこにも『樽』。よーくみるとアシュトンと小さく名前が……その他には暖炉があり、流しがあり、そして部屋の中央には大きなテーブルとソファーがあった。
俺が家の中を見回していると
「じゃあちょっと買出しに行ってくるね。ここには今何も買い置きがないんだ。何かほしいものがあったら言って。一緒に買ってくるよ。」
「わたくし何か甘いものが欲しいですわ。運動の後は甘いものに限りますからね。」
「私も甘いものかな、ケーキとか食べたいわ。」
「俺はアシュトンに着いて行くよ。一人で買出しなんて大変だろうし俺自身ここの食材に興味があるんだ。レナとセリーヌはゆっくりしていていいよ。」
レナは何か気まずそうな顔をしていたがそれも疲れが出たのだろうか、ソファーの上でうつらうつらと居眠りを始めた。
セリーヌは気にもせず部屋の中で見つけた本を読みながらくつろい

でいた。

しばらくして買い出しを終えた俺とアシュトンが家に帰ってきた。
当たり前のことかもしれないが食材は俺が厳選した。アシュトンが
「もう帰ろうよ〜」などと弱音を吐いていたが
そんなことはあってはならない！せっかく料理を作るのならばより
良い食材でより良い料理を！！！
そうでなければ犠牲になった食材に申し訳が立たない。いや、そん
なことよりも俺は久々の買い物を満喫したかっただけなのかもしれ
ないが。

聖杯戦争が始まるまで、つまり俺がまだ強化もまともに使えず誰か
を救う力を持つことを欲していたあのときまではこの買出しという
作業は日課のようになっていた。
しかし、結果的に聖杯戦争で自分の夢を叶えるための術を見つけた
俺は藤ねえや遠坂、桜の止めるのも聞かずに戦場に身を置くことに
なった。
そんな戦場の中では当たり前のことだがこのようなのんびりした時
間を過ごすことはできなかった。
特に封印指定されてからの俺は眠る間も神経を研ぎ澄ませて夜襲に
備えていた。そんな中で心の休まる時間などあろうはずがなかった
のだ。

昔のことを考えながら歩いているとすでにそこはアシュトンの家の
前だった。俺は食材を両手に抱えて家に入る。
レナもすでに起きていてセリーヌと一緒におしゃべりをしていた。

「おかえりなさい、買い出しはアシュトンたちがやってくれたんだ
から料理は私がっ「料理は俺に任せてくれ！！」…」

「でも「いいから！俺に任せてくれ」…はい…」

俺はレナの好意など気にもせず食材を持ち台所へと入って行った。あとで皆に聞くとレナとやり取りをしている時の俺は殺気をはらんだように感じるほどだったらしい。

さて、何を作るか…

みんな最近栄養のバランスが悪いな。女性もいることだし贅沢な感じではあるけどカロリーの少ないものを。それに甘いものだったっけ？よし！！！

俺が料理を作り始めて半時間、テーブルの上には本当に半時間で作ったの？とか聞かれそうなぐらいの料理が並んでいた。

右から順にメインの合挽き肉を使った俺特製のリンゴ風味のソースをかけたミートローフ、鶏肉の揚げおろし煮、サブに鮭と大根のサラダ、デザートにココナッツジュースなどその他にもたくさんの料理がテーブルを賑わした。

驚いたことにこの町で売っている食材は地球のものと酷似していたのだ。おかげで俺のレパートリーの一部を披露できたのだが…

ちなみに包丁『エミヤの遺産』こと万能包丁の切れ味は素晴らしかった、素晴らしすぎた…

まな板ごと真っ二つに切断するほどに…

しかし俺の料理を一口食べた瞬間皆の表情が固まり、それと時を同じくして皆顔色を変えて料理に貪りついたのには驚いた。あのレナまでもが次から次へと料理を口へと運び皆の食べる勢いであっという間にテーブルの上の料理は空になった…

（えっ…俺のは？）

皆に俺の分は残されることなく食べられた…みんな何回も何回も謝ってくれたが別に俺は気にしていなかった。自分の作ったものがそんなに喜んでもらえるならもっと作ってもよかったぐらいだった。ちなみにレナがお詫びにと言って残った食材でチャーハンのようなものを作ってくれた。絶品だった。もちろん俺のレパートリーの一つとして加えられることとなる。もちろんアレンジされることにはなったが。

その日の夜はレナとセリーヌがアシュトンの親の部屋で、アシュトンは自分の部屋で、そして俺はリビングのソファーで毛布をかぶって寝た。

次の日に疲れの残さないように、そして無事に旅を続けられるように。

その夜俺は眠っていて気付かなかった。しかし、手に残る紋様が淡い光を発していた。確かに光を放っていたのだ。そう、月の光に呼応するように淡く淡く…
まるでこれからの俺たちの運命を暗示させるかのように。

第９話：アシュトンという男（後書き）

いかがでしたでしょうか？オリジナル…
街の様子は完全に自分の希望もしくは妄想ｏｒｚ
まあ外伝的なものと思ってもらえれば大丈夫かと思います。料理などは自分のレパートリーのものを入れてしまいました。
とりあえず今年最後の投稿になる確率は高いです。年末年始はさすがに投稿はできないと思いますので今年中にもう一話出ればラッキー、そうでなければ４日以降になると思います。

第１０話：異邦人（前書き）

ものすごく久しぶりの投稿です。今回もオリジナルストーリーのつもりです。
ある主要人物の登場です。

第１０話：異邦人

セイバーの髪は美しかった…それは本当の金でできたような、いやそれ以上に美しいものだった。
まるで太陽のように神々しく、皆を暖かく包んでくれるような太陽…そう思った……彼女が持つに相応しいと、いや、彼女しか持ち得ないのだと。

考えてみればこの世界に来てから金糸の髪を持つ人物に会ったのは、いや違うな、まともに話をした人物の中で金糸の髪の毛を持った人物はクロス王と謁見した時の王の髪だけだった。俺がなぜこうまで金の髪の話を持ち出すかというとちゃんとした理由がある。

アシュトンの村を出てすぐの砂漠の中で一つの遺跡を発見したのだ。遺跡といってもそれほど大きなものではなく全長２０メートル，幅にして７～８メートルといったところの細長い小さなものである。この遺跡にアシュトンの町に来る途中は気付かなかったのにはわけがある。
ひどく簡単な話だ。来た道を通っているわけではないのだ。おまけに激しい砂嵐。つまり…

「ごめんよ～、道に迷った～」

またこれである。
一人龍を両肩に背負い、泣きながら謝罪をし続ける男がいた。しかし今回に限ってはアシュトン一人が悪いわけではない。
ではなぜこれほどまでに彼が泣きながら謝っているかというと

「確かに道が見えてたんだ、それなのにそっちに向かって歩いたら急に道が消えちゃうし。」

まあ砂嵐によって砂が道に被さって見えなくなったんだろうが…こういう理由である。

だから彼一人に責任があるわけではない。ないのだが……ただ彼が最初に「新しい道を見つけたよ～」などと言ってそちらにむかって駆けだしていったから皆追いかけるしかなかった。それが理由…

しかし迷ったおかげで珍しいものも見ることもできた。

砂漠の真ん中をとてつもないスピードで駆け抜ける丸い物体…いや耳が長いし何やら人参のようなものを咥えているところからみてもウサギ？なのかもしれない。しかし大きい、あれなら人の四，五人乗せて軽く走れるのではないだろうか。

「バーニィ、久しぶりに見るわね。ソーサリーグローブが落ちてからめっきり見なくなっていましたのに。」

ウサギのような球体のようなものを指さしながらセリーヌが話し出す。

（バーニィ！？バーニー？バニー？やっぱりウサギなのか？いやしかしあのサイズは、でもあの耳は。それにあんなに丸っこいのが？わからん。まあ地球とは違うのだろうし、生態的にも違う部分があるだろうけど）

それで納得しておくしかない。知らない世界なんだからしょうがない。

俺は走り去るバーニィを見送っていた。しかしやはり横からなら長い耳が風になびいて何とかウサギに見えるが後姿はボールに足が生えたようにしか……う～ん、シュールだ。

まあ変な生き物であることに変わりはないのだが、まだ愛らしいだけマシだといえよう。
この世界に来てからは猿のような怪物やら双頭の龍やら巨大な怪鳥やらばかり見ていたのだから慣れてしまっていたのかもしれない。でもあれらの怪物の類は地球にいるものを単に巨大化させただけのようなものだったから生態的にも納得できる部分はあったのだがバーニィの体では食料調達や水を飲むとき、それに寝るときなどいったいどんな格好でその作業を行っているのだろうか。
（なんか何をしていてもころころ転がって行くイメージしかもてない）

まあウサギのことはいいとしよう。深く考えても無駄だ…
バーニィの過ぎ去った方向に偶然見えた長方形の建物。あのウサギを見つけなければ、アシュトンが道に迷わなければ見つけられなかったであろう一つの過去の文化、この世界の歴史……
それが珍しいものの正体だった。決してバーニィのことではない、本当だぞ。

その遺跡は俺がこの星で見た文明の中でも古いと感じられるものである。俺たちの世界で言うとすれば『小型版モヘンジョダロ』などを想像してくれればいいのかもしれない。
そう、明らかにすでに失われた文明の一つの形がそこには眠っていたのだ。それが偶然にも先ほどからの砂嵐で遺跡という一つの外形を白日のもとにさらしている。
遺跡は今までも何度かその姿を太陽の下に見せていたのかもしれない。しかし、それは人々の目にさらされることはなかった。理由として考えられるのには砂嵐によりその姿を現しても、すぐに砂をかぶり見えなくなってしまうこと。次に嵐の中わざわざ慣れた道以外の…そもそも道ですらない砂漠の真ん中を突っ切ろうとする輩がいなかったことだろう。

幸運なことだったのかもしれない。嵐の中偶然見つけた何百何千の時を超えた歴史そのもの。それを発見することは人として最高の喜びだったろうから。

「行ってみよう。」

俺は自分でも気がつかないうちに口走っていた。俺の言葉に皆は賛同し、その遺跡の方へと足を運ばせる。

遺跡の入り口付近に着くとそこには高さ3mほどの石柱が二本、左右に一本ずつ建っていた。右側の石柱には羽のような模様が、左側の石柱には輪っかのような模様が刻まれている。

中に入るとそこには教会のように突き抜けた講堂のような空間が広がっていた。

その最奥には白い服に身を包んだ一人の男が佇んでいる。

男は祭壇のような場所を熱心に覗き込み左手に持った手帳のようなものに次々と何か書き込んでいるようだった。

おそらくあの様子では俺たちの存在に気が付いていないだろう。その集中力は俺が矢を弓に番えている時と酷似している。それほどまでの集中力だ。

「すみません、あなたは…」

俺は祭壇に歩み寄り、殺気などは込めないが慎重に、神経を研ぎ澄ませたまま男に声をかけた。

「ッつ！？」

男は俺の声に驚きの声をあげる。

「大丈夫ですよ。別にあなたをどうこうするつもりは俺たちにはあ

りません。ただ俺たちは道に迷いこの場所を見つけた…それだけです。」

最初は俺たちに警戒の色を強めていた男だったが俺たちに戦う意思がないのを悟るとゆっくりと口を開いた。

「いやあ、びっくりした。まさかこんな所に僕以外の人が来るとは思わなかったものでね。つい警戒してしまったよ。」

そしてこちらを振り返った男の顔を見て俺は息をのんだ。長い金糸の髪に不精髭、そこまでならば十分考えられる顔立ちだったがその男の額には第三の目がこちらを見つめていたのだ。

俺が額の目を凝視しているのに気づいた彼は

「ああ、この目のことかい？僕は生まれながらに目が三つなんだ。気にしないでいてくれると助かる。」

人に言えないこともあるだろう。そこに踏み込むのは不粋というものか…

「まあ言えないのなら別にいいですよ。ところであなたはいったい？」

「おっと、自己紹介はまだだったね。僕はエルネスト・レヴィード。親しい人たちはエルって呼んでる。君たちは？」

彼の言葉に俺たちは自分たちが名乗っていなかったのに気づいた。

「俺はエミヤシロウ。シロウでいいですよ。」

「私はレナ・ランフォードです。レナって呼んでください。」

「わたくしはセリーヌ・ジュレスですわ。」

「僕はアシュ「「フギャ（ギャフ）」」だよって邪魔しないでよ～。僕はアシュトン・アンカースっていいます。」

俺が簡単に自分の名前を明かしたのは彼から流れ出る雰囲気が決して後ろめたさや邪悪なものが一切なかったからであろう。

「そうか、それじゃあ士郎くん、君たちは一体どうしてこんな場所に来たんだい？」

「先ほど言ったとおりです。砂漠で道に迷い遠くにこの遺跡が見えたもので立ち寄っただけです。それよりどうして俺に聞くんですか？」

俺は彼に会ったときから一つ何か違和感を感じていたのだ。それはエルネストと名乗った男性が俺の名前の発音を間違えずに発したこと。日本人の名前は得てして外国人には発音しにくいものである。そして他の誰よりも俺に対してのみ警戒の念を緩めなかったからだった。

「それはね、君がこのメンバーの中でおそらくリーダーに当たる実力を最も有していると感じたからだよ。ところで士郎くん、ちょっと他のみんなとは別で話したいことがあるんだけどね。」

その言葉にはなにやら妙に説得力があった。何かを確認したいというような…そしてその話とは俺の考えていることに間違いないのだろうが…

彼の服装…他人とは違う身なり、皆にはない第三の目、そして明らかにこの星で接してきたどの人物とも異なる発音で述べられた俺の名前…

俺は皆に断りを入れ遺跡の外にエルネストという男と共に出た。

「君はこの世界の人間じゃないね。」

彼は外に出るなりいきなり俺の核心を突く言葉を発する。
「君の名前はこの星のものじゃない。おそらくは地球の日本という国のものだろう。」

（やっぱりか…彼も裏の関係者、もしくは俺のように世界を渡った異世界人…）
しかしここで改めて彼の発した言葉を考えてみる。今彼は何といったか…
確かに『この星』といった。それは俺にもう一つの考えをよぎらせた。
『宇宙人』という言葉を。

俺はそれを確認するために一つカマをかけてみることにした。
「そうですよ、あなたもこの星に何か用が？俺は異変の調査という名目でこちらにやって来たのですが。」

「ほう、つまり君は銀河連邦の人かい？どおりで隙がないはずだ、軍人とはね。」

（ビンゴ、やっぱり俺のような異世界から来たのではない。彼はこの星の人間ではない、異世界人だ。）

俺が一つの答えに行き当たったところでさらにエルネストが口を開く。
「でも困ったな、君が銀河連邦の軍人なら僕はもしかして強制送還かい？未開惑星保護条約に触れることはまだしていないつもりではあるのだが。」

「ああ、大丈夫ですよ。俺は日本人ではありますが銀河連邦の人間

ではありません。先ほどまでの事はちょっとカマをかけてみただけです。俺も少し気になることがありまして。」

「そうか」と言ってエルネストはホッと息をつく。しかしすぐに息を整え

「では君はいったい…その名前ならば地球人であることは間違いないだろう、しかし軍人でないのならあの威圧感は、それに地球の一般人は特殊な免許がなければ太陽系外に旅行に出てはいけないはずだろう？」

男の頭の上に次々とクエスチョンマークが点いたり消えたりしているようにみえる。

俺は男の問いに答える。

「簡単なことですよ。地球と言っても俺のいた地球とあなたが言っている地球はおそらく異なっています。俺の知る地球には銀河連邦なんてありません。それに俺のいた世界では皆まだ太陽系の中から抜け出すような技術を持っていないんですよ。」

「ん？それはどういうことだ？俺の知る地球の軍はすでに銀河系の大半の星を統括している。それに地球人が宇宙に出てからずいぶんと時間は過ぎた。もう７００年以上前にだ。」

まあ混乱するのは当たり前のことだ。数多くの神秘に触れてきた俺ですらかつて体験したことのないようなことが次々と起こり、頭の回転が追い付いていないのだ。

「先ほども言ったようにあなたが知る地球と俺の知る地球はおそらく別物なんです。年代的に異なっているのかもしれません。現に俺は宇宙船に乗ってこの星に来たわけではないのですから。」

俺の言葉を聞いたエルネストの表情が驚愕の色に染まる。地球人であるはずの俺が異なった星に宇宙船を用いずやってきたことも驚きの一つであろうが『年代的に異なる』という言葉が最も彼の驚きを誘ったに違いない。
大きく見開かれた目、視点がどこを向いているのかさえわからないほどの驚愕に染まった顔のまま彼はゆっくりと口を開く。

「…では、いったいどうやってこの星に？いや、この時代に？」

「申し訳ありませんがそれを答えることはできません。仲間には俺が異世界人であるということは伝えてはいますがそれ以上のことは……」

俺の表情を見て彼は何かを悟ったのだろうか
「どうしても言えないことなんだね。なら別にいいさ。そのかわりに僕のことを君の仲間に伝えるのもやめてほしい。」

「ええ、もちろんですよ。お互い知られてはならないことも多いでしょう。ただ一つだけ聞かせてもらいたいのですが…あなたは、エルネストさんはあの遺跡でいったい何を？」

エルネストは若干視線を下の方に向け照れくさそうな表情を浮かべてゆっくりと口を開いた。
「僕の……仕事なんだ。僕はね、さまざまな星の異なる文化、そして歴史の産物を見ること、調べること、それが僕の仕事だ。いや仕事じゃないかな。趣味なのかもしれない。一人の研究者…考古学者としてのね。」

俺に自分のことを語っている時の彼の表情はまるで子供のように無

垢で純粋な笑顔そのものだった。自分の仕事、趣味に誇りを持って挑んでいる大きな子供…そんな印象だった。

「そうですか、ならいいんです。もし俺たちに何かをするつもりなら容赦はしませんでしたが。遺跡探索が個人の趣味の一つなら俺にどうこう言う権利はありません。考古学、頑張ってください。」

「ああ、ありがとう。ところで君は過去から来たと言ったね。少しだけでいいから君の世界のことを聞かせてくれないか。」

俺もこの世界のことに興味はあった。考古学者でる彼にとっても同じ気持ちだったに違いない。

そうして俺とエルネストさんは自分の故郷について短い時間ではあったが語り合った。もちろん聖杯戦争や俺の魔術のこと、そういった裏のことは一切話すことなく…

さらに洞窟で手に入れた古文書についても聞いてはみたのだが、まだ調査の初期段階のため分からないとのことだった。

「いやあ、楽しかったよ。君の世界はいい世界だったんだね。古文書についても少し調べてみようかな」

話が終わると彼の表情は先ほど自分のことを語っていたとき同様明るく晴々しいものだった。

そろそろレナたちの所に戻った方がいいか…と考えていた時だった。遺跡の中から三人が笑いながら出てくるのが見えた。

そしてレナが俺を見るなり

「シロウー、面白いものがあったわよ。」

そう言った彼女の手には天使の形を模した一つの彫像が握られてい

る。その彫像からは魔力的なものは感じるものの邪悪な感じは一切感じなかった。

エルネストさんを含めた俺達五人の距離がほぼゼロになろうとした時

『ギャゥーーーーーーー！！！！！！』

レナの背後に突然巨大なトカゲのような魔物が飛び出す。

俺自身エルネストさんと話をしていて気を抜いていたとはいえ、全く気配がないままこの距離にまで近づいていたことには驚愕した。

魔物の攻撃は俺が投影、反撃しようとするよりも一瞬、ほんの一瞬だけ速かった。トカゲは飛び出してから攻撃をしたのではない。まるで地中から出てくるときには既に攻撃目標に照準を合わせていたかのように魔物の爪がレナに向かって振り下ろされる。

カッ！！！！！！！

その時レナの持っていた彫像から銀色の光が発せられた。その光が球体のように俺たちを包み込む光の壁となる。その壁は魔物の振り下ろされた爪を受け止める。さらに発せられた光により魔物は一瞬俺たちの行方を見失った。

俺はその魔物に斬りかかろうとする。しかし俺の横をなにか細長いものが一瞬のうちに通り過ぎたかと思うと、その細長いものは魔物の自由を完全に拘束する。

一本の鞭だった。

その瞬間魔物の体がビクリっと震え、魔物は白目をむき、泡を吹いてその場に崩れ落ちた。

俺がその攻撃のあった先を見るとそこにはエルネストさんが鞭を握りしめ佇んでいた。おそらくあの鞭はエルネストさんの言っていた高度な科学の力で完全に制御され、拘束したと同時に高圧の電流を魔物の体に流し込んだのだろう。

しかし、いくら科学技術が発達していたからといって完全にオートに出来るわけではないだろう。彼の実力も伴った結果と考えて間違いない。

そうでないと未開の地へと足を踏み入れ調査することを目的とした考古学者、それも宇宙という世界をまたにかけた学者が何の技量もなく無事生き残ることは難しい。

俺の彼に対する見解はそんなところだった。

「大丈夫だったかい？怪我は？」

エルネストさんは優しく声をかけてきた。

「ありがとうございます、エルネストさん。おかげで助かりました。」

最も危険な立場にいたレナがお礼のことばを述べた。

「いや、僕も反応が遅れてしまってね。その彫像が光らなければ魔物の攻撃には間に合わなかっただろう。でも壊れてしまったね。」

レナの手におさまっていたはずの彫像は天使の頭からひびがはいり先ほどまでの美しい原型は留めていなかった。内包されていた魔力も霧散してしまいただの石の彫像と化していた。

「いいんです、この天使さまのおかげで助かったようなものですか

ら。この彫像には加護の力が宿っていたんですね。」

「そうかもしれないね。君が危なかったからその天使さまが助けてくれたのかもしれないね。」

エルネストさんは優しい笑顔をしていた。その表情は年のせいもあるだろうが父親が娘を見つめるものに似ていた。父親か……

「さて、僕はそろそろ行くとするよ。もうこの遺跡は見てしまったからね。次の遺跡を探して旅をすることにするよ。」

彼の言葉にレナが小さく反応して

「あの…エルネストさん、もしよろしければ一緒に旅をしませんか？私たちは今この世界の異変の調査をしているんです。」

「すまないね、僕はまだこの大陸ですることがあるんだ。君たちとはここでお別れということになる。」

「そうですか…」

レナは残念そうにうつむく

「まあ、僕ももう少ししたらこの大陸から旅立つつもりだしもしかしたらどこかで会うかもしれない。その時は君たちの仲間に加えてくれるかい？」

その言葉にレナの表情がパアっと明るくなる。

「はい、もちろんです。エルネストさんが何をしなければいけないのかはわかりませんがお体に気を付けてください。」

「ありがとう、それじゃあ僕はこの辺で失礼するよ。」

そう言うと彼は俺たちが進もうと考えている方向とは逆の方へと歩いて行った。

「さあ行こう！この砂漠を抜けて次の町へ。」

俺たちは歩を進める。次の町にむかって…

第１０話：異邦人（後書き）

エルネストさんでした。
彼のイメージは自分としてはなぜかキリツグ。
皆さんはいかがですか？

第１１話：港町（前書き）

今回は早めの投稿となりました。これからは少し時間がかかるかもしれませんが気長によろしくお願いします。
ゆっくりしていってね

第11話：港町

第十一話　「港町」

砂漠の遺跡を出てから五日、今回は迷うことなく海の見える街道を俺たちは歩いている。
途中、再びクロスにより、食料調達と旅の装備を整えラクール大陸に渡る為に舟の出ている港町であるハーリーを目指していたのだ。
俺自身こうしてゆっくりと海を見ながら旅をするのは久しぶりのことだった。この世界に来るまでは学生をしていたときを除いてほとんどを戦場の中で過ごし、時には封印指定狩りの魔術師と相対することもあった。

それで失う命、傷つく少年少女もみてきた。手持ちの薬もなく助ける事のできる命を目の前にしながらも救えなかったことも多い。

それと比べると今の旅路は平和であるとともに俺にとっては充実なものであった。
しかし、地球とこのエクスペルという星でどうしても理解できない点が士郎にはあった。
「なんでさ、どうしてブルーベリーを食べるだけでそんなに体力が回復するのさ。」

そうなのだ、確かに果実には体力回復効果もあるし、精神的にも癒されるという効果もある。しかしこの世界ではそれが顕著になっている。もし元の世界でこれほどの効果が得られるのであれば助かった命もわずかながらもいたかもしれない。

俺が自分を顧みず他人の命を救うということを行っていた時期を思い出していると、

「ええ？これは普通のことですわよ。まあ自分で調合して回復力の強いものを作ることもできますけど、旅などで緊急の場合のためには必需品ですわ」

セリーヌは俺の考えをばっさりと切り捨てた。

（もう、この世界にも慣れて来たと思ってたんだけどな。やっぱり完全になじむのは難しいんだろうか…）

「そうだな、確かにこれだけの回復が見込めるのであれば旅人の必需品だ。俺も有効に活用させてもらうとしよう」

俺は両手をひろげやれやれといったようなポーズをとりながらおどけて喋ってみた。そこで必需品云々という話は終わったのだがそこからが問題だった。

周りを見てみるが1人、2人……

「はあーーーーっ……アシュトン…」

おなじみのようにこの旅のメンバーの中から一人消えているのだ。存在感が非常に薄いというのもあるのだが彼の場合『樽』を見るとたびたび消えてしまう悪癖がある。それはもう、ところ構わず……

「アシュトン、また樽見つけちゃったのね。シロウ、どうするの。このまま捜していると今日中にハーリーに着けなくなっちゃうわよ」

「いいですわ、もうほうっておいて先にハーリーにむかいましょう。アシュトンも子供じゃないんだから一人でもたどり着くでしょう」

（いや、子供じゃないんだったら勝手に消えないでほしい…）

そう思いながらも俺は視力を強化し、周囲を見渡す。するとアシュトンはやはり先ほど休んだ休憩所の樽をじっと眺めていた。てことはどっかにふらふらと行ってしまったわけじゃなくておいてきたことに俺たちが気付かなかったと……

などと考えている間にレナもセリーヌも先に進んでいる。

（しょうがないな）

「投影開始（トレースオン）」

俺の手には一本の真っ直ぐな純白の矢……

ではなく、飛んでいる途中に折れない程度に強化された一本のチョークが備えられた黒塗りの弓が握られていた。

狙いはもちろんメンバーの規律を乱す馬鹿の『ヒタイ』

そして、俺は矢を放った。矢、もといチョークは一切の狂いもなくアシュトンのヒタイにむかって風を裂きながら飛んで行く。中る…自分の中で矢が確実に獲物に中ることをイメージできていたため結果を見ずして俺は先に行った二人を追いかけた。

その後、顔色の変ったアシュトンが息を切らせながら走ってきたのは言うまでもない。ヒタイに丸くて白い痕を残したまま…

まあ血相を変えて走ってくるのも無理はない、俺は矢にある手紙を括りつけて飛ばしていたのだ。その内容は

『ツギハナマリガイイカ』

といったものだったのはいうまでもないことだろう。

そんなこんなの出来事はあったが、俺達四人は無事、次の目的地であるハーリーへと着いたのだった。

港に行ってみるとその日の船便はすでに終了しているとのことだったのでその日はハーリーの宿屋に泊ることにした。

しかし、夜まではしばらく時間があるということでハーリーの町を散策するということになった。アシュトンは酒場へ酒を呑みに…違った、樽を見に。

レナとセリーヌは食事と湯浴みをしに。ということで俺は一人になってしまった。別にアシュトンと酒場に行ってもよかったのだが同類に見られたくはない。それに女性陣について回るのも俺としては遠慮したかった。

ということなので俺は町をぶらぶらしていたのだが、ふと住宅街のそばを通った時、綺麗なピンク色のリボンが俺の目の前に落ちてきた。

「なんだ？リボン…」

俺はリボンの飛んできた方向に目を向けた。すると一人の少女が窓際にこちらを見つめていた。

「これは君のかい？」

そう声をかけると少女はコクンとうなずいた。

俺はその家にいた少女の母親と思しき人物に理由を述べてから二階にいる少女のもとへリボンを届けようと少女の部屋にむかった。

二階には階段を上って左手にエラノールと名前の書かれた部屋があった。俺はその部屋のドアを開ける。

そこにはベッドに腰をかけた少女が一人で空を眺めていた。入ってきた俺に気付いた少女は首を傾けながら

「ありがとう」

と小さな声で呟いた。

俺は返事をして部屋を出ようとした。すると

「ねえ、お兄ちゃんは外の世界を知ってる？」

少女の言葉によって部屋を出るのを阻まれた。俺にはどういうことか分からなかったが、もしかしたら彼女は外に出る機会がなかったのかもしれない。ただそう感じた。

「うーん、どうだろう。知ってはいるけど全部は知らないかなあ」

「うふふ、ヘンなの。お兄ちゃん…私ね、外の世界を知らないの。知っているのはこの窓から見える景色とこの部屋の中だけ」

それは彼女が見せてくれた最初の笑顔だったのだがそれと同時に沈んだ顔になってしまう。少女は自分がエラノールだといった。そして自分は病気を患っていて家の外に出たことがないということを見ず知らずの自分に教えてくれた。

話を聞いてみると、この家に家族以外で自分に会いにきてくれたの

は俺が初めてとのことだった。
俺は自分の知りうる世界について知っていることを少女に話してあげる。すると、少女は俺が物語風に旅の様子、世界の様子を話すと目を大きく見開いて興味心身といった表情で話しに耳をかたむけていた。

「ねえねえ、それでそのおっきな鳥はどうしたの？」
「ねえねえ、じゃあその龍たちは…」
「ねえねえ、遺跡って…」

エラノールは笑顔を浮かべながら俺にどんどんと質問を投げかけてくる。それに対し子供でも分かりやすいように俺は芝居がかったしゃべりで丁寧に説明していった。
この時間は俺にとっても充実していた。エラノールの笑顔から察するに彼女も退屈することなく時間を過ごしていたのだろう。

そして、二時間も話したあたりだろうか。エラノールが少し落ち着きうつむきながら信じられない言葉をはなった。

「お兄ちゃん、私死ぬかもしれないんだって。お医者様が言ってた」

その言葉に一瞬自分の息が止まったのを感じる。
「長くは生きられないんだって。最初はこんなに退屈で寂しい世界なら死んでもいいやって思ってた。でも……死にたくないよ。お兄ちゃんの話を聞いてたら元気になってもっといろんな場所に行ってみたいよお……」

それは誰にも打ち明けることのできなかった少女の本当の思いだったのかもしれない。家族にも打ち明けられなかった少女のたった一つの願いであり、弱音だった。

「大丈夫だよ。きっとエラノールはよくなるよ。だってこんなに生きたいってエラノールが思ってるじゃないか。それを叶えない神様なんているもんか。」

「ほんと？お兄ちゃん、私生きられる？私外に出られる？」

「ああ、もちろんだ。お医者様がなんて言おうとエラノールが生きたいと願うなら神様は願いを叶えてくれるよ。きっと……」

そう俺がいうとエラノールの表情がパアっと明るくなった。

「私、生きたい。そう神様にお願いする。それできっと外の世界を見る。だからシロウお兄ちゃん、その時は外の世界を案内して」

初めて彼女はお兄ちゃんという言葉の前に俺の名前を呼んだ。つまり彼女にとってただの通りすがりの他人という枠から外れたということなのだろう。

「ああ、もちろん。だから絶対に諦めずに生きたいと願い続けるんだよ。」

「うん、わかった」

「じゃあエラノールには元気になる魔法を見せてあげよう」

俺が発した言葉に首を傾げながらエラノールは疑問の声をあげた。

「魔法？」

「そう、魔法だ。俺はね、魔法使いなんだ。」

そう言って、俺は己の暗示の言ノ葉を呟いた。
「投影開始（トレースオン）」
俺の手の中に小さな光が集まりそして一つの剣を模した小さな髪留めが具現化された。
「わあぁぁぁ、きれい。シロウお兄ちゃんすごい」
「これはねエラノールを病気から守ってくれるはずだよ。そういうふうな魔法をかけておいたからね」
そう言ってエラノールに髪留めを渡す。もちろん俺に『魔法』などつかえるはずもない。しかし、あのペンダントには加護の力がある。病気に効果があるかどうかはわからないが体力の回復にでもなればという思いと外に出た時に魔物に襲われないようにと願いをかけた。
「えっと、くれるの？」
「ああ、そのために作ったんだ。もらってくれるかい？」
そういうとエラノールは顔を真っ赤にして笑顔になりうつむきながら首を縦にふった。
俺は髪留めをエラノールの金色の髪に結わえた。その間中エラノールはうつむいたままだったのだが苦しそうということではなく横顔には笑顔が浮かんでいた。
だいぶ長い間話をしていたのだが外を見ると真っ暗になっていることに気付いた。俺はレナ達に心配させるわけにはいかないと思い、

そろそろ帰ろうと考えてエラノールにそのことを伝える。
それを聞くとエラノールは非常に残念そうな顔に変わり黙りこくってしまった。
俺が明日の朝位置の船でラクールに渡ることを告げると
「じゃあお兄ちゃんの用事が終わってまたここに戻ってくることがあったらきっとまた会いに来てね。私待ってるから」
「絶対に会いにくるよ。だからエラノールも頑張るんだぞ」
エラノールは笑顔で元気に頷くと「またね」と手をふった。俺がエラノールの家を後にした後もずっと窓から手を振り続けていた。

宿屋に戻ると三人はすでに戻っており、何をしていたのかとほとんど尋問に近い形ではかされた。
しかし、昼間に俺がしていたことを伝えると怒った表情もやわらぎ
「やっぱり、シロウね」
「やっぱり、シロウですわね」
「やっぱり、シロウだね」
三者三様にそう言われた。
（やっぱりってどういうことだよ）
といってるうちに、夜が更けてきたのでそれぞれが己の寝床へと潜り込む
（エラノールも同じ夜空を見ているんだろうな）

（シロウお兄ちゃんと同じ空の下にいるんだ、大丈夫…がんばろう）

二人して同じようなことを考えていたのは誰も知ることはない。それは、本人たちであっても……

次の朝、俺たちは港へと向かった。

船が出るのはちょうどあと一時間くらいしてからだろうか。久しぶりの海岸沿いでの朝だったので潮のかおりが漂ってくる。

広い海を見ながら昨日の少女のことを思い出していた。

（エラノールが元気になった時に外を自由に歩き回れるようにこの異変を止めないとな。エラノールだけじゃない…この世界の人々の平和のためにも…）

すると船の帆が張られた。もう出発の時間になったらしい。

船に乗り、俺はハーリーの港を眺めていた。

するとどうだろうか…一人の少女が車いすに乗り、母親におされ港に来ているではないか。

そしてこちらに、いや俺にむかって手を振り続けていた。それはエラノールだった。

病気で無理はできない体であるはずの少女が俺に「いってらっしゃい」と伝えるためだけに無理をしてきたのだ。

レナがそばによってきて

「シロウ、あの子…」

「ああ昨日言った子だよ。無理をしてまで見送りに来てくれるなんて」

俺はそう言いながらも大きく手をふった。必ず無事帰り、きっとあの少女に会いに行くと誓いながら。

「エラノール、さあ帰るわよ」

「うん、お母さん」

そう言って少女と母親は家への道をすすんだ。

「ねえ、お母さん。わたしね、きっとよくなる。それでねシロウお兄ちゃんみたいに外の世界を見て回るの」

ぎゅっと少女は手の中に士郎からの贈り物である髪留めを握りしめた。

一人の少女には一つの目標ができた

生きるということの

第１１話：港町（後書き）

いかがでしたでしょうか？アシュトンの役を完全に奪った士郎…
じゃなかった、エラノールとの個人面談
士郎がかかわったことでいろいろ原作とは異なってきていますがそれのほうが書き手としても書きやすくて（笑）

第１２話：ラクール（前書き）

久しぶりの投稿となります。いよいよラクールまできました。といってもまだまだ先は長いです。じっくり推敲しながら書いていきたいと思います。

第12話：ラクール

船が出て半日、俺たちの目の前には大きな大陸が広がっていた。クロス大陸のちょうど東に位置する大陸…名をラクール大陸というらしい。

「なかなか壮大なものだな、海から大陸を丸々正面に見据えるというのは…」

「ホント、私はシロウたちと旅をするまではアーリアが私のすべてだったからとっても新鮮」

ウキウキという言葉が似合う…レナの表情はまるで子供のような笑顔を浮かべていた…いや、まだ年齢的には子供という分類になるのだろうが、本当に無垢な笑顔を浮かべている。

「さあ、ラクールの港町ヒルトン到着ですわよ。」

セリーヌの声と同時に俺たちの目の前に広がってきたのはそれほど大きくはないが非常に美しく、賑わっている港町だった。船の上からでも露店が賑わっているのがわかり、美味しそうな香りが風にのって俺たち船の乗員の鼻をくすぶる。

そう言っている間に船は港に近付き、錨をおろす。そして、船から港へ向かって木の板が渡り、道が出来上がった。

俺たちは港へと伸ばされた板を渡りヒルトンの町へと降り立った。すでに皆の目はあちらこちらの露店へと向いているようではあるが、

一先ず到着しほっとしたのと同時にに半日にもわたる船旅の疲れもどっと出てきた。

「みなさん、とりあえず少し休憩してからラクール城に向かうとしましょう」

「ラクール城？」

「ええ、そうですわ。仮にもクロス王からも許可を頂いて調査を行っている身…ラクール王にもこの大陸での活動許可を頂きませんと」

なるほど、セリーヌの言うことにも一理ある。一理あるどころかそれが正当な判断だろう。そういえば南の方に城壁のようなものが見えたな、あれがそうだろうか…

「ん？ところでアシュトンはどこだ？」

「アシュトンなら先ほどセリーヌさんが休憩といッた瞬間露店のほうに走って行っちゃったわよ」

彼には集団行動というものはないのか…知らないうちにメンバーが一人欠けていたりなんてことがないことを祈ろう……

「はあ、先がおもいやられる……」

それから約2時間、露店で飲み物などを飲んで休憩を終えた俺たちはヒルトンの町を出た。

先ほど遠目で見えた城壁の方に向かって一歩一歩、歩を進める。ま

あ、日が暮れるまでには着くだろう。
それは見えた城壁の大きさからなんとはなしに推測しただけのものだったのだが、結果はというと……俺の予想は当たった。ちょうど日が暮れる直前に城門に到着した俺たちは、憲兵にクロス王からの紹介状を見せ、ラクールの城下町へと入ることができた。

着いた時刻が時刻なものでラクール王への謁見は明日へとまわし、宿へと向かう。宿は今までの宿とは少し異なりむしろホテルという方が正しいほど豪勢で大きな作りの建物だった。

宿に着くと俺たちは2部屋を借り、俺とアシュトン、レナとセリーヌの部屋へとわかれた。

荷物をそれぞれの部屋に置いた後、皆で宿のロビーにあたる場所で待ち合わせをし、食事へと出かける。
宿を出ると日はすっかり暮れて酒場の方が明るく輝き賑わっているのがわかった。
酒場からは賑やかな笑い声も聞こえる。

酒場ラクールオブラクール
以前セリーヌから聞いたのだがラクールという名前が与えられるのは、年に一度の武具大会とやらで最も優秀な成績を収めた店舗に与えられる称号のようなものらしい。
なのに何故酒場にその称号が……
まさか酒瓶片手にお盆を盾になんて恰好で大会に出場を果たし、更には武器ともいえないようなもので優勝した猛者がいたのだろうか、ちょっと見てみたい

それはさておき酒場へと入る。酒場の中は笑い声が溢れなんとも良

い雰囲気が広がっている。
その中で酒場の一角に物静かに腰をかけ、酒を飲んでいる長身の男がいた。

「ディアス！」

レナが真っ先に気付き声を上げる。その声が聞こえたのだろう、ディアスがこちらを向く。

「レナ、それにシロウか……後ろの女は確かマーズの…」

「セリーヌですわ」

アシュトンのことはどうでもいいのだろうか。まあ会ったことはないわけで…

……いない

どうでもいいというか端から目に入らない位置にいたというか、むしろ樽に纏わりついているというか…

他人のふりをしよう

「ディアスはどうしてこの町へ？」

レナが不思議そうにディアスに疑問を投げかける。

「ん？お前たちは武具大会が目的ではないのか。俺はてっきりシロウが出場するために来たのだと…」

「いや、俺たちはラクール王に挨拶がてら寄っただけだが、武具大会とはもうすぐ行われるのか？」

「ああ、明後日の正午ちょうどに始まる。受付は明日の夕刻までだったはずだ」

ちょっと興味がある。ラクールオブラクールのこともそうだが強い相手が出るのであれば戦ってみたい、ついでに武器の多くも見ることができるだろう。

しかし何よりもディアスの本気が見てみたい。マーズの時はどうみても本気を出してはいなかった。

いや、彼を本気にすることができる奴がいったいどれだけいるのだろうか。俺もルールなしであれば勝つことはなくとも負けることはないと言い切れるが死合ではなく試合だとすればどうなるかは想像もできない。

死合……それは弓もあり、魔術もありでという話だ。少なくとも剣技だけでは俺の遥か上にいるだろう。

彼ならばひょっとすればサーヴァントともやり合うだけの剣の技量に至っているのではないだろうか…

別に俺はバトルマニアというわけではないが、自分の技量がどの程度のものか知りたいという欲求がないわけでもない。

「俺もでてみるか…」

ポツリとこぼした一言に皆がくいついてきた。

「「シロウが！？」」

タルゥゥ〜〜」

一人は無視して

「そうか、貴様も出るのであれば少しは面白い大会になるかも知れんな」

ディアスの言葉は気になるが俺は武具大会というものがどういうものか知らない。おそらくは武道大会のようなものなのだろうが、『武具』つまり武器中心の大会ということだ。

俺が困ったような顔をしていると

「武具大会、この町の武具屋が己の鍛えた武器を自分の信頼する出場者に預け、その武器で大会に出場する。それが武具大会だ」

やけに親切な説明をありがとう、酒場のおじさん

おじさん、あなたヤケニ筋骨隆々デスネ

そういえば確かにこの町に入って目に入ったのは非常に多くの武具屋だった。普通ならそういった店ばかりではなく他の店が目に入ってもおかしくない。しかし、通りのもっとも立地の良い場所は武具屋が占めていた記憶がある。

「それじゃあ、明日はラクール王との謁見がすんだら武具屋探しでもするか…」

「謁見？それは今の時期は無理だろう。ラクール王はこの武具大会の前は誰とも謁見はしていない。王と会うことができるのは武具大会が終わった次の日、もしくは優勝して王に武具大会優勝の称号を

授かる時になるだろうな」

「ん～、それなら仕様がないか…なら、今日は宿に戻って明日は一日武具屋探しでもするか」

「そうね、謁見が終わらないと調査もできないことだし、ちょうどいいかも」

そう言って俺たちは元の宿屋へ、ディアスは城門のほうへと向かって行った。

ＩＮ　ラクールオブラクール　調理場

「はあ、この星に来てもう1年と半年になるのか。長いようで短い期間だったな。」

厨房内で溜息をつく声が一人分……その声はどこか疲れたようにも感じるが、暗いというような感じはしない。

「にしても魔術が使えなかったことには驚いた。最近に至っては、まるで誰かに力の大半を奪われるような感じだ。まあ、戦闘技術は元のままで助かったというところだろうか」

精神は体に引きずられるとはよく言ったものだ……言葉づかいがあの戦いのときのものに近づいてきている。もっと嫌味じみた言葉遣いだったのが今ではその面影をわずかにしか感じることができなくなってきていた。

「オレも皆と共に魔物と戦いたい…だが今のこの体では…」

確かに戦闘技術はそのままだ。しかし、体力が格段に落ちているため長時間の戦闘が叶わない。さらに魔術が使えない。つまりは強化もできないということ。以前、魔物との戦闘中に勝手に飛び出しあまりの敵の多さ、しつこさに途中で体力が尽き武器は破壊されて仲間を危険な目にあわせてしまったことがある。

それ以来仲間は俺を前線に立たしてくれない。戦列を乱すものを前には出せないとのことだ。オレに許されたことは城壁の上からの援護…ただそれだけだった。

それから俺は少しでも頑丈な武器を使用して魔物と戦闘をしてもらおうと鍛冶なんてことをしている。最初は見ず知らずの俺の剣なんて誰も受け取らなかったのだがちょうど一年前を境に俺への評価が格段に改められることとなった。

去年は面白かった。武具屋が予約いっぱいになって大会用武具を手に入れ損ねた奴に自分の剣を譲ったところそいつはなんと優勝……おかげで優秀な武具屋に与えられるはずの称号が酒屋に与えられてしまった。

以前の俺には殺したい人物がいた。だがあの戦いに敗れ俺は考えを改めた。オレは幸せになっただろうか。あいつは約束を守ってくれただろうか……

「……遠坂」

Out　ラクールオブラクール　調理場

正直に今俺の身に起こっていることをいうよ。なぜか俺の布団にアシュトンがいて俺とアシュトンの間の枕もとにはナイフ、もとい短剣が突き刺さっている。

短剣はおそらく俺が寝ぼけて投影、更に寝ぼけてアシュトンを敵と認識、投擲で間違いないだろう。短剣は魔力でできているのも確認済みだ。

ともかくこのような事態　アシュトン　イン　マイベッド　の状態を何とかしなくてはいけない。こんな状態をレナはともかく、セリーヌに見られた日には言いふらされる、もしくはこれをネタにからかい続けられるのどちらかの事態が待っていること請け合いだ。

ここは隣の部屋で眠っている彼女たちを起こさずに早急にベッドからぬけることが先決だ。

俺はすぐに布団を払い落しベッドから出ようとする。……動けない自分の体が動かないことに違和感を覚え自分の腰辺りを見回す。よし正面部には異常はない、しかし背面部つまり背中のあたりアシュトンが寝ている方を見て動けないわけをさとった。

俺の体に当たらないように上手く服だけを通るようにアシュトンの双剣が俺の服とベッドととつなぎ合わせている。おまけに服を脱げばいいような簡単な状態ではなく俺がアシュトンと同禽していたことを知らせてしまうようにアシュトンの短剣は赤い宝石を縫うようにベッドに固定していた。

殺気さえあればある程度の攻撃はかわすことができるだろうが無意識のうちに、それも寝ぼけての一撃となると本人の意思がない分かわすのが困難となる。酔拳使いとも戦ったことはあったがあれは骨だった…

……なんてことを考えている場合じゃなかった

隣の部屋では二人が起きた気配がする。急がなければ…どうする、どうするよ俺……

とりあえずアシュトンを起こそうと声をかけてみる。返事がない、ただの屍のよ…違う、そうじゃない

なら力づくで

そう思い俺はアシュトンの下腹部に肘鉄をいれる。アシュトンはそのまま動かなくなった…

動かなくしてどうするよ、おれ…

隣の部屋のドアが開いた。声は二人分。その声が俺たちの部屋の前でとまる。

まずい

そう感じた瞬間、もう手遅れであることをさとった。

と急に部屋の外で

「あっシロウ。もう起きていたのね」

「おはようございます、シロウ」

二人の声がする。

何？俺はここにいるぞ

「ん？誰だ？君たちは…それになぜオレの名前を」

知っているはずがない……なぜならオレはこの世界では本当の名前を名乗ったことはないのだから

「やだ、まだ寝ぼけてますの？シロウ、アシュトンはまだ寝てますの」

「そうよシロウ、あまりふざけないでよ」

「いや、だから君たちはいったい…」

その言葉と同時に部屋の扉が開かれた。中には二人。そして外には旅を続けてきた仲間の二人、そして俺がいた…

身長はやや低い、顔も同一人物のそれ…

ただ異なるのは髪の色、俺の場合銀髪の中に元の髪の色である赤が混在、だが目の前にいる俺の姿をする人物は完璧な赤髪だった。肌の色は俺は若干薄黒くなってきているだけだが目の前の人物は俺がまだ高校生だった時の色だった。

そう、あの聖杯戦争時の俺の背を伸ばした姿の男が目の前にいた。

「オマエハ…」

「貴様は…」

「「エミヤか」」

二人の声が重なる。これで疑問は確信へとかわった。

普通ならあり得ない会合。

それは世界と時代、宇宙をまたいでの元正義の味方同士の会合となった。二人のエミヤ、二人の正義の味方、二人の世界を追われたも

の、そして二人のシロウ……

この二人の出会いがエクスペルの…そしてまだ見ぬ敵との戦いに大きな影響をあたえていく……

そして、エミヤの左手に輝く俺の右手にあるものと同じ紋章が黄金の輝きを放っていたのだ

第１２話：ラクール（後書き）

二人のエミヤの会合となりました。
この設定はずっと以前から考えていましたがなかなか踏み出せずにいた設定でした。でも構想がまとまってきていたので、採用してみました。誤字脱字があるかもしれませんがあれば訂正していきたいと思います。

外伝１（前書き）

今回は時間の都合上短いですが、この話はどうしても入れておかなければと思い投稿です。５０００文字はいっていませんが今回のはあくまで外伝的要素を含むものです。ですが本編にかかわってくる外伝でもあるので投稿させてもらいました。

外伝１

外伝

？？？？？　ｓｉｄｅ

「提督！！！また銀河系セクターθアルクラ星系の第４惑星で高エネルギー反応が検出されました。発生エネルギー最大値０．１、我が艦に搭載の陽電子砲ほどではありませんが未開惑星にしては大きすぎる反応です。」

慌ただしいオペレーターの声が艦内司令室内に響き渡る。当たり前のことだ、科学技術の発達していない星…つまり宇宙に侵攻どころか電気すら利用されていないはずの文明の星で自分たちの科学力に匹敵するだけのエネルギーが計測されたのだ。驚かないはずがない。

「ふむ、先日計測した０．０６のエネルギーを上回る高エネルギーか。調べてみる必要があるかも知れんな。」

立派な髭を蓄えた見た目初老の男性が声を上げる。

「しかし、あの星は未開惑星。そう簡単には調査など……現地の住民にばれなどした日には未開惑星保護条約違反に触れてしまうのでは？」

若いオペレーターは進言する。

未開惑星保護条約、それは宇宙に出るほど文明が発達していない星に宇宙技術が発達した星の連合が関わり、その星の技術水準や文化

を壊してしまわないようにするための条約である。
確かに、もしこの星に立ち入り調査をすることで未開惑星保護条約にひっかかってしまうかもしれない、しかし……

「いや、やはり調査を行うこととする。今回が初めてではないのだ。あの星からは過去2回高エネルギー反応が検出されている。一度目は0．03…その程度ならばまだ見過ごすこともできた。次に0．06、明らかに科学技術が急速で発展しているとしか思えん。そして今回の0．1。これは銀河連邦内であっても十分脅威に値する。我が艦カルナスであれば抑え込むことも可能だろう。だが、これがもし先進惑星の誰かが技術を与えているのだとしたらどうだ。我らは宇宙の秩序を守らなければならんのだ。」
提督と呼ばれた男性が息を荒げて熱弁する。彼自身過去に未開惑星に関わりそこに巣食う事件を解決した英雄なのだ。その功績をたたえ若くして提督へと就任することとなった。

「しかし、現在我が艦は惑星ミロキニアの調査を任されているはず。これ以上人員を割くことはできません。」

確かに若いオペレーターの言うことは正しい。銀河連邦最高評議会より戦艦カルナスはミロキニアの調査を命令されている。これは守らなくてはならない。しかし、今回未開惑星で検出されたエネルギー反応はミロキニアで検出されたエネルギーを超すものであった。これを考慮すれば先に調べるべきはどちらなのかということだ。もちろん一方を未開惑星を先に調査するなど軍律違反もいいところである。ゆえに戦艦の一部を調査に回すことになる。だが、人員が足りないのだ。
彼ら一人一人にはやるべき任務がある。一人一人が独自の技術を持って調査に臨んでいるのだ。誰かが欠けるということは誰かが倍以上の働きをしなければ調査が成り立たないということである。

そこに一人の若い青年の声が響き渡った。

「父さん！いや、提督。私に調査任務を与えてください。」

そこには年のころ十代後半、金髪の若い男が立っていた。

「クロード少尉、しかしお前だけであの星に行かせるわけにはいかん。チームを組ませねば万が一の事態に対応ができない。」

「そうです、少尉。一人で行くのは危険です。それに、一人では調査に時間がかかり過ぎてしまいます。」

提督とオペレーターの声が響く。

「ですが、私以外に人員を割く余裕などないはず。もし、チームを組むとなると最低でも5人。専門の人員を割けば本来の任務に影響が出るでしょう。ぼく、いや私であればある程度の専門知識もあります。剣術も使えます。どうか私に調査の機会をお与えください。」

クロードと呼ばれる青年が一人で調査をとこだわったのには理由があった。彼は銀河連邦に入ってから、いや入るまでも長い間英雄の息子、つまり現戦艦の提督であるロニキス提督の息子であることにコンプレックスを抱いていた。彼が少しでも人と比べ秀でたことができると周りの人たちはさすがロニキス提督の息子と、尉官になったらなったで親の権威のお陰だというふうにクロードという個を見てくれる人物がいなかったのだ。

それが原因ともいえるだろう、クロードはこのカルナスの中で明らかに孤立していた。そんな彼が集団行動を、いや小部隊の指揮など

とれるであろうか。答えは否だった。

食い下がる息子を前にロニキスは悩んでいた。確かに息子は優秀な面も多い、しかし脆い。それが気がかりだった。だがこれだけ反抗する息子も珍しい、いや初めてのことかもしれない。それだけに意志は反映してやりたい。しかし、今自分はこの艦を統率する提督である。軽はずみなことはできない。

「父さん！あなたは今は提督です。でも昔は母さんと一緒に提督に逆らい未開惑星の調査に赴いた。別に父さんと同じことがしたいわけではありません。しかし目の前に問題が広がっているのを見過ごすこともできません。僕しか適任者はいないのです。どうか僕に調査のご命令を…」

その言葉でロニキスはついに陥落した。父親として、そして一隻の艦を守る提督として。

「クロード少尉。貴公の考えよくわかった。この際ほかに手段がないのも事実だ。今回のこと少尉に任せることにしよう。しかし、3日に一度、調査についての連絡を入れること…これが条件だ」

「承りました、提督。この任務私にお与えくださったこと感謝いたします。」

「クロード少尉、行くからには装備はきちんとしなければならない。だが、目的地は未開惑星、大出力の武器を持つわけにはいかない。だが高エネルギー反応０．１を計測した惑星でもある。危険を少しでも回避できるよう私のフェイズガンを与える。無事調査をして帰艦すること。以上だ」

「ありがとうございます、提督。クロード・C・ケニー少尉、任務につかせていただきたいと思います。」

そう言うとクロードは司令室を後にした。

「提督、本当によかったのですか。一人でそれも少尉は提督のむすk」

オペレーターの声は途中で途切れさせられた。そう、提督であり少尉の父親であるロニキスの声によって。

「クロードであれば問題ない。フェイズガンも与えた。あとは私たちがミロキニアの調査をできるだけ早く終わらせ、合流するだけだ。」

「「「「「「「「「承知いたしました」」」」」」」」」」

艦内で声が重なった。

これによりクロードが惑星エクスペルへと旅立つこととなる。通信機の故障など問題が発生するのだがここでは割愛させていただく。ちょうど士郎とエミヤが出会った時からちょうど1日後のことである。そしてクロードが降り立ったのは現地名称ラクール大陸南西部リンガの町のはずれの洞窟の傍だった。

そして急拠の戦闘でフェイズガンを使用し、所謂勇者一行と出会うことになるのだがそれはこれから少し先のお話。

進み過ぎた科学はすでに魔術のようなもの。では強力な魔術は科学

と同じようなものなのだろうか。ここに混ざり合わないはずの事象が交錯し、さらにエクスペルの命運を左右していく。
コンプレックスを持った才能のある青年と、才能はないが鍛錬の末に勝ち取った力を持つ青年。二人の出会いがどのように作用するのかはまだわからない。

しかし、これは……

新しい出会いの始まりである

外伝1（後書き）

クロードを出してしまいました。いろんな所を士郎が掻っ攫っているのですが、もちろんクロードにも成長してもらうつもりです。ただし、本編に登場するのは少しあとのお話になります。が…もちろんシロウ達と合流そして仲間への流れではあるのでゆっくりお待ちください。

感想お待ちしております。

あと余談になりますが高エネルギー反応1回目フルンディング2回目カラドボルグ3回目エミヤとの力の共鳴のつもりです。

第１３話：護るための剣（前書き）

本当に久しぶりの投稿となってしまいましたＯＴＺ
仕事が忙しくて全然書けないわ推敲できないわでこんなに時間が…

なので短いですが続編の投稿になります。
久々に書くと今までの字体を忘れていて文章が下手になっていてなんだか悲しい今日この頃
直したらいいと思う点、指摘などあれば感想送っていただければ幸いです。

第１３話：護るための剣

（（なぜ俺はこんなことになってるんだろう））

奇しくも二人の弓兵は同じことを考えていた。
それというのも

「「シロウ！なぜあなたが二人いるの（いますの）！」」

とまあ朝の一件以来『エミヤ』が二人して真相の追究をされていたりするからだ。

俺が異世界の人間だということはすでに周知の事実だがエミヤについて話すのは少し待つべきかもしれない…
いや、話すべきではない

なぜならばこんなことは普通はあり得ないからだ、確かに聖杯戦争では今の姿かたちは逆であろうとも二人の同一人物が出会ってしまうという奇異な経験もある。しかし、それは聖杯戦争という魔術システムの中で起こった奇跡だ

だがこちらの世界には聖杯も、ましてや守護者もいない。逆にいえばエミヤが授肉し存在する理由、方法が分からないのだ
不確かな情報、理由を述べれば混乱を招くおそれ、最悪俺たちの元の世界のような守護者に似たシステムの作動ということにつながるかもしれない…

俺達がレナ、セリーヌに追及をされている横で意を決したようにエミヤが口を開いた。

（まさか言うつもりじゃ！？）

「シロウは俺の双子の兄だ」

「「「「「なっ！！！！！！」」」」」

俺を含めた四人の驚きの声があがった……もちろん座っている位置の関係上俺の驚きの声は他の三人には聞こえていない。エミヤは続ける…

「俺はキリツグという、だが他人からはアーチャーと呼ばれるのでそっちで読んでもらえれば助かる。」

こいつどんどん嘘を使いやがる、それもキリツグだと…

「えっと…アーチャーさん…でいい…のかな？アーチャーさんはシロウの弟ってことだけど、シロウはこの世界の人じゃないって…」

レナの声を聞いたアーチャーが一瞬キッとこちらをにらんだ後

「シロウは事故で送られたようだが俺はそういう能力を持っている人物に兄を連れ戻すように頼まれ送られたのだ」

よくもまあこんなに嘘が出てくるものだ

「じゃあシロウは…いなくなっちゃ…うの？」

「あー、それは大丈夫だ。まだ理由は言えんがな」
少し重い空気が漂ってはいたがその場は凌ぐことができた。だがアーチャーには聞いておかなければならない。

時間は過ぎ、夜……

「なぜお前がここにいる！アーチャー！！」

人気のない路地で俺は目的の人物に声をあげる。

「ふん、そんなこと私が知りたいくらいだ。私は座に戻るはずだった、しかし座に戻る途中急に何かに引き寄せられ気付いた時にはこの世界の海岸に打ち揚げられていた。授肉してな、おまけに投影魔術や固有結界は全く使えないとくる。せめてもの救いは解析が使えたこと、身体がでかかったことぐらいのものだ。それより貴様もなぜここにいる」

「俺は剣の丘に至ってしまった、だが俺には仲間が、遠坂がいた。あとは彼女に送ってもらった…幸せになれと言われて。それだけだ」

「そうか、彼女も至ったのか」
そうつぶやく男の横顔は少し笑っているように見えた。

「それよりさっきの双子ってどういうことだよ」
「どうもこうもあるまい、まさか本当のことを言えるはずもあるまい」

「まあ、そうだけどさ。それよりお前なんだか性格丸くなってないか」
「答えは…得た…からな。……貴様もその様子なら時間遅れてしまったが多少は得たということか」
「答え…か…」
後半は聞き取れなかったがそれでもこいつなりに何かを得たのだろう
その後、談笑とはいかなかったが二人でこの世界で得た知識の交換となった
夜は更けていく
「ところで貴様は武具大会に出るのか？武器屋を探すのだろう、だが今からではもう武器屋で引き受けてくれるところなぞないかもしれんな、クックッ、なんなら私が武器を鍛えてやろうか？」
心配しているようでどうにも皮肉に聞こえるからこいつのしゃべりは不思議だ
だが、それは面白いかもしれない
「ならば頼もうか」
俺の言葉を聞いた奴の顔が驚きの色に染まる。冗談のつもりで口をはさんだというところだろう。
「正気か？」

「ああ、自分に鍛えてもらうというのも一興だろ」

「いいだろう、ならば鍛えてやる。見ていろ、剣製に恥じない最高、いや最強の一振りを準備してやろう」

ここにまさかのタッグが完成した。世界と契約を交わし英霊となり俺よりも長い年月を過ごしてきたオレの力を見るのも面白い

朝

鳥が起きるよりも早く俺は目を覚ました。やはり習慣というものは変えることができない。　昨日あれだけ驚くべきことがあったにもかかわらず変わりのない日が幕を開けた。

カーンカーンカーン

町のあちこちで剣を鍛える音が響き渡っている。朝早くからご苦労なことだ。

まあ大会が明日に迫っているともなると朝早くから仕事をするのも仕様がないことだろう。

城門をでて大きな木の傍に来ると明らかに風体の違う男が座っていた。着ているものが明らかに他と違う。光沢のある服にスニーカーのような履物、おまけに腰には銃のようなものまでさしている。

この世界であればまだあのような武器は発達しておらず弓矢が飛び道具の中心であるはずだ。

ということはエルネストさんと一緒…か

どうやらその男は携帯電話のようなもので連絡をとっているようだったが俺を見るなりあわてて機械をしまってしまった。
だが俺も弓兵、「目」には自信がある。
俺の目は彼の口の動きをしっかりと読み取っていた。
銀河連邦、少尉、高エネルギー体……か

俺はその金髪の青年に声をかける。
「おはようございます、早くから『お仕事』大変ですね」
何気ない挨拶、だがその言葉の中には今までの話をすべて聞いていた、いや…ここでは見えていたという表現が正しいのかもしれないが…という厭味が込められている

青年の顔色が変わっていく。そのうち未開惑星保護条約がどうのとブツブツつぶやき始める

「大丈夫ですよ、俺もそちら側の…いえ、そちらの存在を知っている人間ですから。もちろん未開惑星保護条約には俺はひっかかりません」

ここでエルネストさんに聞いていた知識が役立った。おかげで読み取った口の動きだけでも非常に多く有益な情報を得ることができた。

「そうですか、あなたも…僕は銀河連邦戦艦カルナス所属クロード・C・ケニーといいます。あなたは」

「俺はエミヤシロウといいます」

「シロウ、日本人の方ですか？まさかこの星で同じ星の人と会える

なんて思っていませんでした。」

笑顔で話しかけてくるがこのクロードと名乗った青年はかなり抜けているんじゃないだろうか？

まず調査対象惑星で出会った同郷のものをいっこうに疑う気配も見せず、所属や名前を簡単に打ち明ける。俺が本当に悪い人間であればそれだけの情報でもいくらでも利用できるだろう。

例えばその銀河連邦とやらを強請ることもできる。

だが、変に話がこじれなかったことは俺にとっても行幸だった。

俺がそんなことを考えているとふと視線を感じる。視線に顔を向けると城門の方に門番の兵士が集まってきており、数人がこちらにむかってきていた。

俺は大丈夫だが、クロードとやらはまずいな。

俺…騎士甲冑のような服装に紅いマント、クロード…いわずもがな

俺が逃げるように声をかけようと振り向くとクロードの姿はすでになかった。

否、なかったというよりも遠くに走って行く後姿がみえた。

そしてその場には名刺が置かれていた。宇宙に出るほど科学が発達していても名刺というものはどうも残っているらしい。ただそれは紙媒体ではなくプラスチックのような透明な物質でできていた。解席の結果はどうやら炭素媒体のものらしいがそれ以上は何か未知の物質も混ざっているようで詳しいことまでは分からなかった。

それよりこんなものおいて行くなんてな。もし俺が拾わなかったらこっちの世界じゃオーパーツものだぞ。

やっぱりどこか抜けている青年…だが憎めない青年でもあった

「また、あえるだろうか…」

意外とすぐに出会うことになるのだが

クロードとわかれてからはなかなかに大変な日だった。朝早くからレナやセリーヌに買い物に連れまわされ、アシュトンには武具大会のための訓練をせがまれ

どうやらちゃっかり自分の担当の武具店を探し出していたらしい。

そして、夜にはディアスの剣が盗まれるなんて言う事件もあったのだが…

盗賊ご愁傷様としか言いようがなかった。

だってあれだぞ、あのモンスターをずたずたに斬り裂いた空破斬（プチサイズ）の連射攻撃だぞ。

必死に逃げてる盗賊を匿ってやりたくなるほどに…

最後にはアーチャーが二本一対の剣を届けにきた。夜遅い時間で他の仲間はすでに眠っていたが、こんな時間まで納得できずに打ち直していたのだろう。

だが同一人物が鍛えただけのことはありどの売っている武器よりも手に馴染んだ。重さや硬さも自分にとって申しぶんのないものだった。

アーチャーが口を開く

「銘は護幸、剣だが俺たちの剣術の本文は守りにある。だが、己を

守り、自分の大切な人たちをも護る剣でありたい、そして生き残り全員で幸せをつかむ。その願いをこめ刀身に銘を刻んだ」

そう、まわりを助けることも大切だが自分が生き残り自分自身も幸せになるということ…それが「「俺が仲間から教わったことだ」」

そして、時間は流れ武具大会の日を迎える

第１３話：護るための剣（後書き）

初めて士郎のための剣を作ってみました。
今までは贋作ばかりでしたので…

また次回からは武具大会へ突入していきます。暇をみては少しずつ仕上げていきますので読んでいただければ幸いです。

覚悟（前書き）

ものすっごく遅くなったうえに短いです。時間が取れなくて。感想にも書いてはいますがいろいろあったもので。とまあ口上はそのくらいにして今回の作品は珍しくアシュトンメインだったりします。

覚悟

武具大会…それは世界中の強者、いや、兵と武具職人の名誉をかけて争い競い合う戦いである。
一つとして己の力を鼓舞したい戦闘者と、己の作る武具は最強と信じて疑わない者との協力関係によって生まれる、ある意味理想的な大会だ。

なぜならば、どちらが欠けても己の力量を世界に見せつけることは叶わない。たとえば力はあるが武具が耐えられなければ己を守るもの、相手を屠る道具の欠如につながる。そして、いくら素晴らしい武具を作ってもそれを完璧に使うものが現れなければそれは宝の持ち腐れである。

そんな己の自信と期待を背負った大会が始まろうとしていた。
そう、王都ラクールの地において…

時間は遡る。シロウとアーチャーが武具の協定を結んだ直後ある部屋では悶々と時間を過ごす背中に龍と不幸を背負った男がいた。

まあ、アシュトンのことであるが、彼自身もまた大会に出ることを決意していた。最初は自分がどこまでシロウに近づいたのか知りたいというものだった。あの森の中で一度見たシロウの動きが頭から離れない。いやそれどころか鮮明に、そして自分の理想の型として瞼に焼き付いてしまいついには陰でマネごとまでしてしまうありさまだった。それと同時に大会に出るということにも後悔もしていた。彼自身昔から大勢の人前でなにかをすることには慣れていなかったのだ。さらに言えば自分に自信を持つことがどうしてもできないと

いうこともあった。
実際、戦えばアシュトン自身はこのエクスペルでも上位に入る剣士であろう。しかし、それとは別に今までまともに戦った強者と呼べる相手は父以外にはいなかったのだからしょうがないのかもしれなかった。

「あ～、どうしよう。流れで申し込んじゃったけど、ぼくより強い人なんていっぱいいるんだろうな。シロウとは戦ってみたいけど、僕なんかがシロウと戦えるとこまで勝ちあがれるのかなあ。」
と悩んでいたところでふと思う…
「……あれっ、そういえば今まで本格的に戦ったことのある相手ってジーネだけじゃあ…あれ、でもあれも僕であって僕じゃなくて…あれ？もしかして僕ってほとんど実戦経験ないの？」
（まずいよ～このままじゃ観客大勢の前で恥を～）
何度も言うがアシュトンは実力はあるのである。ただ気持ちが少し、……かなり弱いだけなのだ。
とそのとき
コンコン
ドアをノックする音が聞こえてきた
「アシュトン、まだ起きてるか？」

「ん？シロウ？起きてるよ、どうぞ～」
「ああ、お邪魔する。」
そう言いシロウがドアを開けて部屋に入ってきた。入ってきた彼の顔にはどこか喜びというか、満足するものが浮かびあがっていた。
「シロウどうしたの？なんだか嬉しそうだね。」
「ん？ああ、アーｃｈ…いや弟がおれの武具を鍛えてくれるというもんでな。少し楽しみなんだ。アシュトンも大会に出るんだろ？どこに武具を頼んだんだ？」
「僕は城門の東にあるスレイヤーってとこで双剣を鍛えてもらってる。実はそこ以外に双剣を打ってくれるところが見つからなかったんだよ。でも武具のことより大会で恥をかかないかのほうが僕にとっては心配の種だったり」
そういった僕の言葉にシロウは目を見開いていた。
「いや、アシュトン。君は強いよ。少なくとも俺が今まで見てきた剣士の中では１０指に入るとおもう。」
（他はサーヴァントとかディアスとか吸血鬼とかだからちょっとレベルに差はできてしまうかもしれないけど、それでも彼は強い。気持ち以外は…）
「そんなことないよ、僕なんかシロウと比べるとまだまださ。」
「むっ、そんなことはないさ。アシュトン、君には俺と違って才能がある。」
「それって皮肉かい？どう考えても君のほうが才能があって強いよ」

だってそうじゃないか、そうじゃなければ僕は君の戦いにここまで酔わない。違う、戦いではない。あれは…そう、舞いだ。流れるような円の動きにそれに沿って回る剣の舞。そう感じていた

「俺のは実力も才能もないから一つを武骨に、そして高めることのできる限界にまで挑戦した結果だ。ただこれも戦場という場数、実戦を通してきたからこその覚悟の差だけだ。」

「そうなのかなあ、ん～～やっぱりそうじゃないよ。僕にとってシロウの剣はやっぱり理想なんだ。シロウには努力の才能がある。たとえ実戦で養われたものでも僕にとっては美しく理想なんだ。どうだろう、シロウ、僕と一戦稽古をしてもらえないかな？」

「稽古？俺なんかとしても君の理想には届かないと思うけどな。いやそれどころかへんな癖がついてしまうんじゃ」

「違うよ、僕のスタイルは変えるつもりはないしすぐに変える自信もない。でも実戦を積んでおきたいんだ。僕には圧倒的に経験が少ない。でも目の前には最高の生きた教本がいる。憧れがいる。それが理由じゃ駄目かい？」

アシュトンの目には、先ほどの自信がなくはっきりと目標が見えていなかった眼光ではなく、自分の目指すもの理想とするものがすでにうつっていた。

「いいだろう、ならば一戦交えようではないか。ただしこちらは遠慮はしない。死ぬ気でかかってこい。アシュトン、覚悟の貯蔵は十分か？」

「うん、僕を見てほしい、そしてシロウの力を見せてほしい。」

そう言って二人は夜の闇へと消えていった。その夜、数刻にもわたって剣檄の音がラクール王都に響き渡ったのだ。

覚悟（後書き）

すいません短くて。でも戦闘部分はやっぱり大会編においておきたかったのであえて書いていません。
やっぱり時間が空きすぎると目標としていた５０００文字が書けない、というか半分以下にＯＴＺ
まあ小分けして徐々に書いていきますので感想などお願いいたします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3906f/

Fate/star ocean sec 星海の弓兵

2010年10月14日12時03分発行